

わいふ ●ともに歩く女たちの雑誌●NO.181

Wife



〈特集〉 PTA・その苦しみと楽しみ

〈座談会〉 PTAの中の原日本人

連載第二回 近代恋愛婚姻史 北村透谷・美那の巻

隣人を訴えるとき ● アメリカの場合 北詰由貴子



有斐閣

東京都千代田区神田神保町2 / 振替東京6—370番

●いま、憲法を読むとき。子どもにも、親にも。

わたくしたちの憲法

宮沢俊義・国分一太郎著

一三〇〇円

童話風のお話や詩、子どもたちへの手紙などを通して、日本国憲法のこころを語りかけた本です。憲法学者と児童文学者との協力によって生み出された毎日出版文化賞（昭和30年度）に輝く名著を新装改訂して復刊しました。

中内敏夫・三井大相編（有斐閣選書）一四〇〇円

これからの教育評価

●たしかな学力と発達を保障する

通達簿の五段階相対評価やテストづけ、偏差値など今日の教育を歪める序列主義の評価を鋭く批判し、すべての子どもの学力を保障する到達度評価や教材・授業研究の実践をもとに、教育評価の新しいあり方を示す。

梶田正巳著（有斐閣選書）一五〇〇円

ボストンの小学校

●ありのままのアメリカ教育

ハーバード大学で海外研究員として一年半にわたって、「アメリカの教育」を研究・調査した著者が、ボストン郊外の小さな町レイクウッドの小学校の実態をリアルに描きながら、アメリカ教育制度の特質を浮き彫りにします。

絵本と子どものこころ

佐々木宏子著 一四〇〇円

●ゆたかな創造力を育てる（有斐閣選書）

思春期

暴力

●おとなたちの死角

東京都精神医学研究所編 六三〇円

あなたの老後を **OP叢書** 考えるシリーズ

38 老人ホームからの発想

錦織義典●その転換のたたかい。老人中心の生活を求めるホーム経営と処遇の知恵を園長自身が心を込めて語る。一三〇〇円 250

39 老いへの挑戦

わきだす ボランティア運動

杉並・老後を良くする会編 エブロンをかけた主婦たちの「草の根」からの運動―老いをみつめ老いに近づく。一三〇〇円 250

40 老人は枯れない

茶のみ友達相談から

和多田肇一 よき伴侶こそ生きがい―「無限の会」の活動を通して繰りひろげられる老いの性と人生模様。一三〇〇円 250

41 新・みんなの老後

自立と支えの知恵

黒田輝政 朝日新聞老人問題担当記者が老人福祉の実情を外国の例も含めて徹底取材した現場からのレポート。一三〇〇円 250

42 新しい老後の創造

武蔵野市福祉公社の挑戦

山本茂夫 エニークな高齢者対策として知られる武蔵野方式とは何か？ 公社の設立より現在までを綴る。一三〇〇円 250

43 女ひとり生きる

独身差別の中を生きぬく知恵

谷嘉代子編 戦争で青春を奪われたわだつみの女たちが独身差別のつめたい目に抗してひたむきに生きてきた戦後。一三〇〇円 250

44 輝やけ老人ホーム

現場での実践から

橋本正明 総合老人福祉施設として著名な至誠ホーム園長がホームのあり方を見直し、今後の進むべき道を示す。一三〇〇円 250

45 寝たきりにならないために

二瓶万代子●老後を考える。小金井老人問題研究会の10年余の歩みをつづり、地域福祉を根本から問います。一三〇〇円 250

ねぶ

181号

愛すること

考えること

働くこと

育てること

楽しむこと

たたかうこと

それらの

どれかひとつではなく

どれも

大切だと思っている

あなたへ

逐次刊行物

昭 58. 4. 13 和

国立婦人教育会館
情報図書室

わたしの同棲相手 大庭みな子・大庭利雄……………4

文・田中喜美子 写真・長野早紀子

わいふ誌上論争●主婦の働き・目的はお金か生きがいか……………9

高橋美智子・平田幸枝 VS 高野貴子・堀川憲子

特集●PTA・その苦しみと楽しみ

《投稿》

私にとつてのPTA 矢崎道子……………22

立場変われば 中畑文代……………30

▽座談会・PTAの中の原日本人……………40

出席者 井上文雄・田中喜美子・山田暁生・和田好子

《ルポルタージュ》

手をつなぐおとなたち 早川裕子……………56

すばらしいPTAは存在している

ウサギ小屋からの脱出 高野貴子……………73

子連れ遊びのガイド●横浜港の船に乗る……………81

LWIFE NO.181

肉親の老いを見つめる パートII 細野清美……………85

連載第二回

近代恋愛婚姻史 文・宮城道子／え・西田淑子……………92

恋愛は人生の秘やくなり——北村透谷・美那の巻

隣人を訴えるとき●アメリカの場合 北詰由貴子……………106

コミック・笑止・笑止 栗田 笑……………110

校内暴力・教師の言いぶん 大寄英夫……………112

わたしの一冊 松本弘子……………120

《読者のページ》

チャターボックス……………121

●親バカチャンリン●私の視点●エコー・おしゃべり

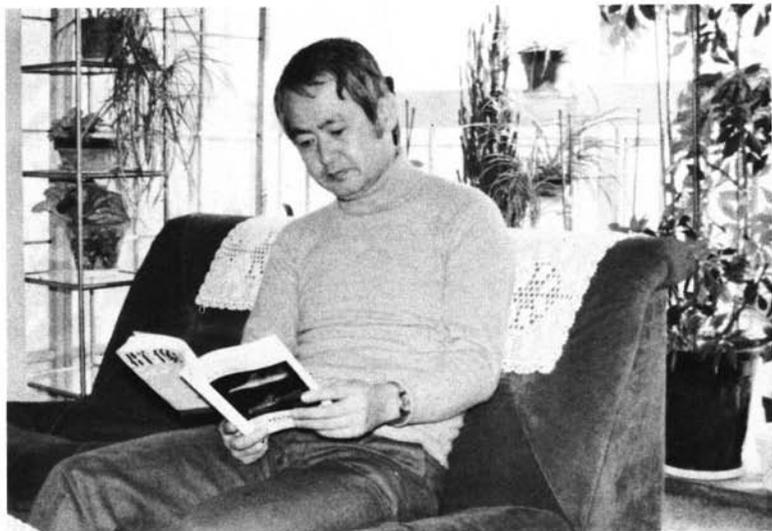
情報コーナー

サークルだより

書評

投稿規定……………142
テーマ原稿募集……………143
編集だより……………144

私の 同棲相手



大庭利雄
大庭みな子

写真・長野早紀子
文・田中喜美子



「十一年間アラスカにいて、日本へ帰ってき
てみたら、女の人と対等に話す機会がほとん
どなくてがっかりしましたね」

とかく妻以外の女を煙たがるのが昭和一ケ
タの男たち。しかし大庭利雄さんはれっきと
した昭和四年生まれである。

旧制静岡高校三年のとき、友人の妹のグ
ループの一人で一つ年下のみな子さんを知っ
た。七年後に結婚。

「友人結婚というのかなあ」

恋愛結婚、と大げさに断定したくない含羞
がただよ。

十二の時から作家になることを志していた
みな子さんが、利雄さんと結婚したとき、友
人たちは驚いた。芸術家肌の男友だちの多い
不良少女？ が、よりにもよって東大の応用
化学出身で技術屋という、かたいショーパー
の男性と結ばれたからである。

しかし妻の作品を、夫はほとんど読んでい



る。誤字を訂正したり、自然科学の知識のない妻がおかしな間違いをしているのを直したりもする。

「なんていって自分も間違っていたり」

とみな子さんは笑うが、夫が起きる頃床に入るような妻に、何ひとつ文句をいわない夫はそうそういない。家族ぐるみ企業にからめられる男の多い中で、何々をしちやいかんとか、あんな下らないこと書いてとかいいう言葉が、利雄さんの口から出たことは、ただの一度もないのである。

アラスカで十一年間暮した間、みな子さんはアメリカ人の学校で日本語など教えてはいたが、ごく普通の主婦だった。

「アラスカだったからつとまったけど、日本にいたらフラストレーションおこして離婚していたかもしれないわね」

とみな子さんはいう。「個」の自立しているアメリカで、夫婦単位の生活がごくすんなり



とできたことが、二人の性にあっていたのだろう。

人並みはずれたスポーツ音痴の妻を、自分の好きなスポーツに連れ出すのも夫の趣味。

「あんまり下手で、さぞ恥ずかしからうと思うのに全く平気。わかった、あなたのはスーペリオリティ・コンプレックスなのよ」

小説家の妻は夫をからかう。

利雄さんの仕事にみな子さんが役に立ったことは？ とたずねると、

「ゼンゼン!!!」とメガトン級の否定。

「うそばかり、若い時リポートの清書してあげたじゃないの」と妻も黙っていない。

一人娘が三年前伴侶を見つけて家を出て行って、ああこれでひと安心と、二人ともほっとくつろいだ。買物も、スポーツも、映画見物も、もちろんおしゃべりも一緒の夫婦である。

保育園に関するアンケート にご協力下さい！

- 保育園に子どもを入れたいけれど、資格審査がたいへんらしい……満員でとても入れないらしい……自発性のない子になるんじゃないかしら……悪いイタズラを覚えるのでは……母親の心は迷います。
- それにしても、漠然とした噂はあっても、保育園に関する正確な情報のなんと少ないこと！ 何とかこの情報不足を改善したいと、女たちが集って「保育園に関する手引書」を発行することになったのです。
- まずアンケートをとることからはじめました。ここに全文はのせ切れませんが、保育園体験を持つお母さんに対する具体的な質問です。
例えば
 - ・子どもを保育園に預けようと思った時に、預ける場所や預ける方法について、どこから情報を得ましたか？
 - ・子どもを保育園に預けて仕事をすることに不安がありましたか？
 - ・子どもを預けて仕事をしてきて、子どもにも自分にも良かったこと、悪かったこと、つらかったことなど、印象深いエピソードがあったら書いて下さい。
 - ・夫とどんな協力体制をつくっていますか？
- 保育園に子どもを入れるにはどうしたらよいのか、入れた場合子どもにとってのプラスとマイナスはどこにあるのか——「母原病」ということばも示す通り、母親がすべての子育てを背負いこんでいる現状がほんとうによいものなのか——スキンシップの大切さばかりが声高に語られる現在、新しい子育てを考えるために、ぜひこのアンケートに参加して下さい。
- アンケートに協力をおのぞみの方は、下記にご連絡下されば折返しアンケート用紙をお送りいたします。締切りが迫っていますので、4月15日までにご連絡を。 ユック舎 東京都文京区本郷2-16-9 Tel 03(815)6549

<あなたの体験はどんな小さなことでも役に立ちます>

わいふ誌上論争

働く目的

それはお金か生きがいか

高橋美智子
平田 幸枝

VS

高野 貴子
堀川 憲子

高野 貴子
堀川 憲子

出席者

高橋 美智子

フラワー・コトディネーター

二男あり、23、19歳

高野 貴子

住友生命勤務

三男あり、11、10、6歳

平田 幸枝

都立教護院保母

二男三女あり

19、17、15、13、8歳

堀川 憲子

江東区福祉事務所勤務

一男あり、3歳

●前号の論争・私はこう思う

子育て期間は家で——高橋

私は、空閑さんの考えに賛成です。三十五歳から、とはっきり年齢を区切ることはないと思います（もっと早くても遅くてもよい）が、ある一定の期間主婦が家にいるのはだいじなことだと思っんです。

主婦が働くって一口にいいますが、私は働き方に三通りあると思う。第一は結婚前からずっと働き続けている人。第二は夫の収入だけでは家計が十分でなく、経済的必要から働く人。第三はある期間家庭の中にいて、子供が大きくなり余暇ができたところで、将来を考えて働く人。

この三つをどれもこれも一緒にして考えるのはまずいのではないでしょう。それぞれ次元が違うのですから。それを全部一緒にして働くか働かない

か、ではおかしい。働かなければならない人と、働くか働かないかを選択できる人とは、問題の次元が違うと思います。

私は空閑さんのペースで自分もやって来ましたが、わりなくやっていくには、空閑さんのおっしゃるような方法しかないんですね。

無理しないほうがいい——平田

私もむりしないで、という線なんです。子供がある程度大きくなったら、勤めようかな、という考えでいたのですが、保母の資格を持っていたから、さいわい今の仕事につくことができました。いろんな意味で恵まれているとは思いますが。私立の施設では時間的に自由が利かない面が一ぱいあるんじゃないかと思えますから。企業ですとパートみたいな形でいいという場合は別

として、正社員となれば企業側に押されてしまつて、結局自分というものが出せなくなつてしまうのではないかと思ひますしね。

現在の仕事は一方では非常にきびしいのです。時間的なことか……

例えば、明日の勤務でいうと昼の十二時に入り、翌日の三時十五分までという泊りの勤務時間です。私としてはじめもっと楽だと思つて入つたのですが、やってみたらこの通りのきびしさでも大変でした。

子供は五人おります。上の方はもう大きいので、私に合せて動いてくれませうけれど、夫は家事など男のやるものじゃないというんです。最近少し手を出してくれるようになったのですが、七年前勤め始めたときは子供も小さくても何もかも私一人で行つたので、それはもう疲れました。

やはりこんな風に家庭が犠牲になるのでは、私自身やつてゐることですがひとにはおすすめてできません。後進の

若い方のため、また娘が保母になりた
いと言いますので、そのためにも頑張
ってみせようと思っておりますが、やっ
ぱり空閑さんのおっしゃるように、そ
れぞれの事情に合せて、むりしないや
り方がいいと思いますね。

子育てを口実にするな——堀川

私は空閑さんの考え方に反対です。
一番腹立たしく思ったのは、「主婦の
仕事って状況の変化に応じてやってい
けばいい。フルタイムで働くためには
若いうちからでなくちゃいけない。で
も小さい子を抱えてそれはできないと
思う。そこでむりをしたために、まづ
いことになってる人、多いでしょう。
むりやり働いて、子供が中学生になっ
て、家庭内暴力で悩んでもしょうがな
いでしょう。子供を生んだからには小
さいうちは家に入って、ほおすり寄せ
ていい子に育ててから出る。その間む
りするとても後悔することが多いと思
う」ってとこでしたね。私は卒業以

来、結婚し子供が生まれてもずっと働
き続けてきて、一度も家庭に入ってい
ません。それじゃうちの子は必ず家庭
内暴力になり、私が後悔することにな
る、というんでしようか。

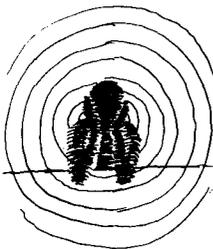
ほおすりよせて育てたからいい子が
育つ、というのは思いこみだと思っ
てすよね。最近多い子どもの自閉症は
専業主婦の子が多いんですよ。そうい
う事実を目をつぶって、自分が働かな
いのは子どものため、って自分で自分
を納得させている人が多すぎると思っ
たんです。

才能開発はユメ——高野

空閑さんの「妻能開発・稼げる主婦
への転身法」を、実はこの論争がわい
ふに出る二カ月くらい前に読んだん
です。じつさいあの方法でやってる人
が多いので、あの本がそういう人達の
げみになることは確かです。しかし私
自身に照らし合せてみると、あれで本
当に仕事になる場合は少ないんじゃな

いかと思う。逆にあんなことやってる
と、出られる人も出られなくなるこ
あるんじゃないのかしら。あの方法で
仕事を広げ、自分をきたえるのはじつ
は非常に大変なことなんで、そこま
だたいていの人は行かれないのに、「や
ってます」ということに甘えて、出る
機会を失う場合が多いんじゃないで
すか。

例えばフリーライターになる、とい
っても、ライター志望の人の中、ほん
とに何人がなれるのか。統計とってみ
たら、一人の成功者のうしろに百人、
いや何百人のものにならなかった人が
いると思いますね。



●私のえらんだ働き方

社会的人間として

生きたい

堀川

私が働き続けて来たのは、カッコよく言っちゃえば人間でありたい、という事です。人間は社会的な存在ですから、社会的な人間として生きたい。社会的人間ならば、精神的自立と経済的自立を分けて考えるのではなく、表裏一体のものとして結び付いていなければならぬ。亭主が労働力を売って一生懸命働いている。その金を使って教養を高めて、生きがいを求めて、それで亭主に対し大きな顔ができるか、と思います。私はやはり亭主と対等でありたいです。そのかわり夫に子供の世話もやってもらい、対等な夫婦の関係を作っていききたい。人間的にも成長していききたいのです。本当の意味で家庭を大切にすること、男と女の結びつきを大切にすること、そういう

うことではないのかしら。

私は学校出て就職するとき、当時は公務員は給料が安いときらわれた時代で、花形だった証券会社も受験したのですけれど、会社側の姿勢が分かったのでやめました。それは結婚したら止めて欲しい、独身でいる若いかわい子ちゃんを使いたいということなんです。私は四十になっても勤め続けられる職業に就きたかったので、公務員をえらんだのです。なぜ会社が女にそんな差別をするか、それは女は結婚すれば亭主が食わしてくるからです。女の自由ってそれなんです。男は一生どんなに辛くても働き続けなければならぬが、女は夫が食わしてくるから、自由に道が選べる。思想も男より自由で、デモに行けば男は会社クビになるかも知れないが、女はデモもできる、運動もできる。しかしそういう女

の自由って、みな亭主が働いて生活の責任を持ってるからなんです。それがはたして本当の自由でしょうか。

子育てが終って

から準備

高橋

私が結婚したときは昭和三十三年で勤めた経験もなく、女は家庭に入るのは当り前の時代でした。しかしいつかは自分として、何かをやる人間でありたいと思い、まず十年はとにかく一生懸命子育てをしてわが家を作って、あとの十年は自分の開発にかけて、二十年たってもまだ四十才ですから、それから自分の仕事ができるような段取りにしたいと思ったのです。そしてその通りになりました。とてもよかったです。

堀川さんのように、働き続けて来られた方は、それが人間的だという認識があたりでしょうけれど、たとえば経済的に、住宅ローンや教育費のために働かなければならない人の中には、本当は家にいたい人もいるかもしれませ

ん。経済的に余裕のある人は、また別の考えがあるので。将来は変わってくるでしょうが、現状はまだまだ、こうした三通りの働き方を認めなければならぬと思いますよ。そうして余裕のある人が、十分時間をかけて準備するのはとてもいいことだと思っんです。

組織に入ってこそ

働けた——高野

私もじつは、英語で仕事をやろうとして、学校へ行ったりしたことあるんですが、ちょっとやそっとでモノになるはずなのね。結局半年ぐらい前から生命保険会社に勤めて勧誘員をやっています。会社というのは組織をあげて、社会学から心理学からすべて動員して、社員を働かせようとしむける仕組みが出来ています。そこへ入るととにかく働けてしまう。それは人間を消耗品扱いする面は確かにあるけど、その組織の力のすごさには感じ入りませんでした。

空閑さん式に一人で勉強して、とい

うやり方は、私の周囲にたくさんいるけど、ほとんどモノにならない、自己満足で終わるようです。主婦の置かれている状況が、企業内に置かれる場合に比べて非常に甘い、ということも十分認識してやるのなら違ってくると思うけれども、そんな認識、してない人が多いんじゃないですか。そして一応やりますということ、一人前の

ペイが取れなくても満足してしまう。私の経験では、企業に入った方が楽です。ことに三十五過ぎたような人なら、パッと組織に入ってしまった方がモノになる確率が高いんじゃないですか。まず才能を開発して、ということかえって自分の才能を引き出し得ないことが多いと思います。

たとえば高橋さんが、主義とか思想

堀川さん





高橋さん

は別としてですね、もしはじめから花屋さんに入社して、仕事として伸ばそうという方針で来たら、今ごろ花屋の三軒くらい、持っていらしたんじゃないですか。

人それぞれでいい——平田

私の場合、経済問題で働き始めたといえます。夫が脱サラで自営業をはじめ

め定収入がなかった。しかし私も会社勤めの経験がありますので、企業の中で自分を殺して働いている男たちの夢というのに分かります。それで収入がなくても仕方ないと思って夫の思う通りにさせ、内職もしましたし、家庭の仕事も高橋さんとは違い、経済問題から洋裁編物みなやりました。そして子供が少し大きくなったところで、定収

入を得ようと外へ出たわけです。

私は経済的事情があるから、夫や子供をまき込んで、何とか彼とかやって来ました。しかし子供たちがついて来てくれたからいいけれど、もしいつて来なかったらどうでしょう。挫折していたと思いますよ。

私と同じようにやれといっても、それぞれの事情があるのですから、やはりその人にあわせたやり方でいいと思います。高橋さんのようなやり方もいいですね。だから私は空閑さんに賛成なんです。

家庭に入ることは本当の自由か、とか堀川さんはおっしゃるけれど、私など（年代もあるでしょう。四十代の女は）家庭に入ることは少しも抵抗ありませんね。

●家事と仕事の関係は？

夫の金を使うのは当然——高橋

私は家事が好きで、料理洋裁編物、

どれも苦にならず子育ての間は人の三倍くらい、そういうことで働いたんです。家庭で働いていたのですから、子供が大きくなり留守番もカギもできる

となって、さあこれから、と自己開発

に入ったとき、夫のお金をそれに使う

の、少しもやましいなんて思いません

でした。家の中でちゃんと働いていた

んですもの。あれお金を払って人を頼

んだら、とても亭主の月給じゃやって

いけません。一年中針箱が出ていて、

子供の衣類は下着以外買ったこともなく、ケーキも焼き、とてもしあわせだったと思います。私も家族も。

ですから、夫のお金を私のために使

っても、少しもやましくなかったです。

金銭に換算するという意味じゃなく、

家の中での私の仕事として受持って来
ましたから。それは三年間で百万くら
い月謝を使っただんですから、その間洋
服は一枚も買わず、皆自分で作る、と
いうくらいのははしましたけれど。

「家庭を大事に」は

口実では？——堀川

しかし空閑さんのいう「家庭を大事

にする」というのは、私と全く違うん

です。この方のおっしゃるのは、亭

主には不自由をかけず子どもにも手

かけて、家事をすべてやり、余った時

間で自分の好きなことをして、多少の

お小遣いを稼ぐ、そういう主張なんじ

やないか。私はそれが家庭を大事にす

ることだとは思えないんです。

私のやり方は波風はじめ立つけれ

ど、それはむしろ人間として成長する

のに必要なことではないか。それと、

家庭は雇用関係ではなく愛情関係です

から、三日掃除しなくて離婚される
ことはない。そういう場で安易に自

分の限界を、ここまでしかなないな

んで、決めていいだろうか。職場に入

れば周囲に評価されて、やらなければ

ならないから能力も出ますが、家庭の

中ではたして能力の限界がはかれるで

しょうか。

あせるな、あせるなというけれども、

私はあせて社会へ出ようとすると、

好きですね。

高橋さんはあまり自分の限界を、決

めこみすぎているんじゃないでしょ

うか。

家事の重荷で

つぶれそう——平田

家事については、原則として私がか

らなきゃならない、という態度を未だ

に持ってますけれど、でも現実にはで

きない、できないから子供を巻き込ん

で、手抜きを考えるのですが、あんま

り手抜きをしますと子供が、お弁当の

おかずもう少し、何か作って……なん

ていう。お母さん忙しくてできないよ、というと仕方なく自分で作って足したりしてる。文句いわれるのやはり辛いですね。

今一般に暇なお母さんが多いですから、とても手が行き届いている。そういうのを見ているので、うちのお母さんは家のことを放っぱり投げて言たってやってくれない……ときどきそういう文句が出てくるわけです。甘えでしょうけれど。

私が休日、少しはゆっくり休もうと思つてると、お母さん今日は何かおいしいもの作つて……疲れてるし適当に食べようよ……と言つと、適当にはいつでも食べてるんだよ。お母さんのいるときくらい、何かちゃんとやつてよ。と言われる。ごくたまにですけれどね、そういう子供の不満が出て来ます。

はじめ甘い気持で入つたのが、じつは泊りもあるという大変な勤務だったんですが、それでも現在家事の大部分

は私がやっていますので、朝起きたら、ごはん食べながら洗濯して、子供が出て行ったらサアツとふとんを干して、掃除してふとんとり込んで、センタク

●子育てと仕事のはざま

働いていても

子育てに自信——堀川

子育てのことですが、うちの子は生まれて一カ月も家にいなかった、まず無認可に預け、そのあと公立ですから、他人に預けてるわけですけど、私は、「育てているのは自分だ」って自信を持っていきます。八時間預けていても教育の責任は自分が持っている。保育さんとのコミュニケーションも保っているし、問題があれば園に申し入れもしている。

うちは一人っ子ですから、保育園でタテヨコの子供たちと関係を持ち、モノの取り合いも経験して、元気に成長して来ているんですよ。今の核家族

ものを干して、おかずの下ごしらえくらいして、もう走るように出るという感じですよ。

の閉鎖的な子育てでは、自閉症児も出てくるので、仕事上知っていますが自閉症をなおすために保育園へ入れてくれという申請がくる。ですからそういう意味では、自分の子が保育園へ行つてるのを、ちっともあわれだともかわいそうだとも思わない。たくましく育てられるだろうと期待しています。

ききわけのいい

我が子が哀れ——平田

出て行こうとするときに子供がからみついて泣く、あの切ない思いの時期は通り過ぎましたからね、このまま働き続けるでしょう。今ではたまの休みに、子供と遊んでやろうと思つても子

供が出て行っちゃう。お母さんに遊んで欲しいという時期はほんの二、三年ですもの、その間は家においてあげたいというのが私の気持なんですね。四人の子供まではその時期いてやれたわけですが、一番下の子はその点かわいそうで、どうも罪の意識があつてしようがない。

子供の年齢ですか？ 一番上が十九の娘で保母学校に行っており、その下が高校生の男の子、今度三年になります。その下は高校一年に入ったこれも男の子、その次が中二になる女の子、一番下が今度小学校三年になる女の子です。

一番上の娘は、希望の公立校に受からず定時制へ行き、昼間アルバイトで働いていたので、家事はできなかったです。男の子二人はもう、学校とクラブでめいっぱいでしたし……今のクラブというのは日曜祭日なし、弁当は作らなきゃならない。すごいですよ。朝練もありますね。お母さん方皆、豪

華なお弁当作ってさし入れするし、試合ごとに出て行くんですね。そういうことにはつき合わないことにしていますが、学校でも家庭でもそれが当たり前という感じで……。まあそれでも段取りをつけて、例えばお金を置いておいて、何々を買ってこれと書いておけば、その程度はやってくれますけど

ね。ところが保育園育ちの下の子は上の三人よりずっと思いやりのある、もの分かりのいい子なんです。何ていうんですかね、そういうのを見るとかわいそうになってしまう。やっぱりわがママを言わないですから。帰ると私の側へベタッと来るでしょう、お母さん、今日は疲れてるから離

平田さん



れて……というハイ、と離れる。離れて、少ししてから、お母さんもう疲れなおった？　なんていわれるとかわいそうでならないですよ、そういう思いやりがどうしてか上の子達にはなかったです。これが人に預けられて、集団で育った子の違いかなあ、と思うとかわいそうです。

でもそれは親だけの思い込みで、子供は大きくなれば、そんなこと皆忘れちゃうんだから、私が気にしてるだけなんだ、と思うこともあります。

子育ては胸でやりたい——高橋

高野さんは花屋が三軒、持てたろうとおっしゃるが、私はそういう働き方はたくなかったのです。親として子育ては頭でするのでなく、胸でしたかった、そして胸でしてきました。下が小三、上が中学へいくまでおけいごとにも出ませんでした。

子育てについては、平田さんのおっしゃること、私すごくよく分かるわ、

保育園育ちのお子さんが、わがまま言わないのかわいそうだという気持ち。私たちは子育てを胸でする、情でする世代なんですよ。

手をかけることが

よい母か——高野

子育て問題ですが、手をかけてやらないことに罪の意識を持つ、過保護が当り前。それが今の常識なんですわ。

でも私は、専業主婦で上二人の子をべったりで育てて、失敗だったな、と思う点ありますよ。下の子は保育園で、平田さんのお子さんと同じに、やっぱりとても聞きわけがいいです。

でも世間ではあなた子供預けてまでどうして働くの？　とくる。でも子供を鍛えられますよ。

あくまで個人の自由——高橋

堀川さんは亭主が食わしてくれるから女が就職なんかで差別されるとおっしゃるが、仕事の報酬は能力に応じて

払われるもので、その部分もあると思う。就職や賃金の差別はやはり世の中の全体の意識が変わらないとだめで、その意識はおそらく庶民から変わっていくのだと思いますが、でもそう簡単じゃないでしょう、長い年月掛かるのではないのでしょうか。今現実はともそままで進んでないですよ。

女子大生が多数就職ししかも結婚、出産でやめずに働き続けるということとは、たしかに女性の地位向上に役立つと思います、でもそれぞれの家庭には事情というものがあり、出られない人もあれば出たくない人もあるでしょう。それを能力があるから、とか地位向上のために、とかいう理由で出る出るということとはよくないと思いますね。自分が決めることですよ、働くか働かないかは。私としては世の中がどうあると、天下国家がどうあると、自分のやりたいことをやる、そう考えて実行してきました。それでいいんじゃないですか、その人の生き方、ですよ。

見据えたい社会的状況——堀川

私は高橋さんのように、個人の能力の問題としてだけでなく、やはり女が社会的にどんな立場に立たされているか、という面からとらえたいですね。



高野さん

空閑さんは女の状況というものを、住宅ローンとか教育費とか、家庭内のことだけでとらえています。もっと大きな社会、経済的なもの……昔の富国強兵、最近の高度成長、またその行き詰り、あるときは生めよ増やせよ、ま

たあるときは産児制度と、そういう政治や社会、経済の条件に規定されるものとしての女の状況を、やっぱり考えなければいけないと思う。個人的次元で自分はこうだと思っても、じつはそうじゃないこと、たくさんあるんですね。

高橋さんは天下国家はどうでもいいとおっしゃるけど、夫に赤紙が来たらどうするんです？ それに対して何ができるかを、考えなくてもいいんですよ。こういう角度からものを見ないかぎり、個人の幸福も侵されていくと思うのね。私など、自分がこう生きたいと思っても、それを妨害するものが社会的にやっぱり出て来ましたよ。高橋さんは気が付かないだけじゃないかしら。

女の考えも作られる——高野

高橋さんのおっしゃる、世の中がどうあろうとやりたいことやればいい、人それぞれの生き方だって考え方、私

も大疑問がありますね。天下国家の影響力って、強いですよ。自分で私はこうなのよ、って信じてること、意外とそうじゃないこと多いですよ。高橋さんはやはり気が付いてないだけだと思います。

私は現在女の足を引張ってるのは社会的常識だと思えますね。お金を稼ぐことは貧民のやることで、高級なことではないという常識があるのよね。私は高橋さんのおっしゃってることの中にもそれを感じました。そういうこ

●何のために働くのか

金のためには働かない——高橋

確かに夫に赤紙が来るという事態には、それなりに対処しなければなりませんし、私も男の子二人あるんですから取られるのイヤですよ。でも私が自分がかうしたい、と思ってやって来て、堀川さんのように妨害を受けたこと

とによって、自分自身を限定しちゃうって、キレイな方向へだけ行こうとする、無意識下の意識があるのよ。私が保険の外交やってるといって、あなたみたいな人がナゼ？っていわれる。稼いだいからよ、ってはっきり言うと、それで結構ねという人は誰もいない。子供はどうするの？ から始まって悪いことしているみたいに言う。そして皆子供のためという理由で自分を限定しておけいごとをやって満足しちゃうという、もうワンパターンですよ。

て、なかったんです。

私は女の人が仕事を持つことにはけっして反対じゃない。ただその持ち方は人それぞれではないですか、ということなんです。

私はお金を稼ぐことが第一の目的とは考えなかった。夫のお金で食ってるというけれど、私は家の中でちゃんと

働いていたのです。ですからやましさなんてまったく感じませんでした。

稼ぐ姿勢が大切では——高野

高橋さんの、庶民の意識が変らなければ就職賃金の差別はなくなるならいってお話ですが、私その意識というのは金銭に対する意識の問題だと思う。高橋さんが最初からお金を求めて働いたら、成果がもつと上がり女の能力として認められたはずですよ。働く以上お金の取れるチャンとした仕事につくことがまず大切だと思うんです。大多数の人、ある程度の多数の女が、働くのはお金のため、って割り切ったところから世の中変るんじゃないでしょうか。それなのに主婦はとかく、お金なんて……とか、精神なのよ……とかいってところから出発する。それでは革新は起きない、世の中変りませんよ。そういう甘え、よわさというのが、主婦の能力を減退させるオオモトだと私は言いたい。

(まとめ・和田好子)

(え・松本をきえ)

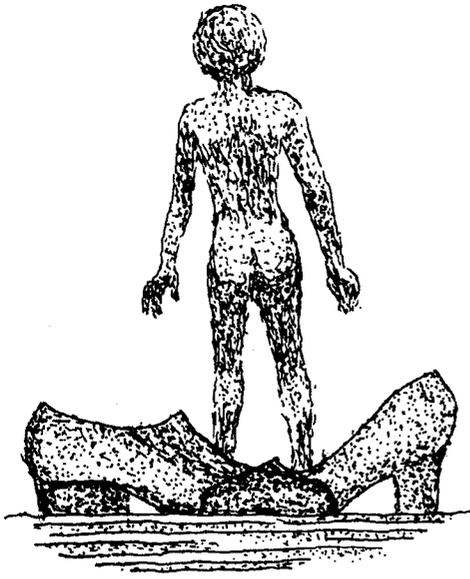
PTA その 苦しきと楽しみ



私にとってのPTA

矢崎道子

(東京都台東区)



PTAって何なの

PTAと名のつくものに関り合って十年になるうとしている。長男の小学校入学と同時にさしたる感慨も疑問もなく、いつの間にかPTA会員になっていた、というかなりいい加減の感じに関り合ったのだが、最初は一学期に二回程の父母会も、先生のお話が終るとそそくさと立ち去る人がいる中で、居ごこちの悪そうな顔のまま、ポチ／＼と話が出る。しかしお母さん達はあまり話をしたくないのだな、ということが何度か経験しない父母会でわかる。

まだその頃PTA主催の父母会という形は独立していなくて、学校が授業参観とか夏休み冬休み前の諸注意などのための父母会開催に併有されていて、担任の先生によってはいわゆるPTAの学級父母会というものはなくて、先

特集投稿

生が先生としてのお話と、あとは先生が司会役になって、何かお話、質問はございませんかという調子の父母会が主だったようである。

その頃（長男が小学一、二年の頃）のPTAと私の関りと言ったら、父母会とPTA行事への参加であったが（これは今でも同じことだが）、PTA会員になって一年も過ぎようとする頃には、父母会の有様にもPTA行事の内容にも少しづつ疑問を持ち始めた。

二年目に学級委員を引き受けて、父母会の低調さをなんとかしなければと独自で回覧ノートを廻したり、父母会報告をプリントして班毎に回覧してもらい、なんとか共通項を見つけようと努力はしてみたが、お母さん達は、親同士の横の連帯を持つとうとか必要なんだとはさらさら思っていないくて、お母さん同士何でも話し合えたり相談したり励まし合えたり出来る学級父母会を、と目指した

私の思いは空転することが多かった。

この当時は、学級PTAを大事にしていこうなんていう体勢すら確立されていなかったし、役員をやっていたってPTAって何なの、という問いかけすらなかったようだし、例年の行事を事なく消化するのに粉料していたように私の目には映った。

ただその年その年委員になった人達同士は話す機会もかなりあったから、他のお母さんたちよりは気持はほぐれていた。しかし委員という役割と仕事を離れてしまうと、また遠くなっていった。そして、その輪が広がるといってしまつて、その輪のみやお食事会でもしましようという集まりなら、続いていったであろうし、楽しかったのであろうが、ただ単に遊びの集まりの中から学習へ発展することはない、ということがわかった時点からは、目的のない集まりをしようとはしなくなっていた。

ホッペでしゃべれないPTA

PTA行事も五つの委員会のなわばりの争いが多くて、人間関係が複雑怪奇？な上に、発言したことの見返りの大きさに驚くことも多々あった。

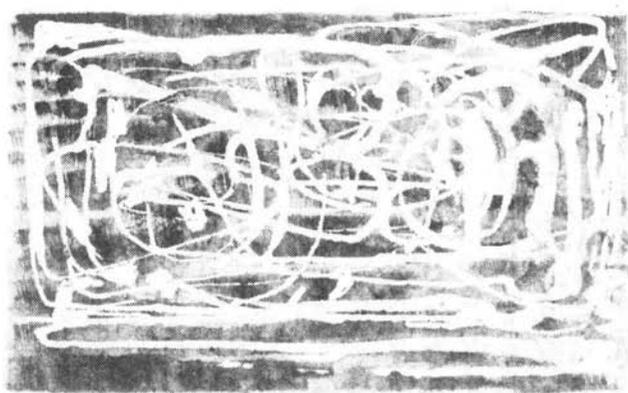
PTAとは本音でしゃべれないのだと思ひ知らされることも沢山あった。真剣に真面目にPTA本来の活動を、なんてアドバルーンを上げて歩いていくことがホトホト馬鹿らしくなり、委員をやつては一年休み、またあきらめられずに、今度は方法を変えてやってみようかと、またまた委員になったりしてPTA活動の最前線に立つこと何度かあったが、PTAの中核に入れば入る程派閥意識に悩まされて滅入っていった。

それでもなんとかお遊びPTAではなく、子供を核にキチンととらえた学習団体としてのPTAにしていきたいという望みは捨て切れず、あらゆる場

で問題提起をし、具体化し、学習サークルへの道をも思ったが、ひとりよがりです浮き上がるだけで自滅することばかりだった。

学校給食のこと、学校へ着ていく標準服（制服とは言わない）のこと、PTA規約改正、教科書問題など、その他どれもこれも様々な厚い壁に阻まれて、みんな中途半端な形で終わってしまっている。

PTA活動は全て先生指導型であり、先生方自身も、PTA会員である前に先生という職分を放棄出来ないで参加してしまっている。各委員会でも、お母さんお父さん会員が一つのことを討議し、決議出来る段階になって、例えば決議してしまったことでも、「それは困ります」の先生の一言で、ボツになることは過去数限りなくあった。先生が何故「それは困ります」なのかの説明は、問答無用という程の感じで切られていった。つめよればそれはもう感情論になり、決して良い方向へは向いて



いこうとしなくなる。
意見は批判、非難と受けとられ、PとTの間はギクシャクしていつてしまふ、何にも言わずに、「先生の御意見ごもっとも」で動いていた方が活動も

し易く、つつい事なかれになっていた経過が手にとるよう解つてゆく切なさ。

「お金は潤滑油だよ」と先輩に諭され、ああそうか、そういうこともあるのかと己を反省することも何度か「たかだかのお金で、それが結果として子供にプラスになって返っていけば、お金は生きてくる」という説明は説得力さえある。いじいじと重箱のスミをほじくるような（決してそうなのではないのだが）ことをしないで、鷹揚に楽しく接していくと、人徳さえ出るといふこともわかった。

だけど本当にそれでいいのか、今これ程に子供達が荒れ、教育の荒廃が問題にされている状況の中で、親達が何の問題意識もなく自分の子さえよければの行動で、子供達は健やかにのびのびと育っていけるのであろうか。PTAを捨て切れないでいる私は、ここにひっかかって前へ出ることも後へ下がることも出来ないでいる。

子供達へ目を向けよう

近接地域にはほ似かよった状態で生活しているお母さんお父さん達。自分達の年代も同じようなら同じような年頃の子をもち、同じ学校へ通わせている親たちなのに、なぜもっと真剣に子供達のことへ目を向けようとならないのか。

P T A のよさは同地域に同学年の子をもち、同じ学校へ通っている、というところにあるのではないのか。そのP T A がスポーツクラブであったり、手芸、料理、着付などの講習であったりだけでいいのか。

特集投稿

教育委員会や区役所の社会教育課からの学習参加への呼びかけも、年間を通すとかなりある。個々の参加が非常に少ないことから、頭割りで人員動員をかけるのには、P T A は最も手ごろなところにあ

る。

今年度になって本P T A に呼びかけられたものを列記する。

。青少年の指導育成——一年を通して小中学生のリーダー養成、高校生以上の地域リーダー養成を目的

。P T A 指導者研修会——運営、活動のあり方の学習

。婦人学級——仲間づくり、家庭生活、文化、歴史学習、テレビ放送を利用した学習

。家庭教育学級

。生活学校

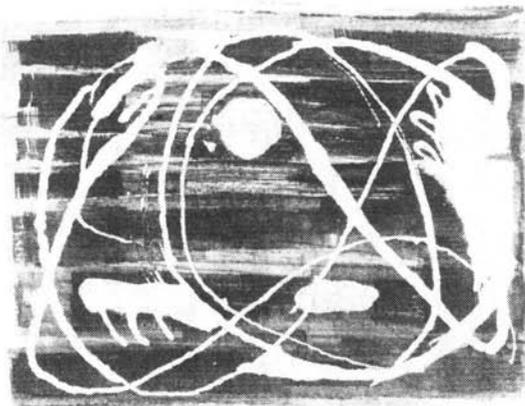
。人権尊重の教育——社会同和教育
。婦人講座——婦人をとりにくく課題についての専門的な講座

。P T A 全国大会への呼びかけ

。16ミリ発声映写機操作の講習

以上ざっとあげて見た。抜け落ちているものもあるかと思う。

呼びかけのプリントが各家庭へ配布されるものもあるし、プリント枚数が少ないものは各委員会毎に配布して、参



加人員を各委員会何名という形で任ず。自主参加はほとんどない。参加を要請された方達は委員をやっている今年はもう仕様がなっていないと思って参加する。

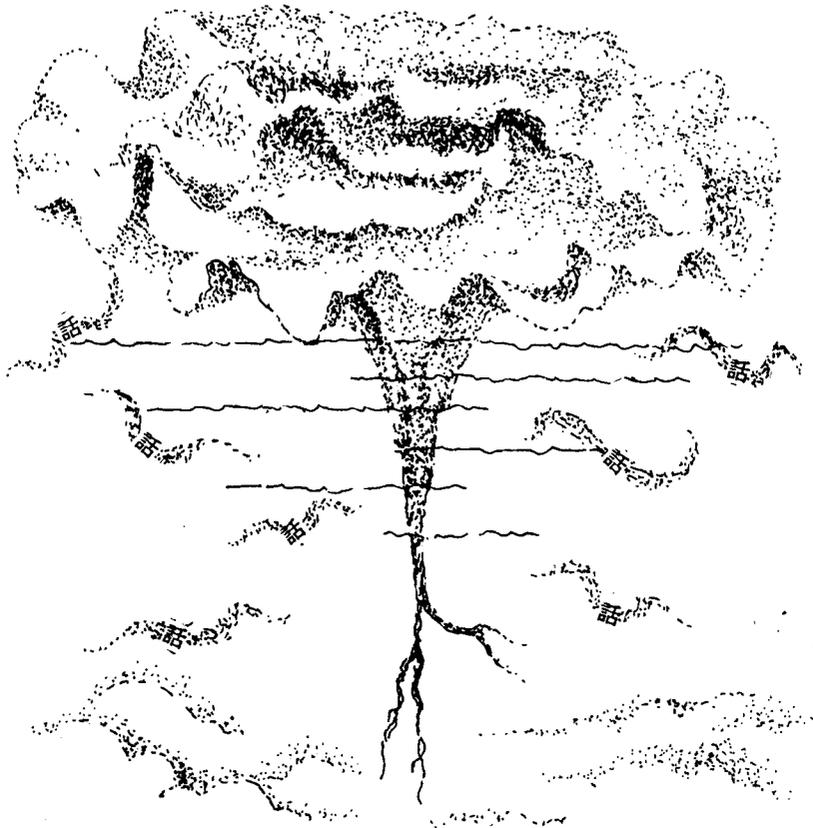
テーマに関心があるうがなかるうが引っぱり出される、それでもまあいいだろうと思う。こんな変則的な形で参加したにしろ、いっどこで誰がどのよ

特集投稿

活動することには大変消極的である。
会費月額ひとり二百円（五十七年度）
であるし、何口以上という口数申し込みはしていないので、会費を払うこと自体にはあまり抵抗がないのであろう。せめて会費だけでも払っておこうということなのか。

自主性に乏しいPTAだから、会員総員が自ら企画し活動するという、根っこところからの発生がない。誰かがやってくれるという意識が強いし、またそんな風で長い間動いて来たのがPTAでもあるわけだから、その意識変革を求めるのは難しいと言えそう

だ。
任意で入会するという自主性を求めて、面倒な入会手続きを段階をふんでやっているにも拘らず、その良さが目に見えてこない空しさ。何故入会するかとひとりひとりに問い尋ねたい気持があふれて、一時は「貴方はPTAをどのよう



考えPTAに何を求めていますか」と尋ね歩いたこともあった。そんな動きをすると本当にいろいろ陰口を言われて辟易した。もうPTAなんかやっぺられない、と癪癪を起しかねず、事実そんなことの翌年はサラ／＼と活動から離れてみたりした。

そして昨年、今年と強力に支援してくれる人間が何人かいてくれて、彼女の熱意にほだされて（こんな言い方は申し訳ないと思う）、今副会長をしている。どうせここまでやるなら会長をしなきゃ仕様がなだらう、と自分でも思ったし、支援してくれる人達もそう言ってくれたが、いざ会長職の仕事を再確認すると、外交的な場への出席（それも儀礼的な）があまりにも多いこと、それが日中であって私の仕事との両立が難しいこと、やはり潤滑油としての交際費の消費を合理化する勇気に欠けたことがブレーキになって、私には残念ながら会長職はつとまりそうもないとあきらめ、会長補佐で

一番楽なポジションにしてもらう。

楽なポジションであるにもかかわらず、様々な情報は会長に準じて入る。他の三役、総務会計には耳に入れないでくれという話を聞くことが出来るのが唯一のメリット？。しかし、意味あり気にこの話は副会長までという話でも、別段他の誰に話しても一向さしつかえない内容のものが多く、秘密気になくてもいいのと思ったりするが、ただ、事が意味もなく大きくなったり、尾ヒレのつくことを恐れての処置に過ぎない。

全くの話がPTAとはこの手の話が多過ぎるのだ。「ここだけの話よ」と言いつつ、暗やみでいつの間にか水が浸透と上がってくるように、あ／＼という間にここだけの話が広まる。このうわさ話が曲者で、PTA本来の活動を著しくさまたげているのも事実だ。心ある人はPTAから逃げ出したくなるのは、このことが原因なのが多い。別に男と女のスキャンダラスなうわ

さではなくても（そういうこともあるが）、やることなすことひとつひとつがいいように言われていくのに耐えるには、大変な努力と忍苦を強いられる。一所懸命やればやる程言われるのもPTAだし、一言言う毎に浮き上がっていくのがわかるのもPTA。もうそうなるためのPTAかわからなくて、心底はうり出ししたくなるのも当然の心情のような気がする。

まるでPTAの委員や役員をやっているのは馬鹿の見本みたいに見える。そう思っただけで目立ちたがり屋さんや、遊びたがり屋さんがPTAの適当なポジションに並んでくる。益々PTAはうとんじられる。どうすればいいのか、と考え込まずにはいられないが、正直な話、私はもうPTAは結構でゴザイマスの心境である。

がしかし、PTA無用論を言うつもりは全くない。もし仮りにどれ程最低のPTAでも、あった方がよいのである。それはいざという時、PTAの活

特集投稿

規約の見直しを

力を結集することも可能な未知数を含んでいるからでもある。組織は一度つぶしてしまふと、再び作り上げていくことは大変なことである。ことに昨今の社会情勢の中にあつてはなおのことだからお遊びPTAであろうと何だろつと、PTAという組織は、明確にキチンとした形であつた方がよい。

うとんじられるのは、その時その時の活動内容とそこにたずさわつた人達への報酬なので、PTAの組織そのものがうとんじられていゝのではないからである。

そのためにもPTAの規約の見直しは是非必要と思う。因に昭和二十二年三月、文部省が、PTAの資料として都道府県にあて送付したものに、父母と先生の会——教育民主化の手引——なるものが

ある。その内容は、戦前にも父兄会、母師会、保護者会、後援会とかあつたもので、先生方から説明を聞き、注意を受け、依頼を受けるといふ、常に受身の活動であつて、これらのことを充分反省し、先生と父母が平等な立場に立つた新しい組織を作るのがよい、というような事柄が書かれている。

そして昭和二十三年十月、父母と先生の会（PTA）第一次参考規約が文部省から全国PTAに配布される。昭和二十九年三月第二次参考規約配布。

この第一次参考規約から第二次参考規約の間約六年、文部省は大きく手直しをしている。手直しされた部分が大事故なところでは何故ここが手直しされなければならなかつたのかは勉強する課題に不足しない。

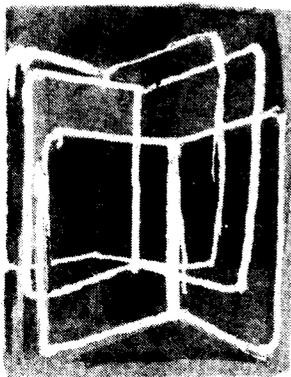
現PTA規約は恐らくこの第二次参考規約に基づいて作成されたものが多いと思う。

昭和三十四年PTA専門委員会報告（東京都社会教育委員の会談）。

昭和四十二年三月小尾通達。

東京都教育委員会教育長、小尾庸雄氏によつて、義務教育学校運営費標準の設定と公費で負担すべき経費の私費負担解消について、の通達が各区教育委員会教育長宛、各区立小中学校長宛に出されている。

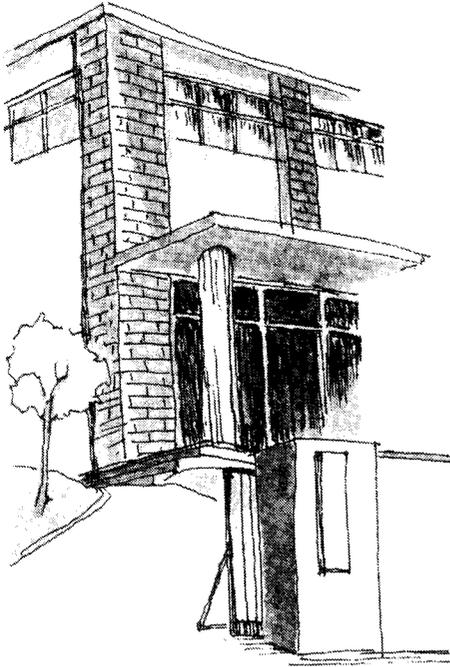
これらのものを充分比較検討の上、是非とも自校のPTA規約を見直して欲しい。



立場かわれば

中畑文代

(東京都三鷹市)



P T Aと私との出会いは大学を出てすぐでした。……う——、ではママさん学生だったのかと、翔んでる女のハシリを想像しないでください。Pとしてのかわりをもったのではなく、Tとして必然的にかかわりをもたされたのですから。TとしていやいやP T Aに参加していた自分、Pとして進んでP T A活動に取り組んでいる自分、どちらの顔も、決してごまかしではなく、私本来の姿だと思っています。これからのP T Aへの取り組みの再活力になるのではない、P T Aとかわった十五年間の自分を振り返ってみようと思います。

TとしてのP T A

T時代のP T Aへの印象、感想は、ひと言でいえば「お母さん達って恐ろしい!!」「成績、成績と、子供の成績のことばかり」——教育の腐敗の根源ここに在り——なんてところです。と

特集投稿

いますのは、

新卒の国語の教師として、立川市の中学校へ赴任した時のことです。担任した学年は二年生。地域がら、今でいうつつ張りの子供も多く、かなり荒れた学校でしたが、若い教師にとつて、その子供達と触れ合っていく楽しさは格別なものでした。

中学の二年生にもなると、一年間の学校生活の結果、非行性を持つ子供に關しては、周りからとかく色めがねで見られるようになり、それが子供にはかなりの負担のようでした。それに、中学校には若い教師が少なく、小学校の時のように先生と一緒に汗を流し遊ぶなどという光景はめったに見られませんが、寒い時など、職員室のストーブを囲み、お茶を飲み暖をとり、語り合うことが多い教師、エネルギーのあり余った男子生徒とは、おのずと考え方だけでなく、隔たりがでてきてしまうのです。平均

年齢が高く、温和なことを好むせいか、すべて穏やかに穏やかにという方針、子供達にとつては、ストレスがたまりやすい環境ばかりでした。

そんな中で、当時としては若く、美しく(若ければみんな美しいもの)、エネルギーシユな(大学紛争華やかな時代をくぐってきたせいでしょうか、何事にも挑戦的な)私の存在は、子供にとつては目新しく、かなり価値あるものだったようです。

ところが母親達には全く逆のうけでした。学級担任が、女の、それも新卒の教師なのですから、ただ「女」「新卒」だけで二重悪のレッテルをはられます。どんな教師なのかという中身などどうでもよく、ハズレもハズレ大ハズレの感をもたれてしまいます。小学校ではこの「当たり」「ハズレ」がよく取り沙汰されていますが、教科制をとる中学校でも同じようです。

そこで、若く挑戦的な私、女・女・新参とバカにするなど、朝早くから夜

遅くまで、家庭訪問やら早朝懇談やら学級通信作りやら頑張ったのはいいのですが、お母さん方はいけません。

「先生はお一人だからできるんです」「お子さんのいらっしやる先生は、保育園のお迎えがあるとおっしゃり、父母会の途中でも打ち切つて帰つてしまふんですヨ」「お子さんが、ハシカなんかですと一週間も休まれるし……」

頑張ることが、かえつて仲間の首をしめているのではと、頑張ることが悪いような気にさえなつてしまいました。また逆に、「先生はお一人だから分らないんですヨ、子供を持たないと、親の気持ちに分らないんですヨ」とも言われたことがあります。これは要するに子供を持つ男の先生がいいということなんでしょうか。

受験戦争という言葉がささやかればじめ、問題にされはじめた頃ですから、都立高校、私立高校ともに試験科目である国語の教師は、やはり親にとつて興味ある存在なのでしょう、PTAの

席へ、やたらお声がかかったりしました。授業が終わり職員室へもどると、机の上に「会議室でPTA学年委員会を開いております、ご出席ください」とのメモが置いてあったので、最初は、「学年主任だけ出席しましょう」と朝会の時話したのに、私のクラスの子供のことが問題になってるのかしらと、終礼にも行かず子供にまかせて駆け付けたのです。すると、それまで学年PTAの学習会の話をしていたらしいのに、委員会の席が急に国語の学習方法に対する質問の場になってしまいました。

「先生、先生こちらへ」と言われ、真中に座らされ、それからが大変、黒板には確かに「学習会について」と、書いてあるのに、矢継ぎ早に、「先生、国語の点がよくないんですが、どんな勉強をしたらいんでしょうか」「読書が国語の力をつけると言われていますが、どんな本を読ませたらいいでしょう」

「先生は、教科書以外にプリントを使われますが、全クラスに配られるんでしょうか」（クラス数が多いため、全クラスを一人の教師で担当していないためにでた質問）
などの質問がとぶのです。およそ、PTA本来の会議とは関係ない質問に非常に当惑したのを覚えています。日頃見られないような母親達の目の輝き、あまりの熱心さに圧倒されそうでした。でも、どうして学年PTAの委員会で国語の家庭学習方法の話をしたりせねばならないのか不思議でたまりませんでした。

小学一年生じゃあるまいし、母親が机の傍でこやかに「はい、五段活用を言ってごらんさい」「そうじゃないでしょ」「そう、はい、よくできました」「おりこうね」なんて言うわけないし、なんのために母親達は学習方法を聞いていくのでしょうか。PTA活動とは、子供の学習成績向上に少しでも役立つ情報を得ていく場なので

特集投稿

っていましたが、その中でも気になつたいくつかをご紹介しておきます。

最初の学年PTA委員会の席で、転任者の私の紹介があり、四月二十六日に結婚することが告げられたのです。すると大変！

「春休み中に結婚すればいいのにネ」
「旅行はどうするのかしら」

ヒソヒソと聞こえてきました。あいつの時十日ほど休むのでよろしくと伝えると益々大変。委員会後学級委員のお母さん方がいらして、くどくどと質問せめてあげました。

「先生、十日間もお休みになるのですか」

「その間、子供達はだれがみてくれるんですか」

「一年生で、学校にも慣れてないし、自習なんて大丈夫なんですか」

「自習をするといっても、プリントかなんかをやるのですか」

学級委員のお母さんはやはりクラス全体のお母さんの声の代表とみていいでしょう。事こういう事になると団結かたくという感じでのぶつかりでした。おかげで式前日は土曜日だということに夕方遅くまで自習教材作りを目をまわしておりました。

でだしがそうでしたから、やはり、「女の先生はダメ」という目で見られ続けていたように思います。そしてさらに傑作なことが続きます。二年生にもちあがった時の父母会の後でのことです。学級委員のお母さん達と、クラス親睦会の相談をしていた時、

「先生、お子さんをつくらないんですか」
という質問が突然とび出しました。

「エエー、マアー」
「三年卒業するまでつくらないでいた

だきたいんです」
「エッ!!」 「その時は担任は持ちませんし……」

「学級担任をどうのこうのというのじ

ゃありません、今からですとちょうど三年生になりますもの。途中で国語の先生が代わるのじゃ……」

「来年、三年生にもちあがられるんですよ？」

「——（無言）」
「おねがいしますヨ」

「上の子の時、数学の先生がやはりお産で二年の最後から三年の始めにかけてお休みして、大変でしたの」

「講師の先生じゃ、いろいろと……」
「みなさんそう思っただらっしゃるんですか」

「えー!!」
ウヒャー!! 学級親睦会の相談が終

わるや否や私は職員室にとんで帰り、
「こうなのよ」と目をまるくして報告しました。

「また、えらくはつきり言われたもんだナ」

「で、産みませんって言ったの」
「言うわけないじゃない」

「じゃ挑戦的に産むか」——マサカ

「前の学校でね、『子供を持たなきゃ、私達の気持ちなんか分からない』って、くっつかかられたことがあったのヨ」

——マッタク勝手ナンダカラ!!

P T Aとは何ぞや……以前にもまして不信感がつのりました。

幸か不幸かクラスのお母さん方の希望通り、出産もなく三年間もちあがり卒業させたので、お母さん達はまあホッとしていらしたでしょう。次に二年を担当した十一月出産をしたのですが、——なんとよい先生でしょう。二年生で学校にも慣れてるし、行事の多い二期だけの休みですみ、学習面のしめくりの三期からは復帰したし、神に感謝してください。結婚は人並み出産は遅れぎみの人生に、また一つの岐路がやってきました。

長男が一歳を少し過ぎた時大病をし、死ぬか生きるかというさわぎがあったのです。ちょうど学期末で忙しかったため、子供の変化を見落としたのじゃないか、昼間人まかせにし過ぎたのじゃないか、



特集投稿

PとしてのPTA

と自分自身をせめないではいられないし、入院の付き添いで学校は休まなければならぬし、授業のこと、生徒のこと、事務上のことなど悩みは積もる一方でした。我が子もかわいそう、生徒もかわいそう、自分自身もかわいそう、考えたすえ教師をやめることにしました。こうして、TとしてのPTAとのかかわりは、いやおうなしに終わりにになりました。

しばらく空白の時間が流れ、長男の入学と同時に立場が一転し、PとしてPTAとのかかわりが始まりました。

入学後間もない父母会での最後、PTAの委員を決める段になりますと、予想通り（Tとしての経験通り）お通夜のような重苦しい空気が流れ始め、息がつまる思いがしてきました。私になにげなく手

をあげ「私、お手伝いさせていただきます」と言うと、先生のホッとなさった顔、と同時に「私も」「私も」と五人すんなりと決まりました。

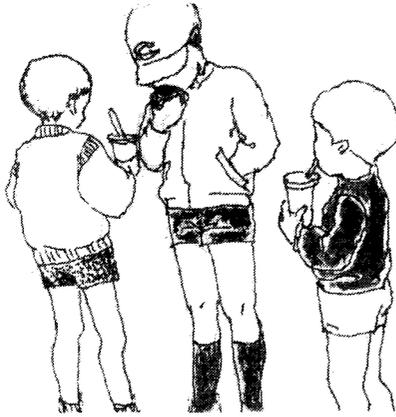
後から、先生が、「初めてですよ。こんなに早く決まったの。それもお母さん達の立候補だなんて」とおっしゃり、近頃はどこも役員のなり手がなく、そんなことから役員のなり手のないPTAなんかイライナイと、不要論が出てきている話をなさいました。本当に近くの小学校で、PTA役員のなり手がないため、しばらく休会にすることになり、PTA存続があやぶまれている学校があります。また新設校なんかは、最初からPTAの組織作りを見合わせている学校がほとんどです。

役員のなり手がないから不要だなんて、とんでもないことではないでしょうか。PTA活動の内容が問われるのではなく、役員にだれもなりたがらないからというのでは、なんとも淋しいことではないでしょうか。でも逆に言え

ば、みんなに必要性を感じさせないPTA活動しかしていかないから、役員のなり手がないのかもしれない。

長男の通う学校は、役員全員が女性ばかりというPTAです。といいますが、普通の学校で三役という役員を（うちの学校では代表委員と呼ぶのですが）各学級の学級委員長が集まり、運営委員会を構成し、その運営委員会の席上話し合いで互選するのです。対外的な面では代表委員は忙しく大変ですが、校内的な活動は、運営委員で分担し、また各学級委員が協力しという形で運ばれます。そんな選出方法をとる関係からも、運営をするのは女性ばかりになるのです。

他校からは、三役の集まりなどで、「女が」と見られることもかなりありますが、そんな目なぞ何するものと、女六人毎年奮闘しています。T時代ずっと会長Ⅱ男性というのに慣れてきた私、一瞬不安を感じないではなかったのですが、会長Ⅱ男性という固定観念



の方こそおかしいのであって、なににも会長職は男性でなくてはできない仕事ではありません。

代表委員になってしまえばみんな頑張って活動し、またできるのですが、うちの学校とて決める時はやはり大変。私が代表委員の書記の仕事を引き受けた時も、なかなか決まらず、運営委員会の席に居合わせた校長先生が、「役員のなら手がなく休むPTAがふえていますね。なり手のないようなPTAなら……」と話しはじめたので、みんなムツとし、ムツとした順に決まっていきました。もちろんムツとした一人に私もいたのですが。ムツとした者同志だけあり、意思も通じ合うことが多い、今でもいろんな活動を通し支えあっている仲間達です。

ムツとしたのがきっかけで、PTAに飛び込んで三年、忙しい忙しいと、けっこう楽しく走り回って汗を流しています。書記として一年、広報副委員長として一年、広報委員長として一

年の活動を通して何が残ったのでしょうか。忙しかったこと——それだけ？ いえいえ、一番大きいのは、多くの人と触れ合えたこと。学年を越え地域を越え親しくなれたことでしょうか。同じ学年の人、いえ同じ学級の人などにスパーマーケットなどで会っても、あの人見たことあるけど……ジロ……というのがないのです。「アラー、しばらく……」と井戸端会議が始まります。井戸端会議——ばかにする人もいますが、PTA活動をしていく上で大切なことのような気がします。私達の手で、どこまでも広く、深く活動していくために。

多くの友人を得る、本当に素晴らしいことです。子育てをしていく上で本当に力強いものです。こんなことがこの三年間でありました。

長男が一年生の終わり頃でしたが、自分の机の引き出しの中にしまっていた貯金箱からお金をとられたことがありました。一回目は——一回目と書

特集投稿

けば、次に二回目と続くのが常、私ものん気というか無警戒というか、同じような事件が二度立て続けに起きました。——S君と弟と三人で遊んでいた日のことでした。S君については、その頃妙な事が続いていたのですが、(変ってるわネ)ぐらいい見過ごしてしまっていたのです。例えば、遊びに来た時なども、

「圭いないわよ」

「いなくてもいいの、ぼく圭くんちの中ですら遊びたいんだもん」

「だめよ、今日は」

「うん」

また日曜日雨の中をずぶぬれで来て、そのまま黙って飛び込んで来て、階段の途中まで上がっていったまっつて、

「圭いないわよ」

「お友達の家でも、ちゃんと上がらなさいと言われなくちゃ、上がってはだめよ」

「うん」——外に出てしばら

く家の前をウロウロ、ウロウロ。

でも、S君の様子が変だから、S君と遊んでいたからだけでS君を疑うのはどうかと思いい近所の仲の良い仲間達に相談しただけでした。二回目は弟の机の中の貯金箱からなくなりました。その日は、S君と弟と、近所の子二人とクラスの子一人と六人で遊んでいました。私はといいますと、近所の仲の良い奥さんと居間であれこれ雑談しておりました。

「S君来ているのでしょ。気を付けたほうがいいわよ」

「ええ、でも今日は私もいるし、巨の机の中だから……」

ところが、大変大変。

近所の二人の子のお母さん達とは、

「今日、みんなで遊んでる時巨のお金がなくなってるね、悪いけどそれとなくY君の様子を調べてみてくれない」と、ずばり言える仲、クラスのK君のお母さんとも学級委員として一緒に一年活動し、近所の奥さん同様ずばりもの

が言える仲でしたので、三人の子に対しては一応親に依頼し調べてもらうことにしました。我が家の息子二人に対しても、いろんな角度から調べてみました。S君のお母さんとは同じクラスなのですがあいさつをする程度なので、私の口からぶしつけにお金のなくなつた事件を話せませんでした。

担任の先生に相談したところいろいろ調べてくださり、学級の子供達を通して、S君のお金使いの荒さが浮き彫りにされてきました。近くにあるゲームセンターにしょっちゅう出入りし、一回に千円近くも使っていること、クラスの友達にいろいろおごったりしていることなど。だからといってS君がお金をとったということではないので、お金がなくなった件ではなく、ゲームセンターでのお金の使い過ぎ、友達におごっていることなどの話を先生の方から、S君のお母さんにしていただきました。先生とお母さんの話し合い、S君を交えて三人の話し合い、家族で

の話し合いがなされましたが、S君は、先生にも母親にも父親にも無言だったそうです。

確かにお金をとることは悪いことですが、私は取れる状況を作り出して自分のどうにもたまらなく腹がたちました。お金の管理の悪さを反省しないではいられませんでした。その後も子供同志はそんな事件のことを気にせず一緒に遊んでいました。(息子達はどうもS君がとっているようでしたが、私もS君のことには努めて触れないようにしましたし、子供もさっぱりした性格なので、深く追及はしてきませんでした)でもS君は、私と道で会ったりすると、目をそらしたりしましたので、私は大きな声で「こんにちは」と声をかけるようにしました。S君もでれくさそうに小さな声で「こんにちは」とつぶやいて通り過ぎていきました。

そのS君が三年生になり、また問題になったのです。三年生にもなると自

転車でかなり遠出をしますし、帰り時間も遅くなってきました。そんな冬休みのある日、S君のお母さんからこんな電話がありました。

「圭君帰っていますか」

「いいえ、まだですが、何か?」

「ええ、ちょっと気になることがあって」

「事故でも?」

「お金のことで……」

「お金?」

「ええ、さっきN君が来て、「今日S君にハンバーガーやジュースなんかおごってもらったけど、お母さんに叱られたから」と言って五百円持ってきたの。よく聞くと「S君千円札五枚も持っていてね」と言うのよ。あれ以来家ではお金には、ずいぶん気を付けていて、あの子お札は持っていないはずなの。他に何人も一緒だったらしいけど、圭君もいたと聞いたのでお電話したのよ」

とにかく、圭が帰ってきた聞いて聞

ただして電話するからと受話器を置きました。しばらくしてごきげんで帰って来た息子をつかまえ、詳しく話を聞いたのですが、話のあらまはこうでした。S君は千円札五枚と百円玉少々持っていて、駅前のおもちゃ屋で買いたいものがあるから、みんな一緒に行くこうとさそったとのことでした。子供達にとっておもちゃ屋さんはすぐく魅力があるのでしよう、六人で自転車をとばしたので。そして帰り道みんなおごるからとハンバーガー屋さんに入ったらしく、息子を含め三人ほどが、「お母さんに叱られるからいい」とことわったそうですが、

「もらってもらわないと、ぼくが困る。いつもみんなおごってもらっているし、黙っていれば分からないよ」

などと言われ、みんなおごってもらったことです。息子におごってくれた相手も悪いが、おごってもらった息子はなお悪い、子供同志でおごったりおごられたりはしない約束だったこと、

特集投稿

お金の貸し借りも絶対にしないことなど、きつく注意し、早速S君のお母さんに電話をしました。息子から聞いた通りのことを話し、その場は一応終わったのですが、年も明け、昨日開かれた父母会でS君のお母さんにお会いすると、

「先日はすいませんでした。実はね、あのお金、おばあちゃんのお財布から黙って抜き取ったらしいの。強くおこっても、いつものらりくらりでね……」と細かく報告してくださいました。

「N君のお母さんには、細かいことは話さなかったんだけど、いいわね。中畑さんには迷惑かけるの二度目でものね」

「おごる方も、おごられる方も悪いのよ」

「これからもよろしくね」
S君のお母さんとは今年広報と一緒に活動し、一年の時に比べると親しさは格段の差になっていました。その時は

どPTA活動に積極的に取り組んできて良かったと思ったことはありません。けれど、PTA活動の良さじゃありませんか。親と親との結びつき、困った時に手を結び合える人間関係を作っていくこと。その輪が段々と広がり、大きな力になってこそ、PTA活動もいろんな方面へと前進していくことができるのだと思います。

P同志の結びつきを深め、Tが協力していく中で、よりよい環境づくり(広い意味で)をしていくことができればと思います。PTAが我が子のために成績向上に役立つ情報を得る場とならないようにしたいものです。幸いうちのPTAは私がT時代に経験してきたPTAとちがいが、地道ですが着実に活動していますので、これからもPTA活動にのめり込んでいこうと思っています。

家族で街に出ると、私がめったやたら顔見知りに出会い、あいさつを交わすので、亭主や父は「三鷹の顔だね」

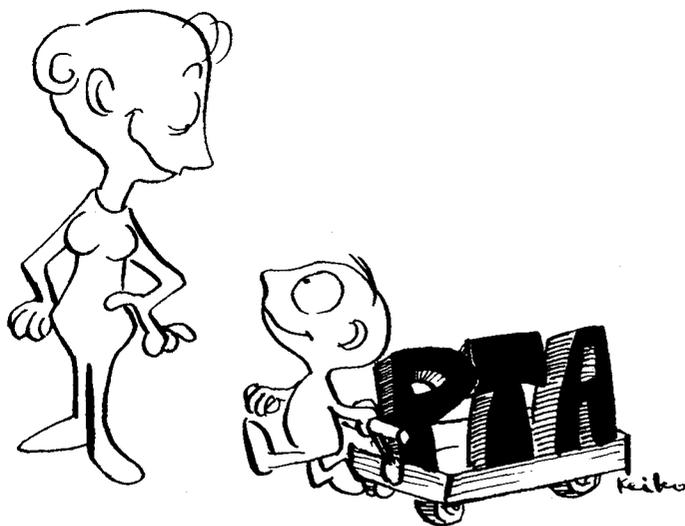
と申します。どういう意味で言っているのか真意を問い正したことはありませんが、でもその顔ただの井戸端会議だけでできるものではありませんぞ。地道な活動の中で作り上げ、培われてきた大切なものなのです。これからもこの顔広げていきたいですね!!

(え・早乙女光子)



座談会

PTAの中の原日本人



出席者

全国PTA問題研究会運営委員

井上 文雄

グループわいふ代表

田中喜美子

町田市立成瀬台中学校教諭

山田 暁生

全国PTA問題研究会研究委員

和田 好子

司会・編集部

早川 裕子

司会 きょうの座談会は、PTAの
中の原日本人、という題ですが、本題
に入る前に、自己紹介を兼ねながら、
PTAと、どういう関わり合いをされ
てきたのかをお話し下さいませんか。
まず、山田先生から。

山田 教師をはじめ、二十三年にな
ります。PTAに関わっているような
いないような感じなんですけれども、
教育をいかたちですすめていくのに
は、教師が親を無視するわけにはい
かないし、親も含めて、親の教師である
ようなつもりで教師がやっていたん
で、いい教育ができないのではないか
なるといっても子供を育てているのは
親であるし、一方、学校では教師が育
てていくわけですから、そういう意味
で、親と教師がわかり合えなければ、
子供という一人の人間をよく育ててい
けないのではないかと。学校と家庭は、
線の引き方が混線していてうまくない、
なんてことをいいますが、躰は家庭で、
勉強は学校でなどと、果たしてそんな

にうまくいくのかなと、以前から思っ
てるんです。

PTAの関わりなんかでも、いまい
ったようなことを含めて、例えば、広
報部に入って、お母さんたちと、一緒
にやったりしながら、すすめてきまし
た。広報の編集権の問題なんかでは、
校長から、なんだあんたは、校長側な
のか、父母側なのかと、いわれたりし
たこともありましたね。校長の写真が、
会長のあとになっちゃったけど、失礼
にあたらなかつたか、非常にくだらん
ことをいい出すんですよ。(笑)

司会 それはどっちがいうんですか。
親のほうが？

山田 親もいうし、校長のほうも、下
に置かれたんでは面白くない、ような
ことをチラチラいつたりする……。(笑)
そうした下らんことに好んで入ってい
って、ごちゃごちゃやりましたけど、
結局、PとTが対等にやっていたことと
いう気持ちがない限り、いい教育できな
いんじゃないかと、私がいまやってい

る学級通信とか、あるいは、母と子”
の読者会なんかも、全部そこが基本に
なっています。それで今日まで、ほんと
に一歩一歩の歩みですけど、やってき
たわけです。

PTAは日本社会の縮図

井上 ぼくはPTA歴は、約十六年ぐ
らいかな。そもそもPTAに入るきつ
かけになったのは、ちょうど役員選出
の時期にたまたま学校へ行ったら、う
ちの子のクラスのお母さんにバツタリ
会って、それが永畑道子さんだったん
だけど、PTAの会計をやってよって
いわれたんですよ。月に一回、親から
集めた金を計算するだけだなんてうま
いことをいうから、それじゃいいよと
その場でいっぺんに引き受けた。(笑)
その後、いっぺんで引き受けたって
ことが、問題になったらしいんだな。

司会 (笑) おかしいんじゃないかと……。

(笑)

井上 なんかあるんじゃないかと……。

ふつうは、遠慮するとかね、やってよやってよといわれてはじめて、さもしぶしぶという感じで引き受けるのが普通なのにすぐ引き受けちゃったもんだから、永畑さんもそのときはびっくりしたらしいよ。役員をえらぶということは、選ぶほうも選ばれるほうも大変な苦労があるんだけど、それが、学校でちょっと話して、五分ぐらいで、

じゃあやるよなんていうひとは、いなくて。(笑)

司会 すすめた人も、拍子抜けしたんじゃないかしら。(笑)

和田 厄介なことも知らないでなったんですか？

井上 そう。むこうは、役員なんて大したことないって、大うそついてるわけだし、全く大したことないって感じなんだから……。 (笑)

司会 みんなうそつきなのよ、推せん委員とかいうひとは。(笑) わたしも

だまされてなったんですよ。月に一回

出ればいいからっていうから引き受けたら、それどころではなかった。(笑)

井上 僕が驚いたことには、このたびは、役員をお引き受け下さいまして、家の玄関がいっぱいになるくらいきて、最敬礼してるの。(笑) 僕は組織人じゃないから、そういう人たちを知らなかった。でも、日本の社会を知るということでは、それはとても勉強にはなったね。

司会 すごい縮図ですからね。

井上 それから、ものごとというのはいいたい放題、いっちゃいけないんだ、しゃべり過ぎちゃいけないんだってこと、よくわかりましたね。会長を六年やって、めちゃくちゃしゃべりまくったから……。 (笑)

ちょっとおかしいなと思うことを一言いうと、大さわぎになるってこともわかったし……。つまり、物議をかますわけだ。

和田 泣いたり、さわいだり、いろん

なこと起きますよ。

井上 僕が国分寺の学校のPTAに入りたてのころ、教育三法に反対する日教組のストがよくあって、総会の終わりに、子供がこういうピラをもらってきたが、この三法が通ると、子供の教育に、一体プラスになるのか、マイナスになるのか、先生は授業を放棄してまで反対してるけど、校長はどう思うんだときいたら、司会者の教頭がとんに、ハイ、総会はもう終わりました、みなさん椅子を片づけて下さいって叫んだの。皆なイスを片づけて出した。したらその中で、あるお母さんが立ちあがって、いま井上さんがこんなに大事な質問してるのに、片づけさせるのは、なにごとだって叫び出した。こういうお母さんがいたというのは、まさしく先進地域なんだな。

椅子を片づけ出した、三分の二くらいのお母さんたちは、その剣幕にびっくりして教頭のいうことをきいたらいいのか、どうしていいのか困って、中

腰になっちゃった。(笑) 校長の答

えは、要するにあんなピラを子供に持
たせたのは違法だから、厳正に処分す
るんだといういい方で、結局答えには
なってなかったんだけど、その事件以
後、先生の総会への出席が多くなった
ね。それまではPTAなんか感じて感
じたのに、組合に入ってる先生もチ
ラホラいたから、会に出てなければ一
方的に何いわれるかわからないと思っ
たのと、親でもそういう質問をする人
がいるんだってことに気がついたわけ
ですよ。PTAに入ってるのっけから

そんな質問するもんだから、みんなか
らあやしい目でみられたわけだ。

山田 何者だろうと……。(笑)

井上 だから僕のPTAの体験という
のは、最初から孤立の歴史なんですよ。

(笑)

司会 それにもかかわらず、十六年も
続けられたんですね。

井上 勝利の快感に酔ったこともある
からね。(笑) やっぱりペンは剣よ

りも強しで、そこで広報を使うわけで
すよ。

司会 学校でそれをボツにするという
ことはなかったんですか？

井上 それをまたあばいたからね。

先進地域で、僕の発言が通ってきた
し、僕がつゆ払いしたようなもんだけ
ど、男性会長が姿を消して、女性会長
が、ざあっと近隣の小学校まで波及し
て増えていった。これはいい気持ですよ。
P連も変わっていったしね。国分寺か
ら中野に越して、そこでもかなりのこ

とはやりましたよ。

司会 お子さんが「明星学園」へ行っ
てるようですが、いまま関わってるん
ですか。

井上 もう投げた。めんどくさいか
ら……。いまPTAのほうから、会費
払ってよって催促がきてる……。やめ
てるつもりだから払わない。(笑)

PTAは任意加入の団体なんだから。
高校のほうの教育方針と、小、中学校
と明星っていうのは全然ちがってね、
小、中学校は、高校のほうを、自分た

井上さん



ちの考え方で押し通したい、そので、こにPTAを使いたいわけだ。PTAの面でもかなり遅れてて、世間でいわれているようなものじゃない。ほんと、やる気を失なったね。親というのは、先生にもっともらしいことをいわれると、そうかなと、ところが、一皮むいてみればひどくて……。

教師でも、無着一派にさからったら、ひどい目にあっちゃうからね。ある日学校へきてみたら、職員室から机がなくなっちゃうんだから。ふんだり、けったりされて、先生が出されちゃうんだから……。

司会へえ、おそろしい。

井上それが、なんで民主的な。民主主義という名の専制だよ。(笑)

司会井上さんのお話が興にのってきたところですが、次に田中さんどうぞ。

田中わたくしが、そもそもPTAの活動に足を踏み入れたのは、息子が小学校に入ったときで、委員に引っぱり出され、学級委員長とか広報なんかを

やっているうちに、学校管理者の、ものすごいしめつけや、いわゆる日本人の体質、長いものには巻かれるという、親側の非常な弱気の姿勢、そういうものが、教育をよくするために作られたPTAの中でまかり通っているのは、おかしいんじゃないかということ、まず身にしみて感じたわけです。今日わたくしが、「わいふ」をやっている原点も、ここにあるんですが……。

ほんとにこんなことではないのかなと思っただけで、全P研なんですけれど、そこでも日本人の体質はすぐくありましたので、民主的な大事な動きをしなきゃならないときにふと出てくる、日本的体質の恐しさみたいなものを、話させていただければと思います。PTA歴は約八年ぐらいです。

PTAをやると笑われる

和田わたしは、文学一辺倒の間違ったから、PTA活動とか市民運動と

か最初は全然関心がなかったんですよ。大阪にいた頃、幼稚園で役員に引っぱり出されたとき、つくづくくだらんと思ったから、小学校ではやるまいと思っただ。ところが、父母会等で、よく発言するもんだから、あの人ならモノいえそうだとということで、規約改正委員会の副委員長に引っぱり出されちゃったんです。なんで規約改正の話ができたかという、P連で規約改正をしようということ、それを右へならせようとしたわけですよ。いくらなんだって、学校それぞれの事情があるのに、会員の要望もきかず、これにしまししょうというのは、実におかしいということ、わたしももうカンカンになって怒って、動き出したわけです。

PTAというのは、上の人に下の人から従っていくという、変な構造になっているので、上をつかまなきゃだめだということから、執行部の乗っ取りをはかりましてね、会長に、全共闘と



司会者・早川

いうか、大学紛争のときにあばれた神戸大学の教授をつかまえてきて、やったわけですよ。三年間ゴタゴタした揚句、PTAを改革したんだけど、その間は大騒ぎでした。その先生も最初のうちは分からなかったけど、入ってみて、PTAというものが、日本の民主化ということと、とてもよくつながっているということが、よく分かったんですって。大学の改革なども、実は国民の体質とつながっているわけで、大

学でなぜ改革できなかったかというところは、PTAの改革の問題とかなりつながってるわけね。それで、おかしなのは、大学の教授で、しかも大学紛争のときに、かなり活動した人がPTA会長やってるって、彼の友だちがみんな大笑いしたんだって……。 (笑)

司会 笑われるということは、大の男のする仕事じゃないと、世間の人は思ってるのかしら。

和田 そうじゃないのよ。大の男と限らず、女でも男でも、PTAをやるのはマンガチックなものとされているのよ。

司会 やっぱり、いやなもの、みんなが思っているわけね。

井上 たいてい、地域ボスがやるとか……。

和田 わたしが感じたのは、男女差別がひどいことね。会長を選ぶのに、女は絶対選ばない。校長や先生の態度も、母親に対するのと、父親に対するのとばぜんぜんちがうの。ことに、大学の

教授なんていうと、すぐ平身低頭……。 (笑)

井上 小学校の先生なんてのは、大学の先生を、偉いと思ってるからね。だから、改革できたとはいえ、ガンクビが変わったからそうなんだだけで、ほんとによく似たことじゃないんだよ。

和田 そうそう。とりあえず、乗っ取りを凶るということで、それで事が済むとは、もちろん思いませんでしたよ。

司会 教授つかまえてきて、改革はされたものの、その人がやめたら、また元のもくあみになりかねなかったわけね。

和田 そのときに、日本人の体質というのがほんとによく分かった。なんで戦争になったのかも。

司会 和田さんは、大阪からこちらに越してきて、そのあともPTAには関わったのですか。

和田 ええ。大阪のとき、単Pで孤立してたんで、情報交換をすることが非常に大切だと痛感してましたから、全

P研で、いろいろやったわけですよ。

ここで、ずいぶんPTA相談を受け持ち、いろんなところの実状をききましたが、いずこも同じで、強い者には頭を下げ、弱い者にはのしかかるという図式は、変わらないですね。

司会 全P研では現在も活動してらっしゃるんですか。

和田 いや、「わいふ」の仕事があるので、これにかかりつきりになっちゃってますから。全P研でやっていると、田中さんが怒るしね。(笑)

井上 さっき和田さんがいったことは、PTAに限ったことじゃないんだよ。僕の友達に、大会社の弁護士がいて、重役会議に出ることがあるんだって。おれが、社長にこうこう、こういうふうにしたほうがいいっていうと、そうじゃうんだから、何のことはない。おれがああ会社やってるようなもんだって。だから、恐ろしいねっていったよ。ましてや御前会議なんか推して知るべしだ。強い人に迎合していき

間違ったと……。

和田 だから、社長が変な人間だと、大変なのよ。

井上 それは、「三越」みたって分かるじゃない。戦争になったわけもよく分かるよ。

和田ほんとそうですよ。いざその強い人が負ければね、わたしは、あの人のいうことを仕方なくきいたんですって。いざ、それで済んじゃう。全く、一億総ザンゲってやつですよ。

ものいえばくちびるさむし

田中 わたくしがPTAに関わって最初に感じたのは、子供たちのために、なにかプラスになることやるんで、会議をしてみるわけですよ。それなのに、まずみんなが口をきかないの。自分の意見を持たないか、持っているのに、口をきくと、なんとなく責任あるポストにつけられてしまうかわさからだったことは、すぐに分かったけど、いくら

なんでも、一時間も座っていて、何ひとつ決まらないんじゃないやきれないというオッチョコチョイの人間が何人かいて、オッチョコチョイのために口をきいちゃって委員を押しつけられるというのが、パターンですよ。わたくしは、そのオッチョコチョイのためになっちゃったわけなんだけど、「PTA」のなかの原日本人ってことくらいえはともかく口をきかない。

和田 なるべく、安全なところにいようという考えなんでしょうね。

井上 雉も鳴かずに、うたれまい、だ。日本のことわざっていうのは、よく日本の社会を出してるよ。ものいえば、唇寒し……とかね。

山田 今の世の中、言論の自由が保証されている筈なんです、それなのに、なぜみんな、自分を抑えて、いべきことをいわないのかと思いますね。

僕は、二十三年間というものずっと、いべきことをいってきて、それを受けとめてくれる仲間も大勢いますので、



和田さん

いつてきてよかった、書いてきてよかったと思うんですね。

田中 そのために、非常な不利益を受けたということが、ありますか。

山田 僕はね、非常に図々しいというか、自分が不利益を受けている人間だということが、よく分からない人間なんですよ。そんなこといってると、管理職への道がなくなると、周囲からいわれるんですけど、先ことは計算してないし、いいたいこといわないで、腹がふくれるよりは、いすべき場所で

はつきりいったほうが、あとあと気持ちいいですから。

田中 ものをいうと、損をするかもしれないって、みんなが思うわけでしょう。これ、みんなが勝手に思い込んでるだけで、実は、こわがるようなことは、それほどないんじゃないかって思ってるの。人質にとられてるなんていうけれど、少しはそのためにはね返ってるのかもしれないけど、こっちがそう思ってなければ、むこうのほうで、自然に引っ込んだんじゃないの。

和田 わたしの体験では、中途半端にいうのが、一番いけない。徹底していうようにしたら、うちの子供に、えらく先生が遠慮しはじめた。この子の親はうるさいと……。 (笑)

天然自然に戦争が

和田 おもしろいことは、日本人の特徴なんだろうけど、上の人がいうことは、天然自然の災害みたいに思ってるの。(笑)それがよくわかったのは、学級集会のとき、先生が、またあのよくな戦争があつては大変だから、平和教育をしたいといったら、親の一人が、でも先生、この間、あんな大きな戦争があつたんだから、もう暫くないでしようっていったのね。

田中 こりゃ、傑作だ。(笑)

和田 わたし、ほんと、もう顔をみちやった。ところが、みんなこの発言に同意してるとはあきらかなの、顔みてるからね。だから、まさか、戦争が来

る来ないは、嵐やなんかでないでしょ
うって、いつてやった。(笑)

戦争も天然現象なら、政府が悪いこ
とをするのも天然現象、そういう驚く
べき感覚ね。諦めきったというか、そ
れに対して、自分が何かをしうるとは
全く思っていない。

田中 ほんとにそうですよ。わたくし
はいま、全国地名保存連盟ってのをし
てるんですが、町名を一括して守れた
都の地域ってのは、ここ新宿区以外に
ないんです。私を含めて、五人のメン
バーで守ったんですが、そのとき思っ
たのは、実際、みんないやなんですよ、
変わるの。だけどまず最初にいう言
葉はね、でもね、どっちみち変えられ
ちゃうんでしょ、って。天然自然に変
えられる、そうおカミが思ってたんだか
ら……と。それを積極的にくいとめよ
うとしたり、巻き返すことなんかでき
るとは、全く思っていないのね。

和田 それ、全く日本的じゃないですか。
田中 これは、一体どういう伝統がし

みついているのかね。

司会 やっぱり、民衆の忍従の精神な
のかしら。

井上 やっぱり、農民一揆なんかが弾
圧され続けてきた、徳川三百年だな。
なんかいえば、ろくなことはなかった
わけだ。それが、先祖代々しみついち
やったわけだ。

田中 不思議に思うのは、みんなおカ
ミが、悪いことするって思っていないこ
となのよ。おカミのすることは、いい
ことと思ってるの。

和田 おカミはいいんだと、おカミが
少し悪いことしても、いうこときいて
りゃ間違いないんだと、なんとこの
かな、運命論者ですね。

井上 学校の先生は偉くて、校長さん
は一番偉くて、その校長さんがいって
るんだから間違いないと、その上に教
育委員会もあって、文部省もあって、
文部省がいつてるんだから間違いない
と、そういうふうになってるわけだ。

和田 高校が足りなくて、大さわぎに

なったでしょ、わたしが増設運動やつ
てたとき、集まったお母さん達に統計
を示して、これこれ足りなくなっちゃ
うから、どうかしなきゃならないと
いったら、あるお母さんが、すごく憤
慨した顔をして、そんなに足りなくな
るなら、文部省がどうかする筈だと思
いますって、こういうの。なぜわたし
たちが、そんなことをしなきゃならな
いのですかっていうのよね。で、わた
しは、じゃああなた、待っててみてご
らんなさいっていったんだけど、結果
は建てやしない。運動のなかったとこ
ろは、建たなかったんですよ。

税金は払うのか

納めるのか

山田 憲法学者の星野安三郎さんがね
うちの会で話をしてもらったときに、
旧時代的な、封建的な感覚が、言葉に
ずいぶん残ってるっていうんです。外
国では税金をペイするっていつてるが、
それが日本ではいまだに納税じゃない

かと……。

ペイするっていうのは、日本語でいうならば、払税だっていうんです。払税といえば、自分達で税金を出し合い、それなりの見返りがあって当然という感覚になる。おカミのほうは、徴税なんていってるから、一方は、取りたてる、一方は納めさせていただくという感覚になってしまおうってましたね。

和田 古代は、神様の領域にだけかが入ってきて、そこを汚した人から抜いをするといつてね、ものを取りたてて神様を祀る、それが抜いなんです。

「抜う」といまの「払い」は、おんなじ意味なんですよ。要するに、神様に取りたてられることなんですよ。

山田 つまり、ペイに対する言葉がないわけだ。

和田 見返りなんか、当然ないわけ、納めたら、それできれいさっぱりと。司会 商取引きのほうでは、払うという意味で使われてきたのでは……。

和田 ええ、近代化してからは。例え



ば、天皇が死んだ、死ねば汚れるから各地から抜いのものを取りたてて、それで葬式をしたりするというように、特別の税金を取りたてるわけね。だから、およそ払いというのは、歴史的に見てもいい意味はないの。

山田 そういふのが、つもりつもって、PTAの意識にまで受け継がれてるわけだ。(笑)

井上 払うとか、払わないとかって話がでたけど、田中さんは、町会費払ってる？。

田中 ええ、払ってますよ。

井上 僕は町会費払ってないんですよ。脱退したの。どういふわけか、うちだけ町会費が高いってこと、発見したから。

田中 へえ、どうしてそんなことあるの？ 門構えがちがうから？(笑)
井上 町会費がうちだけ高いのはどうしてだっけいいたら、ご先代からそうなってますっていうんだもの……。

(笑) ご先代が、税金大臣だったん

だな、おれは偉いんだって、払っちゃったんだよ。(笑)

山田 だけど、井上さんのとこ、とられてもしょうがないよ、あんなに広いんだもの。

和田 それ、それ、それがめちゃくちゃな考えなのよ。これは、ぜったい日本の感覚だ。(笑)

山田 まあ、いまのは冗談だけどね。

そういう感覚は、あるってことですよ。

例えばですよ、井上さんの隣にちっちゃい家があって、そこから寄附として五〇〇円もらって、井上さんの家からも同じく五〇〇円もらったとしたら、集めた人は、井上さんは五〇〇円しか出さない、隣だって五〇〇円出したのに……と、そういう受けとめ方になるでしょ、こういう話、よく聞きますよ。

和田 だけどね、寄附だったらそれは分かるの、そうじゃなくて、ある組織の会費というのは、一定してるわけですよ。貧富にかかわらず。

山田 とこが、昔の町内会のかたち

山田さん



のままできた地域というのは、線が引きにくいんじゃないですか。

和田 町会費の話とも共通するんだけど、PTAが、アメリカみたいに任意加入である場合と、日本みたいに自動網羅加入で、みんな放り込まれちゃうのと、意識の点で、だいぶちがいますね。

司会 でも、あれは日本で任意加入だったら、困ると思うのよ。日本人の体質だから、自動網羅加入があってるわけよ。

和田 先進的な役員がいて、自動網羅加入はおかしいから、任意加入にしようとして申し込み書を配る、でもその時点で、入っても入らなくともいいとは書かないから、そこが日本的体質で、ひとが入るからわたしたしと、みんな入る。うちは任意加入にして、九〇%も入りましたと威張るけど、もし半分会員がぬけちゃったらどうするってこと、全然考えていない。アメリカだったら、会費で運営しようとは思ってないから、音楽会やって入場料をとるか、廃品回

収るとかして、お金儲けして運営する。

井上 任意加入にして、ある程度減ってくればね、ざあっと減っちゃうんだよ。七〇%から九〇%以上維持されてる限り、絶対に減らない。

司会 自分が、ほんとう思うかってことよりも、大勢に……ね。ひとがどう思ってるかってことを考えるのね。顔色をみちゃうのよ。山田先生が提唱して、十五年もやってらっしゃる、母と子^レの読者会のお母さん達というのは、これまで話されてきたような日本の体質が、あまりないひとが多いんじゃないかね。

山田 いや、いろんなひとがいますよ。そこへ行けば、受験の情報が、もっと入るとか……。 (笑) 子供に勉強しろ、しろといってるから、親も何か勉強しなければという意識で入るひともあります。教師と一緒に勉強することの意義というんですか、それによって学校の教育が少しでもよくなればという

気持で入るひともありますし、ここで学習したひとで、子供が巣立っちゃうと、生協とかいった地域活動へ進んでいくひともありますし……。

田中 こういつてはわるいんだけど、母と子^レを軸にしてやってらっしゃるその会にも、ちょっと疑念をもつんだなあ。山田先生ならびに実力のある先生がなかにいて、とつてもいい実践をされてるってことはわかるんだけど、なんかやっぱり、日本的付和雷同性質みたいなのが……。

井上 これはね、はやり、はやりだよ。司会 なんかいいいことありそうだと。入っていたほうが得であると……。 (笑)
山田 そりゃ、そういう計算はあるでしょうね。
和田 そういう会が大きくなってくると、加速度がつくというか、みんなが入れば、わたしも入ってかたちが出てくる。だから、あるとこまでは苦しいけど、あとはもう黙っててもパタパ

タと入ってきて、その組織自体が、自発性を失なってくるというのもあるんですよ。だから、そこらへんが、なんか信用できないんだなあ。

司会 とでも評判のいい先生だつてことが定着してるし、マスコミにもよく出られて有名になって、ああ、あの先生ならつて、みんながいつせいにね……。

和田 けっきょく、自分の意志ってことじゃないのよ。

山田 そしたら、もう何やってもおなじじゃない。(笑) 日本人は見限られても、しょうがないのか。

議論のできない日本人

井上 日本じゃ、伝統的に、和^レというのをいいますね。そのこと自体はいいんだけど、人と意見が違うということはね、和^レを乱すことだつて思っちゃってる……。だから、まともな意味で、議論というのはい

んです。議論即ケン、カなのね。議論をしないために、だまる、そして、相手はどう考えてるかを探る、それに合わせようとする……。

田中 井上さんてのは、なんて頭がいいんだろうね。(笑)

山田 PTAでもそうだけど、あの人の意見は確かだと思っても、周囲の雰囲気からして、いま手をたたくべきじゃないと、たたくことによって、自分も少数派にまわされちゃって、孤立しそうだと思ったら、賛成でも絶対に手をたたかない。あとでこっそりと、あなたのいうこと大賛成なのって、力にもならない場所であつたりして……。

司会 会が終わってからね、下駄箱のここなんかで……。(笑)

井上 僕なんか、意識して頑張らないと、そういうことができないというんじゃないくて、自然にそうなっちゃうんだ。だれがどういおうと、そうだと思ったら、ふあっと手をたたいちゃうんだよ。勇気があるわけでもなんでも

田中さん



ないんだけど、はたからみると、勇気のある人に思われちゃうんだね。

和田 ともかくにも、ケンカはしまいい、ということ、どっちが強いかということ、強いほうに、強いほうに従っちゃうという体質ですね。

井上 あいまいなところで線が引かれるんだよ。ちっともきっかりしない。だから、法律が発達しないんだ。それに論理で解決しようとしなない。

田中 論理で解決どころじゃないのよ。わたしが一番最初に関わったPTAで

は、会長ともう一人が頭の黒いネズミで、私たちが反対して、騒動が起きた。テンブラ屋で一席設けるから来てほしいというんで、ともかく行こうということになって……。ほんとに筋を通すんだったら、断わるべきだったのに、そのへん未経験でよく分かってないから、一緒に食べたり、飲んだりしちゃったのね。翌日会議があったら、相変らずむこうはおなじようなことやってるの。一緒に飲んだり、食べたりしたことで我々がいうことをきくと思っ

わけよ。ところがこっちは平気で相変らず反対するわけ。それで、むこうはもうカンカン……。(笑)

司会 つまり、買収しようとしたけど、無駄金だったわけよ。(笑) 根まわしのきかない人間だということがわかったのね。(笑)

井上 一緒に食ってるのに、全然だめだと……。 (笑) でも、食べたり飲んだり一緒にするってことは、大きいよ。

山田 それは、子供とのつきあいにしても、大きいですよ。かなり突っ張ってる子に、遊びに來いよって、うちで作ったもの食べさせて話したら、翌日から、いうことのきき方が違うものね。和田 それは、日本の伝統だと思ふの。一緒にものを食べるってことが、一味同心ってことなの。茶寄り合いといつて、一揆するとき農民が集まって一緒にお茶を飲んだ、もうこれは一味同心だと、お茶飲んじやったら、違反でないと思ふわけ。

田中 あたしなんか、さんざん飲んだり食ったりしても、納得いかないことには同意しないもんね。

司会 会費出し合つてなごやかにお茶でも飲むのはいいんだけど、問題だと思ふのは、PTAの席でお酒が出るとうちの子お世話になってますなんてお酒ついでまわつたりして……。

和田 そう。芸者がわり。(笑)

井上 ただの芸者だ。(笑)

和田 日本人というのは、そのひとつものを食べれば、親しくなつたという感覚をもつよ。結婚式のとくに、昔は三日夜の餅といつて、一緒に餅を食べた。一緒に食べることによって、二人を結びつける。戦国時代なんかでも、政治家が茶室へ詰め込まれ、そこで合議する。だから茶席政治ってのかな、それが待合政治へとつながっていくの。井上 まず、飲み食いからスタートしたわけだ。

和田 わたしが、日本のPTAの大きな特徴だと思うのは、みんなが、規約

をみようとしないうことね。去年何をやったか、それでまたやるわけよ。

運営委員会なんかは、たいていの場合、議決機関になってしまつていゝ。総会の議決に従つて執行するための議決をする執行機関なの、本来は。規約をよく読んでないから、運営委員会で、なんでもきめちゃうわけね。

三十年年かのPTAの歴史があるわけだけど、そんなふうだから、活動のなかみは、ほとんど變つてないよ。いかに伝統が継承されてきたかということ、あきれほど、前の年に何をやったかということに気にしちゃう。

田中 わたくしが強く感じるのは、少数意見を尊重するような体質が、全くないわね。地名保存運動をしたときに、臨時総会開いて、できるだけ多くの住民の意見をきいてほしいって町会長に申し入れたの。そしたら、個人的には大賛成ですけど、前例がない、少数の意見ですから、これは致しませんというの。PTAのときでも、いままでに

ない内容とか、お互いにちょっとさし
さわるような内容の申し入れをする
と、必ず、少数の方の意見ですからって
いう答えがよく返ってくるじゃない。

和田 なにが正しいかできまるんじや
なくって、なにが多数かできまっ
てしまふのよ。

井上 それが、民主主義だと思っ
てるんだよ。数でやりやいいんだと思っ
てる。多いほうが常に正しいんだと……。

田中 たしかに日本人てのは、民主
主義は、数の問題だと思ってるわよ。

井上 角榮、なんかそう思ってる。

(笑)

和田 けっきょくね、日本人てのは、
目先しか見ない、一段階おいて、この
あとどうなるかってのは、ほとんど考
えないからね。とにかく、日本人の意
識は、まだまだ近代化されてないです
よ。そこへ近代化された組織だけが乗
り込んでくるから、PTAもそうだ
と思うけど、それとのギャップだと思
うのね。

それでもPTAは面白い

司会 これまでのみなさんの話を伺っ
てますと、PTA体験をいろいろなさ
った課程で、つくづく日本人の体質を
思い知らされ、悪戦苦闘してらしたわ
けですが、この日本人の体質を少し
もよくしていくにはどうしたらよいか、
改革案がありましたら、展望でも結構
ですので、最後にきかせて下さい。

和田 PTAに限っていえばね、とに
もかくにも、この体質をいきなり改め
るってことは、非常に難しいので、一
つは山田先生みたいに、自発的な組織
を作って、PTAにそういう人を送り
込みながらやっていく、連動するやり
方ね。もう一つは、いきなり執行部を
乗っ取っちゃって、いい方向へ向かし
ちゃって、発言が自由にできる総会の
やり方とか、こわがらないで発言でき
る雰囲気を作ることだと思ふ。

井上 やっぱ、体質を変えるには百

年かかるな。急に効くやつはよくない
よ、薬でもなんでも。長い目でみよう
よ。我々が死んでからだ。(笑)

和田 わたしもね、いまの体質だった
ら、いくらやってもだめだと思ふのよ。
大きき起こらないとだめだと思ふよ。

田中 いやに悲観的ね。展望はないけ
れど、やっぱり現場にいるひとが、や
れることをやっていくってことで、い
まも地名保存運動をやってるけど、み
んなが、何か一つやれば、相当よくな
るんじゃないかと思ふの。

和田 山田さんみたいに、やれること
やるのが必要、そして正しいことをい
っておくことが必要、必ずいまのまま
では失敗する、そのときに、正しいこ
とをいった人が、ざまあみると……。

(笑) いやね、私は近い将来、この
日本の体質から必ずへんなことが起こ
る、と思ってるの。いまだいぶ起こ
ってきてるもの。

山田 民主主義の根幹は、言論の自由
だと思ふんです。言論の自由は、ある

面では、抑圧されてる部分はあると思
うんだけど、韓国なんかと違って、ち
ゃんといえる世の中ですよ。一人一
人の内なる民主主義はどこにあるかと
いうと、自分の思ったことをきちっと
いえる生活だと思っんです。これをち
ゃんとしておかないと、民主主義なん
て、いつひっくり返るか、あてになり
ませんからね。そういう意味からも学
級通信を毎日書いています。遺言状の
つもりで……。昨年だったか、世田谷
区の有権者に、選挙というのは義務か
権利かという調査をやったら、六割ぐ
らいの人が、義務だと答えていた。日
本の戦後教育は、何をやってたのかと
ほんとにがっかりしました。自分が政
治を背負っていく意識もないまま投票
するのだから、考えたら、いまの大人は、
全くあてにならないと思っ……。
だから、日本なんて、右にも左にも操
縦自由自在という感じですよ。
司会 学校へ行くことだっってそうよ。
義務だから行くと、そういう意味でと

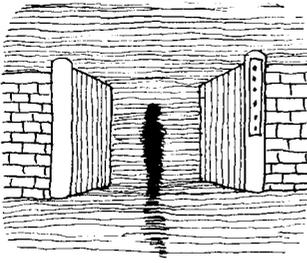
らえてるもの……。
和田 いっただん加速度がついたら大変
ですよ。走り出すと、みんながそっち
へ走っちゃうから、それがこわい。
井上 日本の社会のミニチュアなんだ
な、PTAというのは。
田中 わたくしは、『わいふ』の読者
に、もし役に立つならと思っというん
だけど、PTAはしんどいけど、やっ
てみたら、とても面白いですよ、っ
てことね。唇寒しで黙っていることより、
市民運動的なことやることは、如何に
女にとって面白い人生を拓くかってこ
とね。
井上 いか小学校の同窓会があった
ときに、僕がPTAやってるっていつ
たら、みんなに笑われたの。僕が出た
学校は、公立じゃないので、みなさん
相当におえらくなってる。だけど、そ
ういう人たちこそ、町会とかPTAと
か、下らないところへも、どんどん入
っていかなきゃならんのよ。僕みたい
に、脱退しちゃうかんよ。(笑)

田中 いつも思うんだけど、非常に不
幸なことに、日本のインテリッて駄目
ね。世の中よくするために、彼らは実
際に何もしてない。
井上 悪いこといわんよ、やってごら
んと、そこで自由に何か一つ発言して
みてごらんさない、そうすれば、弾が
飛んできますよ。弾が飛んでくること
が大事な。
司会 そのためには続けてやらなきゃ
だめですね。最初の一年は、弾が飛ぶ
だけで終わっちゃうから。
井上 こりちゃって引っこんじゃうか、
なにくそって向かっていくか、そのの
人間性なんだ。逃げちゃだめ。とっ
てもいいことは、あんな言い方で失敗し
たから、こんどはこういってみようと
人に対する接し方を覚えていけること
ね。組織の中に入ってない女性という
のは、どうかするとそういう訓練なし
に、一生済んじゃうからね。そういう
人がおばあさんになると、ほんとに始
末が悪いんだよ。(笑)

(まとも・安藤 悦子
え・松本圭子)

手をつなぐおとなたち

——すばらしいPTAも存在する——



早川裕子

今年も、PTAの役員や委員を選出する時期がめぐってきた。どこかの学校のPTA会員である人は、「わいふ」の読者の中にも多いにちがいない。あなたはそのとき、どんな態度で臨むのだろうか。

ほとんどの人が何とかして逃れたいと思い、一人ひとりがそのための「いいわけ」をひそかに考えたり、「欠席しよう」などと策略(?)をめぐらしたりしているのが実情のようだ。いまの日本の多くの学校のPTA活動は、それほど魅力のない単なるお役目になり下ってしまっているのだ。戦後初めて母親たちが獲得した我が子の学校教育に参加して、自分たちの考えを反映させていける権利だといふのに。

私たちは、三十年以上かかっても、親と教師がなれ合いや従属でなく、仲良く協力し合って子供を育てていく体制を、我が国に根付かせることはできなかったのだろうか。

そして今……心が傷つき、荒れすさんだ子どもたちの反乱を前に、親と教師は責任をなすりつけ合っている。

そんな中で、まるで砂漠の中のオアシスのように、子供たちの幸せを守るためのPTA活動を、着実に生き生きと積み重ねてきた学校に出合った。千葉県松戸市の根本内小学校PTAがそれである。

● 勤労奉仕PTAからスタート

この学校は、松戸市小金原地区が東京のベッドタウンとして雑木林が開発されて新興住宅地を作ったとき、団地と一しょに生れた。昭和四十四年である。

創立当初はまだ校庭も整備されておらず、学校側としても設備をととのえるためにも、PTAを作ることには積極的だったという。親たちもためらわず、植木を寄付したり、草むしりや校庭整備の労働奉仕に通った日々であった。

五年前にPTAが発行した記念誌、「十年の歩み」を読むと、創立当初の思い出は、砂塵舞い、長靴でなければ歩けなかった校庭で、花壇作りや草むしりに精を出した労働奉仕のことをなつかしむ声で満ちている。

また、グラウンドピアノ購入対策特別委員会なるものを作って、廃品回収や各方面へのよびかけによってついに一年間で目標額二十万円を達成、市費と合せて四十二万円のピアノを購入できたという努力もなされた。

これらのことは数年後にPTA内部に批判が起り、討議の末、環境整備はPTA奉仕に頼らず、行政面への働きかけが必要という声が大きくなったとき、奉仕活動は廃止され、やがて組織を改正して環境整備部という委員会そのも

のもなくされていくのだが、この創設当時の「おらが学校」として体を使って我が子の学校にかかわってきた親の気持が、その後も続く大きな、幾多の活動を根底から支えてきたように、私には思われる。義務教育公費負担の原則からははずれた活動であり、学校側が父母にこういう奉仕活動だけを求めるのは間違いだと思うが、親は学校を「そこにあるもの」としてしかとらえられず、なるべくPTAに関わりたくないと考える先生や父母が多い一般の学校の状況から見れば、最初から地域の親たちがいっしょに作りあげてきたこの学校の経過は、あたたかくも新鮮に写る。ちなみにこのPTA自身は、こういった初期の奉仕活動のことを「新設校のハンデを克服するためのやむを得ぬ措置だった」ととらえているようである。

一方で、広報誌「松の根」を誌名を公募して誕生させ、運動会には当日の作業や多くの競技に地域ぐるみで参加、父母と教師が技を競い合う球技親睦会も行なった。教師、父母、児童の労作の成果である花壇はコンクールで入賞を続けるなど、地域の親たちはいやが上にも学校のことに関心を向け続けてきたようだ。

こんな背景の中で、PTAの要望を受けて授業参観が実施されたり、学級懇談会がひんばんに行われるようになっていく。テーマとして「PTAのありかた」「学級父母会のもちかた」「通知表について」「復習の考え方」「誕生

会について」「クラスの編成について」など、身近で大切なものが選ばれている。

●あざやかな変身

小倉きよ子さん(四十八歳)は、創立二、三年後にこのPTA会員となり、根本内小に民主的なPTAを作り、育てあげた立役者の一人である。自分は他の運動(有機野菜の共同購入や親子映画会など)で忙しいこともあって、一度も役員になったことはないが、運営委員会で積極的に発言したり、推せん委員長になって、こればと思う人を役員に送りこんできた。昭和五十四年から五十八年まで会長をつとめた生木ヨシミさん(四十六歳)も、「私は小倉さんに育てられたんです」と述懐する。

小倉さんはこんなふうに語った。

「子供が入学した当初は、労働奉仕ばかりしているようなPTAに背を向けてたんです。でもそのうちに運営委員会に出るようになって、そろそろそんな活動から脱却しなくてはと積極的に思い始め、教育の中身について話し合いを始めました。その頃松戸市では難しい算数教科書を使っていたので、そんな問題を学級懇談会で取り上げたりして……。

そうして同じような考えの仲間を増やし、推せん委員になって、できそうな人はほとんど役員に送りこんだのです。代々男性会長だったのを、初めて女性会長にしたのも私たちでした。まだ市内では女性の会長は半数以下でしたが。義務教育はあくまで公費予算だと主張して、多数決で労働奉仕を廃止にもちこみ、すべて議論でPTA改革をなしとげていったんです」

こうして創立六年目に、小倉さんたちが中心になって会則も組織も大幅に改正し、更に「運営のてびき」を作ってそれまでの後援会的PTAから民主的PTAへと新しいスタートを切ったのである。

組織の方は、それまで置かれていた環境整備部、保健体育部、成人教育部、財務部を、実情に合わなくなって不必要(たとえば財務部は、PTA諸経費の預金口座振替制度の実施により、集金業務が合理化されて不要となるなど)として廃止し、新しい組織では地区委員会、文化委員会、広報委員会、学年委員会として整理されたが、これは現在他の多くの学校でも同じようなしくみであろう。

同時に、実情に合わなくなったと一年がかりで検討を重ね、改正された会則は、その後も何度も見直され、手を加えられてきた。たとえば九年目の昭和五十二年には実行委員会細則ができてそのしくみを一新している。それまでは各専門委員会の代表が話し合う連絡機関だったのが、会員だ



根木内小学校

れもが提唱できて、必要に応じて置くことができる機関とし、会員有志によって構成され委員長は互選とし、役員や各委員長は原則として兼任できないことになっている。

こうして、給食実行委員会（前年度の二年生が一年間学校給食に焦点を絞って活動、子供たちが毎日学校で何を食べているのか、資料を集め、分析し、見学、試食、話し合いと学習を積み重ねた報告が高く評価され、更に学校と話し合いを続けたという要望が校長の賛同を得て設置された）、過密対策実行委員会（次章で詳述）、わらび座公演実行委員会（「子供によい文化を与えたい」「わらび座を見せてやりたい」という一学期のクラス懇談会での一母親の発言が、子供をとりまく文化の荒廃をうれう親たちの共感を得て発足、その年の終りごろ遂に体育館で子どもたちが「音楽劇かまくら」を見せることができたのであった）が次々に生れて仕事をなすとげ、その成果は子どもたちのしあわせに直接結びついていったのである。先にふれたPTA十周年記念誌発行も、実は実行委員会を作って行われ、資金は積立金と廃品回収収益金が充当されたのであった。こうして現在も絶えず見直しが行われつつ受けつがれているこの学校のPTA会則、そこには確かに他の多くの学校の会則には見られない条項が盛り込まれている。

たとえば第三章「方針」では、「本会は日本国憲法、教育基本法、および児童憲章の精神を尊重し、教育を推進す

る民主的団体として運営する」とうたい、会則の最後には教育基本法と児童憲章をあわせて収録してある。

また、第五章「会員」のところには、「すべての会員は、会員として平等の権利と義務を有する」「会員は事務局長に申し出れば、公式記録、会計帳簿を閲覧できる」などの項目を入れて、PTA活動が一部の役員のものだけになっ
てしまわないように、という配慮がうかがわれる。

学校長については第三十二条「学校長は本会と学校運営についての調整をおこない、すべての会議に参加して意見等をのべることができ」とある。

昨年度から、この会則と一しょに一冊にまとまって会員の手もとに配られている「運営のてびき」は、昭和四十四年に会則、組織が一新された折、会員みんながPTAの働きを正しく理解し、新しく役員や委員になってもすぐ活動できるための参考資料として作られたものである。これもその後何回かの改正を経て、「PTAとは」と、学校とPTAの関係を図解入りで解説するなどして、望ましいPTA活動のあり方とか、役員の仕事や各会議、各委員会の開き方や内容について、くわしく説明した小冊子である。

これを作った一人である小倉さんは、「役員や委員に選ばれた人が、途方にくれないですぐスタートできるための助けにするという意味もありましたが、曲ったPTA活動を抑える力にするためという願いもこめました」と語る。

幸い、その後ずっとこれを片手に活動してきた役員や委員から、この冊子の存在が感謝され、重要性が認められ、陰で行った人事作戦も奏功して、この学校のPTAは、じつにうまく風通しよく機能していったのである。

労働奉仕的PTAから、それを土台にして民主的PTAへとみごとに変身——それを可能にしたのは、ひとえに「これでもいいのか」とたえず子供と教育とを見据えてきた、親たちの努力だったのだ。役員や委員にならざれると、規約などろくに読みもしないで、ともかく、今までの活動を踏襲すればよいと、なるべくらくに無難に一年の任期を終えようとする、他の多くの学校のPTAとは何と云うちがいだろう。

かびがはえて埋もれた感じのする我々の学校のPTA規約にひき比べて、多くの真剣なまなざしにさらされて何度も洗われてきた根木内小のPTA会則は、まさに光り輝いてみえる。

● 成功した新設校運動

昭和四十八年頃から、この地域の人口増加に伴って児童数がどんどんふえ続けた根木内小学校は、各年毎にプレハブ使用はまぬがれないような状況になってきた。そこでPT

Aは、プレハブ校舎で授業を受ける弊害だけは防ぎたいと、現在の不足分を場当りの解消するだけでなく、三年後を見越した本校舎増築を市に要望、それが認められて翌年から増築工事が行われたが、その後も二・三年毎に増築をくり返さなければ追いつかないほど、児童数の増加は急ピッチであった。

先にふれた生木ヨシミさんが役員になったのは、こんな頃、昭和五十二年であった。翌年には四十九学級二千名という、松戸一のマンモス校にふくれ上っている。

前年度に発足した過密対策実行委員会は、過密状態での実情調査や問題点の整理にまず乗り出した。トイレやプールの問題、廃止になった「歩き遠足」のことなどが学級懇談会などで話し合われ、教育委員会に交渉に行ったのだが、教委は、小金原地区の他の二校に少し児童を移して、三校の学区変更で何とかしようという程度のことしか考えていないことがわかった。

それでは大規模校をいくつも作ることにするだけだとPTAでは反対し、過密解消のためには分離独立校を作るしかない、町内会や団地自治会などにも働きかけて支持の輪を広げながら、(一)五十四年四月までに分離校を新設すること、(二)新設校には現在校と同等以上の内容を整えること、(三)通学路などの配慮や対策を講ずること、と要求をまとめ、三日間で五千六百人の署名を集めて議会に陳情。これは五

十三年三月の議会で採択され、地域の議員たちを動かして具体的な土地さがしにかかった。幸い、市街化調整区域で休耕田があり、地主側との利害が一致して、議員たちが超党派で市当局に働きかけ、市が交渉してうまく土地が確保できたのだった。

が、ここで安心するのはまだ早くて、生木さんたちPTA役員たちが苦勞し、活躍したのは、むしろここからだっただの。

「市に交渉したとき『新設校新設校と騒いでも、いざ建てると誰も行く人なんかいないよ』って冷たくあしらわれたんですね。今までの学校を出て新しい学校へ行くのは子供たちにとってイヤなことだから、その子たちに不利を与えないよう、絶対に新しい学校の中身まで見守って、根木内小と同等かそれ以上の学校にしようって、その時決意したんです」と生木さん。

そこでPTAでは新設校の具体的なプランを示すよう要望書を出したところ、回答として示されたプランは、五階建てになっていた。母体校の根木内小は三階建てなのに、教委では、十分なグラウンド整備をするには工期が間に合わず、せまい校地を効率よく使うためにはやむを得ないという理由をあげていた。

これに対しPTAは、転落事故や災害時の危険を防ぎ、校舎と校庭を近づけて休み時間の「遊び」を十分行わせる



根木内東小学校

ためや、妊娠、出産時の女教師の母体保護のために、三階建てにしてほしいと主張し、家を一軒一軒まわって〇歳から六歳までの子供の数を調べ上げ、今後三十学級以上必要になるとは予想できないと反対した。

校舎建築の計画案を審議する六月議会が一週間後に迫っていたある日、PTA役員会で論議した足で役員たちが教委を訪ねると、二日後には議員たちに議案書が配られることになっていて、その議案書では「五階建て」になっていることがわかった。市長に議案を撤回してもらおうとしたが、その市長は大阪へ出張中だった。さてどうするか、と役員たちはその場でカンカンガクガクの緊急相談。

「当時の会長と一人の副会長は男性だったんですけどね、『もうこうなったら、市長と個別接衝しかない』『男なら行きなさい』ってみんなでけしかけたんです。みんな有り金全部出し、私は指輪をはめてたんで、これを質屋に持っていくのかなんで……。幸い会長がキャッシュカードを持っていたのでこれで何とかなると、二人はそのまま追い立てられるように新幹線で大阪へ向かったんです。そしたら途中で、地震があって静岡でとまったんですって。あの人たち、『これは神が行くなと言ってるのでは？』『しかしこのまま帰ったら、あの女性たちに何と言いわけしようか』なんて話し合ってたっていうんです」と当時もう一人の副会長だった生木さんは笑う。

市長は彼らの熱意に驚いてその晩夜中まで陳情を聞き、翌朝次の出張先へ飛ぶ前に空港から市役所へ電話で指示を与え、用意されていた議案書から問題の議案を抜き取らせたそうだと。

「とてもドラマチックだね、今でも当時いっしょに運動した人が集まると、腹をかかえて笑うんですよ」と生木さんはなつかしそうに話す。「もし、みんな女性だったら？」の問いには「やはり同じようにしてたでしょうね」

こうしてPTAでは直ちに全体集会を開き「三階建て」で再び陳情署名運動をすることを決定。これは二日で六千人集められた。そして結局、頑固に五階建てに固執する教委との間で市長が調停案を出し、「四階建て」に決定したのである。（但し普通教室は三階までで、四階は特別教室）他の面でもPTAでは、市内の新設校を何校か見て、移っていく子供たちのために細かい要望事項（廊下の材質やトイレや水のみ場の広さ、階段の手すりまで）を提出し、すべて要望通りの学校が作られたのである。

こうしてできた根木内東小は、とても立派で、昭和五十四年四月団地の真中に線が引かれて子どもたちは別れたのだが、誰一人文句もいわず、喜々として移っていった。この地域の誰もが、PTAが中心になってみんなで作り上げたいい学校だということを知っていたからである。

この分離校のために開校前からPTA準備委員会が作ら

れ、開校後すぐPTAが結成された。そのPTAは、根木内小より更に民主的で充実した活動を行っているということである。

現在根木内東小は十三学級の小規模校、家庭的な雰囲気、に満ち溢れている。根木内小の方は三十三学級で、空き教室が十一もあり、自由に使われている。

新設校運動とか、学区変更となると、住民の間で必ずもめごとや混乱が起き、なかなか一つにまとまった建設的な運動に盛り上げることが多い。それは、各人がどうしても「我が子はどうなるか」という観点で動いてしまうからであろう。「我が校から余計な者を追い払えばいい」という見方を捨てて、「みんなのためにすべての環境をよくしよう」という観点にドッカと腰を据えて勢力的に取り組んだ根木内小PTAの新設校運動は、何ともさわやかな後味を、関係者みんなに残したようだ。

このPTAにはこんなスローガンがある。「ひとりの子どももしあわせは、みんなの子どもの中にある」

● 原点にたちかえって

成功した新設校運動ではあったが、終ってみると、けっこう陰口もきかれた。「何もPTAがあそこまでやること

はなかったんじゃないか」「政治のことに首をつっこみ過ぎた」。特にその声は、人数が少し減っただけでそれ程大きな恩典もないかに見える母体校の根本内小の方に多かった。

分離した年会長に就任した生木さんの課題は、足元のぐらつきかけたPTAをどうたて直すかということだった。

そこでその年の活動方針として、子供の生活をもう一度見直してみようということを出した。先生にアンケートを出して、学校での子供のようすを書いてもらい、地域や家庭の中での子供のようすを調べ、小冊子にまとめて現在の子どもの姿を浮かび上らせた。

そうすると、遊び時間の少ない子供たちの生活が見えてきたのだ。幸い先生たちがすぐ反応を示して下さり、学校での二十分休みには必ず外に出て、思いきり体を使って遊ばせるような体制が取られるようになった。放課後も目いっぱい学校で遊ばせてくれるようになり、短縮授業になってからも三時までには校庭で遊ぶようになっていた。子供たちは大喜びで、これは現在も続いている。管理職の先生たちは早く帰したがっているようだが、親や他の先生たちの要望をきかざるを得ないような状況らしい。

残念なことに帰宅後の子どもたちはおけいこごとなどで忙しすぎて、なかなか遊べない。ことあるごとに子供たちがこんなに忙しくていいんだろうかと言っているのだが、

その辺の親の意識はなかなか変らないと生木さんは嘆く。かつて近所の空き地をPTAが借り受けて子供たちに解放した実績もあるのだが、時代の波はここにも押し寄せている。

また、地域のお店の人たちに子どもたちのようすに注意を与えてくれるように頼んで歩く活動もした。大金を持ってきたらたずねたり、登校時に大きなお札をもってきたら預かってくれたり、万引したら叱ったり親に知らせてくれるように。

最初は店が知らせると、親がすごい見幕でやって来て、「うちの子に限って……」とわめいたり、「お金を払えばいいんでしょ」とお金を投げてよこしたりしたそうだが、「続けているうちに親の態度が変わってきて、「よく見つけてくれた」と感謝したり、土下座して子供といっしょに頭を下げたりする父親がいたり、両親と祖母が店に来てあやまつたりするようになってきたそうだ。

こうして親が変わることによって子供も変り、店の方も損金が二十万から五万円に減ったと喜んで、地域のおとなみんなで地域の子どもの面倒を見てくれるようになってきた。

「PTA活動が自分の子どもとどうつながるかということろを丁寧に行っていくか」と、会員がはなれていきますから」という生木さんの言葉は、三年間常にPTAの原点を

見つけてそのトップに立ってきた人の、体験の厚みを伝え
ている。

● 混とんの中でまず実践を

そして現在、その生木さんのあとを受けて会長になった
伊藤桂子さん（四十歳）は、会長として二年目が始まった
ばかり。去年、先輩たちが築いてきたすばらしいPTAを
受けついで、レベルダウンしないように持ってくるのに神
経を使ったが、今年はその体験をふまえて少し余裕をもっ
て臨めそうだと。

その伊藤さんも今年の役員選出の際にはずい分迷ってや
つと引き受けたのだそうだと。
「一番ためらったのは、PTAの全責任を負うというその
重さと、それともう一つ、あいさつがイヤなことなんです」
と率直に語る伊藤さんは、私たちと変らない普通の女性の
ようであれしい。が、彼女がやらないとどうも体質の古い
人がなってしまうような気配だったので、生木さんたちに
説得されて学校のためだと思い、思い切って引き受けたと
いう。彼女は生木さんにつかまえられ、育てられてきたの
だそうだと。その伊藤さんは同じ意識をもった鈴木七重さん
（三十九歳）を引き入れて、副会長になってもらいいっし

よにやっつけていこうと呼吸を合せている。

「私も、あとに続いてくれる人を早く見つけ出さないと……」
と鈴木さん。こうしてきちんとしたPTA観をもった
人脈が綿々と続いている学校は何とも羨ましい。その陰には
相当努力がなされているようで、父母会でいい発言をした
人は目をつけていて、アタックして役員に入ってもらおうの
だそうだと。

この学校の役員選出法はおもしろい。推せん委員会制度
で、まず在宅投票でクラスより三名ずつ選ぶのは他の学校
でもやっていることだが、百名ほど出た候補者全部に、そ
れぞれPTA観を書いてもらう。そしてそれを印刷して全
会員に配り、会員はそれを読んで二次投票をするのだそう
だと。

その名簿を見てみよう。一一三名のうち男性が二人入っ
ている。白紙の人が十九名あるが、これは出さなかった人
である。「特になし」と書いた人が七名、中には「何も感
じてない」とか、「現在のPTAには関心ございません」
と書いた人もある。

「辞退いたします」と書いた人が二十八名。その理由はさ
まざままで、「推せん下さった人には申し訳ないが……」と
か「仕事をもっていてできないので……」から、「今回は
辞退するが数年後に考えさせてもらう」、中には「過去委
員を五回やりました。PTA本来の目的から外れた活動が

多く、子供が犠牲になり家庭への障害が大きく、本来のPTA活動に戻すよう努力しました。しかしいまだに変わらず従来の活動が続いているので、このようなPTAの委員や役員は「すゝめ」気がありませんと勇ましくことわってきた人もいる。

役員主体のPTAになっていると疑問を出している人が四名。「親が自分の子供と近隣の子供たちに目を向けていけば学校でのPTA活動は特に必要ない」とか、「先生の手伝い役でよい」と不要論をとなえる人が二名。「参加しやすい活動内容で」とか「会員一人一人にしみ渡りような」とか、「形式ばらずにやさしく」などと要望を出した人が十七名。そして二十四名の人がPTAの意義や重要性を積極的に認めており、「今年委員をやってみて、一人一人の協力の大切さとその偉大な力を知りました。蓄積した昔の知恵を出し合える場です。皆が順番に仕事を引き受けてみましょう」「自分たちのPTAです。気軽に参加して親同士の和を広げてみませんか。それが可能な場だと思えます」「なんとなく子供を育てるのではなく、みんなで話し合いながら育てる。また、子供と一緒に共通の話ができて楽しさがわかるところだと思う」「子供を損なうことなく大きくするために、教師と親が知恵を出し合う場であり、その仕事は皆が少しづつ担うものだと思います」などとそれぞれPTA観が楽しい。

他の学校でもこんな試みをしたら、どんな結果が出るか

興味深いところだ。

こうして二次投票で選ばれた上位四十人が一堂に集まり、話し合いで八名の役員を決めるのだそうだが、今年は四回の集まりの未決定したという。役員になると週一回以上は出ており、伊藤さんも週一度のギターのけいこが何とか続いているというほど忙しい。これからは働く母親がますます増えてくるので、時間帯や方法を働いている人も参加しやすいように変えていきたいと伊藤さんは言っている。

このプリントを見てもわかるように、これほどすぐれた活動をしているPTAでも、会員全部の意識や方向がまとまっているわけでは決してない。いや、それだからこそ雑多な人間の集団として自然な姿なのであり、そのさまざまにある考え方をそのまますべて皆の前に出そうという姿勢こそ、民主的な運営のしかただといえるのであろう。その姿勢はこの学校の広報にも、運営委員会報告にも十周年記念誌にもじみ出ている。

きれいごとや、うわつらの事務的な言葉ばかりが並んでいるのではなく、PTA自身の行動や決定に対する反省も、一般会員からの批判も、またそれに対する反論も、みんなひっくり返して、全会員の前につきつけられているのだ。この学校では総会のときにも、全く種々雑多の珍問や奇談までとびかかって大変賑やかだそうだ。

総会といえ、数年前に、いつも出席者が少ない総会を

何とかしたいと、新しい試みがなされた。プログラムに工夫をこらして、会員をひきつけるようにしたのである。

この学校では年度末と年度始めの二回開かれ、三月の総会はその年度の活動・会計報告やその承認、新役員選出などで終るが、五月の総会は第一部議案審議、第二部講演（学校の先生二人の話）、第三部懇親会とし、第三部では新任の方だけでなく全部の先生の紹介やコーラスをささみながら、お茶菓子も出して学年毎に輪を組んで、学年の先生たちを囲んで話し合うのだそう。

これが目玉になって出席者はその年一挙に三百名を越え現在も毎年五百名（全会員の半数近く）ほどが出席して盛況である。三月の総会にも百数十名の出席者があり、先生方は両方とも全員出席。生徒は午前中で帰らせて勤務時間内に行われるというから、学校全体がいかにPTAを大切にしているかがわかる。親たちの実力と実績がものをいっているのだろう。

しかし、ここの卒業生たちが進む根木内中学にはPTAがなくて、この小学校のPTAのあり方が肌に合わずに、もっと飲んだり食べたりするような会がいいのにと思っていた人達が中学に進むと、そろって後援会的父母の会の役員に名のり出て、管理職とすぐ親しくなってしまうという。小倉さん達がPTAを作ろうとしたのだが妨害されて果せず、今、子どもたちが荒れてきたのを潮に、再びPTA作

りを目ざして地域で話し合いを進めているそう。

こうしてみると、決してこの地区だけが別天地なのではなく、私たちが住んでいる地域でも、もっと仲間をふやして本気で努力すれば、子供たちをとりまく環境を変えていけるのではないかと希望が湧いてくる。

PTAなんてダサイコッタ、人間関係が煩わしく、時間ばかり食われて一銭にもならず……とみんな逃げてきたけれど、いま無責任な親の後姿を見て心がこわれかけている子どもたちを前に、やっぱり何とかしなくては、と出ていける場、みんなで考え合って何かを実行できる場は、とりあえずPTAではないだろうか。

一人の親が我が子だけを見つめて生きる間違いが、次々に実証されている。子どもたちは、百の教育論より、一つの実践を待っているのだ。



嫌でも明日の大人たち

伊藤友宣著

「それでおれは言った、真剣に、
「わめけわめけエ。文句あったら、言いた
いだけ言え言え」

するとおまえがうなった、大声で、
「そんなもん、言えることか。どう言うて
も言い尽くせんわッ」

で、おれは、負けん声で、
「言い尽くせんわイ。腹の立つッ!! と、
どなれどなれどなれノどなりちらせッ!!」
と、うなった。すると、おまえは、しっか
りおれに向いた。目が光っていた。

「ほんまなア、イトウさんッ。きいてエヤ。
センコ、話、聞けへんのや、ほんまッ。一
方的にやア、説教はっかりしやがってやア」

親子問題のカウンセラーとして神戸心療
親子研究室を開いている著者は、(大人ど
うして、どうだこうだと言いつづけているだ
けではあかん)と思いつづけてきた。そし
て大人から子どもへのメッセージとして、
いわゆる「問題児」の一人一人にあてて、
「大人の気持を書きつづった」のがこの一
冊である。ここに描かれている子ども達の姿
も、大人の姿も恐ろしいぐらいありのまま
だ。大人のいやらしさ、子どもの反抗が、
ぶつかりあって火花を散らす、その中で、
どんな軌道を外れていってしまう子ども
たち。

コミュニケーション不足のためお互い
に理解しあえぬ者同士となった親と子。ど
んなに拒否しても、いやでも大人になる次
世代の子どもたちに、どんな大人になった
らいいのか、人間としてどのように成長し

ていけばいいのかを著者は語りかける。

著者の悲しみ、憤り、苦しみ、ピリピ
リ伝わってくるようである。きれいごとの
教育論にあきあきしている人たちに、ぜひ
一読をすすめたい。

(ばいほ出版 一〇〇〇円 山本彩子)

積極的に生きる更年期

ロゼッタ・ライツ著

池上千寿子・根岸悦子訳

更年期といえ、不定愁訴に悩まされる
憂うつな更年期障害を連想し、女が女を卒
業する人生の夕暮れ時とさえ考えている人
も少なくない。

「この本は革命的な書物です」という自信
にみちた書き出しで始まるこの『更年期』
はこういった意識を真正面から打ち砕き、

「自分を大事にし、自分のからだをいとおしめ、更年期を明るく受けとめ、楽しく年をとるための本」である。

三人の娘を育て上げ、更年期のまっただ中であつた著者が、やつと本屋で探してあてた本は、すべて否定的にとらえて恐怖感をうえつければかげた更年期神話ばかり、自分が探し求めている真実の姿は、経験者の話し合いからしか得られないと考え、自宅で小グループのワークショップを開く。

何年もかけて千人以上の女性と話し合い、自分自身の問題として取り組んでいく、まさに既成の文化への挑戦ともいえるその迫力は、読む者を圧倒する。

更年期の正しい認識は、そのまま性や人生全般のとらえ方につながっていく。

「女らしさの終焉、マスターベーションの弊害といったかびくさい考えは、ごみ箱にすてよう。年をとるほどセックスは楽しい。セックスが楽しくなるのは若いころより自由になるからだ。心とからだを別々のものとしてではなく、統一と調和のとれた一個の人間の分身なのだと思える必要がある」と述べ、人生の半ばにさしかかり、喜びを求めて積極的に生きるための、大きな指針

を与えてくれる。

ホルモン・ガン・肥満・栄養などについても、豊富な資料を駆使し、具体的に実にかかりやすく書かれている。

アメリカ人の書いた『更年期』とはいえず、「アメリカでは」を「日本では」に置きかえても全くその通りと思えることばかりで、アメリカでも事情は同じかとおどろくほどである。

訳者の一人は女性問題に詳しい翻訳家、一人は産婦人科医であるが、訳者によって日本の更年期の状況を知る本の紹介もされており、全女性に必読をすすめたい。

(鎌倉書房 一二〇〇円 加藤歌子)

人間って不思議

半田たつ子著

「女性解放」に、勢いのよいジーンズとTシャツ、チリチリパーマの若い娘を連想する人は、この一冊を読んでほしい。

著者は、まぎれもないウーマンリブの一人である。リブ路線を受け入れられず去つた「家庭科教育」、そして現在の「We」の編集長として、自立した女と男の作る家庭

のかたちを求めてたたかい続けている人である。

たたかう女は荒くれた女でなく、しっかりと細やかな、語の最もよい意味における女らしい女でもありうることを、この作品は私たちに知らせてくれる。

市川房枝氏の思い出、岐阜なずな学園のルポ、父上の死の記録、テーマも長さもさまざまな文章の、控え目な表現の中に著者のこまやかさと心情の深さが匂い立っている。

「父に対峙するとき、私はいつも若者の代表のつもりだった。その父が消え、視界が急に開けた。すると行きずりの白髪の人がすべて親しく感じられてきて『どうぞお大事に、生ききって下さい』と肩を抱きたくなってしまう」

余韻の深い文章が、読む者の心を捉える。けばけばしい表紙のまかり通る現代で、地味な装幀も奥ゆかしい。

(ウイ書房 一五〇〇円 田中喜美子)

★情報コーナー

長篇ドキュメンタリー

映画の切符を

さしあげます

「東京裁判」(小林正樹監督)
を女の目で見る試写会

◆呼びかけ人 林 冬子

上野たま子

◆発起人 住井すゑ・吉武

輝子・樋口恵子

他四〇人

◆四月十三日(水) 十二時半

上映(所要五時間二十分)

◆銀座七丁目ガスビル六階

上映に先だって秋山ちえ子さ

んの話が十五分あります。日本人として一度は見る価値のある映画だと思います。鑑賞希望の方は、わいふへ大至急電話で申しこんで下さい。切符を差上げます。

「買春観光問題を考える」

パンフレットが

できました

フィリップンをはじめ東南アジアへの観光旅行が最近若い女性の間で人気が出ています。しかし一見平和なこの観光ツアーも、実は先頃国会でも問題にされた男たちの売春観光ツアーと同じ根を持っていることに気付いている人は少ないようです。

日本基督教団発行のこのパンフには、経済侵略の側面として行なわれる売買春のシス

Q. このような観光について次のような批判や感想がありますが、あなたのご意見に近いものはどれとどれでしょう。

番号	理由	男%	女%
①	男性の楽しみだからしかたがない	9	2
②	アジアの国は貧しいので身を売る女がいてそれを買う男がいてもいい	8	2
③	日本では売春が禁止されているから、男が外国へ出て行くのだ	10	5
④	日本では女性と遊ぶのにお金がかかるが、外国は安くてよい	5	1
⑤	日本のなかで遊ぶのとちがって、後くされがないからよい	9	13
⑥	男のつきあいで行く場合はしかたがない	7	6
⑦	外貨のムダ使いである	6	8
⑧	性病が日本に入ってくるのが心配だ	9	16
⑨	反日感情をあおるおそれがあるから自粛してほしい	34	35
⑩	他国の人々を蔑視し搾取する行為であり許せない	37	44
⑪	その他(回答ナシも含む)	17	22

テムをはじめ、それを許容する日本人の意識の低さを示すデータがもりこまれていて、ショックングです。

ご希望の方は左記へどうぞ
〒160 東京都新宿区西早稲田

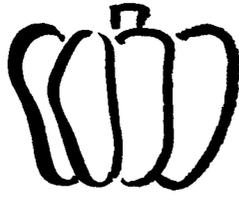
二一三一一八一三一

日本基督教団 中嶋正昭

頒価三百円(送料一七〇円)

もう一品ほしい

ときの料理ブック



わいふの会員の竹内希衣子さんの楽しい料理の手びき。じゃがいも、さつまいも、

ピーマン、タケノコ、ハス、生しいたけ……それぞれの野菜に、ちよつと楽しく手をかけて「もう一品」に仕立てるところが満載されている。若い人々が大いに重宝しそうな一冊です。さし絵がたのしい。

大和書房 九八〇円

優生保護法改正に

関する

パンフをどうぞ!

「優生保護法改悪に反対する三多摩女たちの会」である私達八くにたちVグループは、昨年暮れに国立市議会に反対の陳情をし、採択まで持っていく事ができました。この活動の経験から「優生保護法改悪阻止」地域から運動を進めるために「優生保護法はいらない・刑法墮胎罪はいらない」というパンフレットを作り多くの方々から好評を得ていま

す。これは他の地域活動における議会への働きかけのハウツーにもなると思います。

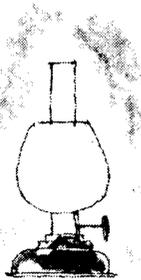
たとえば陳情書の類例、情報宣伝の方法、一人でもやる方法、改悪の動きと私達の運動など市民運動をすすめる上にもきつと役立つでしょう。申込先

〒186 東京都国立市中

二一七七一三七

伴方

皿〇四二五―七六一八二六〇
振替口座東京二一六七四二四
(一部二百円)



日仏女性資料センターへ
参加しませんか

フランス語ができなくても大丈夫です。日本の女性の状況をよりよく知るために、フランスの女性事情を知りたいと思っているかた、主婦問題、子育て、労働問題など、比較文化的な考察に興味をお持ちの方はぜひご参加下さい。

資料を直接利用したい方はフランス語ができないとムリですが、資料を使ったり、講師をお招きしての研究会では日本語が使われます。

発起人にはなんとシモーヌ・ド・ボヴォワール女史も名を連ねていますが、固苦しい集りではありません。気楽な、そして充実した勉強がで

きそうです。

フランスばかりでなく、広くヨーロッパ諸国の事情を知るためにさまざまな講師をお招きしていきますので、国際的に女性問題を深めていききたい方、ぜひご連絡下さい。

入会金五千円、年会費は三千円です。

連絡先 編集部

田中喜美子

鈴木みち子さんの

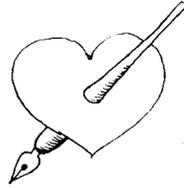
はじめての本が

出ました

嬉しいです。わいふで文章を書きはじめて人が、着々と本を出せる時代に。

「性長期」とじこみのチラシ見て下さい。育ち盛りの子どもに、どんなふう性話をしたらよいか迷っている方、ぜひ買ってみてはいかが。

「わいふ」から巣立ったライター、これで何人目かなあ。みんなで頑張ろう！



自然に近い化粧品

ベルビュースクワランオイル、深海サメの肝臓からとれる天然スクワラン100%、人間の皮脂にとっても近い成分、添加物は一切はいつていませんので自然な使用感、スキんケアーはこれ一本で充分！
詳しいパンフレット、サンプルさしあげます。希望者は

左記へ、また販売員も募集しています。(他の仕事をして

いる方でも可、当方主婦兼スチュワードス)

〒272-01 市川市塩焼

四一〇一二・

二一五〇一

増子晴美

☎〇四七三一九六一九三九四

結婚相談所 会員募集

緑深い神宮外苑の中に、(財)日本青年館結婚相談所があります。

相談所がオープンして二年六カ月、千二百人以上の会員が登録し、四十組以上のカップルが成立しました。最近行なったアンケート調査によりますと、結婚相手を選ぶ条件として、男性は女性の年齢・結婚歴・身長を、女性は男性

の職業・年収・学歴を重視しているという結果がでました。

とはいうもののお互いに始めている見合で、二週間後に婚約という超スピードのカップルもいて、やはり縁は異なるものの感じがしないではありません。ペテランの心優しいカウんセラァが親身にアドバイスをしております。

☆詳細は東京都新宿区霞ヶ丘町十五番地

(財)日本青年館結婚相談所
☎〇三三四七〇一四六四一
地下鉄銀座線「外苑前」下車
徒歩五分。総武・中央線「千駄ヶ谷」下車徒歩八分。

東京都町田市
村松勢津子(職員)

ウサギ小屋からの脱出

高野貴子

佐世保に行くまで

私が東京を離れたのは、一九七八年三月末のことだった。

二月の初めの寒い日、何やら浮かぬ顔の亭主がそうっときり出すには「転勤するらしいけど、どう思う？」私は思いがけないことだったので返す言葉なく「エッー」と声を上げてしまった。「どこなのよ、いつ」と質問してみたが、ついに来るものが来たのかという感じであった。行き先は長崎県佐世

保市、期間は一年以上、四月には向こうに着かねばならない。

今迄生れ育った街東京。旅行以外でここを離れるとは思ってもよらず、転勤先が西の彼方長崎県佐世保市とは遠すぎる。亭主続けて「どうする？」「どうする」って行かなくちゃならないなら行くわよ」なあって返事したものの、その時は単身赴任など考えてもみなかっただけで、佐世保なんて余り良い感じではなかった。(佐世保の皆さんごめんなさい)

亭主は「佐世保は何遍か行っただけど、

転勤候補地の中では気候は良いし、人情も厚く、物価は安いし、一番良い所のように感じなあ。どうだろう」と続ける。

でも私の方はもう上の空で、佐世保っていうのは確か、米軍基地があつてその昔エンタープライズ事件なんていうのがあつたなあ。長崎に近いという話だからカソリックが強いのかしら。いや軍港のイメージが強いなあ。横須賀と同じような感じがする。キナ臭い街だなあ。等々一人で佐世保の街を想像し続けていた。

横須賀。米軍。

「アメリカの富」それは私にとってはずまりpx横流しのチョコレートやおもちゃ、子供達のピラピラした服、金髪に真紅の口紅、なんてつまらないものであったけど、それらがワットと目の前に現われて、かすかな悪徳の香りもあって何とも懐しいような、恐いような気が胸の中一杯になった。

佐世保の街

結局三月二十八日、私は東京を離れた。

長崎空港は空が一色違っていた。青い青い空。佐世保まで三時間強のドライブをして、着いたのはもう夜だった。「闇が深いなあ」というのが第一印象だ。夜が本当に暗いのだ。だから星の光強く、夜空の色が何か透明に見える。高い山がある様子が山の上のあたりで察せられた。

坂を上った旅館に入った。そこから

見るとまるでチラチラとした小さな光が深い海から輝く宝石のようで、大都会のあのあふれんばかりの光の洪水とは全く別物の美しさだった。

翌朝起きてみると街は何だか特徴のないノッペリとした感じであった。高層の建物もなく、玉屋デパートの建物と、もう一つ暗い西洋の城か牢獄のような建物の二つだけが目をひいていた。（この牢獄は後に銀行と分ったがそれでも牢獄という緯名はつけられてしまった）小さな街であったがその割に旅館下の公園が広々としていたのがアンバランスで不思議であったが、その時は「長崎は公園の発達した所なんだなあ」程度に単純に思っていた。後に、そこは昔米軍居留地で、芝生にかまされた大きな家がズラッと建ち並んでいた所と聞かされた。平地の少ない佐世保市街地に、あれだけの広さの居留地があったとは驚きだ。

だが皮肉な事に米軍退去後に市に返還になり、公会堂や交通公園、中央公



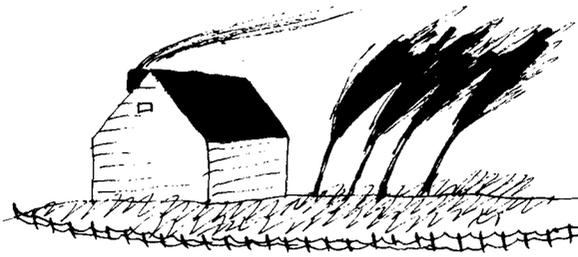
園として市民に広大な土地を提供することとなった。兎に角、傾斜を利用したダイナミックな遊具等、坂の街ならではの施設で、大きさと面白い楽しさと言いい東京近郊にはないおもしろい公園なのだ。

日本の中のアメリカ

佐世保の第一日目は中央公園で遊んで終った。

第二日目、イヨイヨ待望の家を見に行く日であった。幼い頃海水浴旅行の帰りのバスから見た、あの横浜の金網の向こうの外人居留地。芝生にかまされた陽気なペンキ塗りの家。金髪の子がブランコに乗っていたっけ。褐色の大男。あの頃は何やら夢の世界みたいだった。

でも高校の頃は「アメリカンハウス。一度住んでみたいなあ」なあって思っていて、現実にあこがれていたようにだけ、まさかこの九州である金網の向



こう側に住むなんて思いもよらなかつた。しかもそれは出発の二週間前に知らされていたのだ。

少女の頃のアコガレが現実となり、それだけに期待がすごく強く、亭主に「あんまり期待するとガツカリするよ」等と釘をさされていても、ついうれしくなってウキウキとして気もそぞろといった所。恥かしい位だ。

それはその一角からもう日本とは思えないような景色であった。道路を折れると美しいニレの大木の並木となり、少し進むと左に兵士の立つ門があった。その門の向うには、くすんだ緑色の大きな古い館が見える。丁度北の丸公園の旧近衛支团本館のイメージだ。門を入りすぐ右折し、その緑の館を左手に見ながら真直ぐ行くと、芝生のフットボールグラウンド。一面の緑。ピッチリの芝生だ。それに何と夜間照明付野球場。そして次に右手に我々の家が見えて来た。六棟が道にそって建てられている。絵で見たようなこんも

りとした木が芝生の中に点々と散在している。これぞ我が夢の再現だ。

と違って、車から降りて玄関の方へ歩いて行くと、あの昔見た芝生／＼と思ったのが全く別物の足の切れそうな丈なす雑草の原っぱ。南国の太陽に照らされた頑丈そうな草だった。

家は上下二軒ずつの四軒が一棟に入った団地風。あのペンキペタペタの夢のおうちとはかなりかけ離れていたのだ。落胆。

ただ、うれしかったのはその広いこと、芝生？ といいい家といいい東京の家屋の数倍の感覚で、玄関前の廊下は車が二台入るくらいのは広さ。それでも駐車場でないことは入口の三段ばかりの階段で分った。それじゃあ一体何する所なのか？ 悲しいかな、日頃東京の狭い団地住いの私は考えてしまった。結局何にも使わない玄関前のホールと分ったのは、住んでからのことであつた。

全体に埃りだらけで、灰色ペンキが

はげかかたうす汚れた感じであつたが、ドアの背は高く、全て鷹揚に作られている住宅だ。互にA・Bと向き合つたドアがその広い玄関ホールの左手右手にある。

我家はBだった。だがその日はドアの鍵を受けとつていなかったのに入る事が出来なかつた。

外側から見た家は廃屋というのには新しすぎるが、それかといつて生きた家ではなかつた。無人で私達の他にこの広い敷地内に誰もいないのが無気味であつたが……。佐世保のキラキラの太陽に照らされ、灰色の大きな建物が六軒、広い草原の中にある。

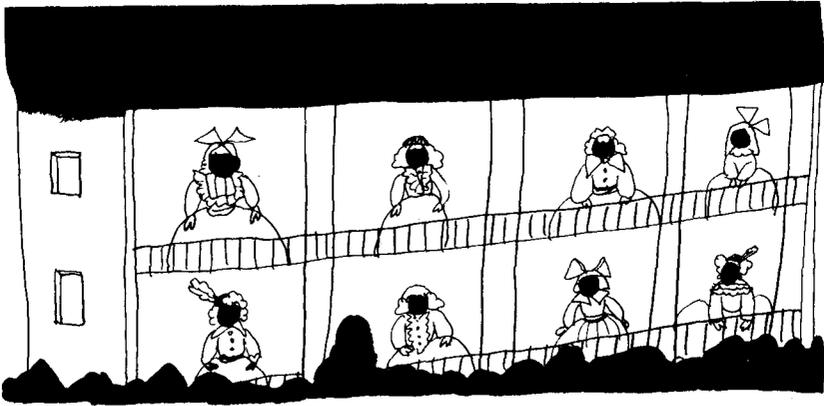
我家のまわりには芝生らしきもの他に、ほんの一畳程の花壇があつた。それが以前の住人を示すがごとく、サポテンに満ちていたのだ。東京で見ると小さな一握りのサポテンではなく、背が一メートル位、トゲが本物の針のよくなヤツだ。又、もう一つのはサポテンの種類なのだろうが、物語に出てく

る食人植物のようにとがった葉を円形に広げている。直径一メートル位か。そして紫露草。間違えてはいけない。あの日本風の楚々とした愛らしい草ではなく、濃い紫色の茎を持った頑丈なヤツだ。それがビッチリ茂っているのだ。

ああこの花々は何と言うべきか。私の感覚と数段ずれている。だれかがアメリカの故郷を思つて作つたものだろうか。全く変な花壇だ。

その花壇のすぐわきが台所の出入口だ。玄関と同じ大型のドアがあり、そのドアの所にも一つ虫よけの網戸がついていた。あつ、これは「アメリカ映画に良く出てくる二重ドアだ」と思つて窓を見ると全ての窓に網戸がある。団地風といつてもそこはアメリカの家なんだなあ、と変な所で感心してしまつた。

車に乗り、門の方へ行くと全く別の道から外人の家族が大型ワゴンに乗つて現れた。ホンの一瞬の出会いだった



が、海軍の制服姿の白人の男とその奥さん、それに髪の長い女の子が見えた。舞台装置も出演者も全く、アメリカ。そうだここはアメリカなんだ。

あこがれのアメリカンハウス

翌日、鍵を手に第二回目の家の見学に出かけた。

あの灰色のドアを開けると、意外なことにそこは広々としたコンクリートの玄関があった。たたきの部分だけで三畳位、右には一間程のクローゼットというのか、物入れがあった。

そのクローゼットは日本の押入れの中板をはずし、上部に鉄パイプをズーッと通したようなもので、戸は引き戸。白いペンキが塗ってあった。玄関上った所は四畳位の板の間。左手に壁でさえぎられたリビングルーム。

何だかガランとした感じは天井が高いせいだ。だが広い。広い。ああ、ついに広い家に住めるんだ。ヤッター。

気持がワクワクしてくる。これからは子供達を十分ゆったりと遊ばせられるゾッ／＼と嬉しくて嬉しくてどうしようもない程だった。

昨日は唯、敷地の広さだけを見て口をアングリ開けたり、又、やや気持悪かったりしたのだが、今日は本当に「自分のものとして住めるんだ」という実感だ。

本当に何もかも今までの倍以上。

玄関のつきあたりは台所で、左に広がり十畳位。ステンレススチールの調理台がコの字型になっている。左手正面、コの字の真中が流しで、その上に大きな窓が広がっている。窓からは高い美しい山（後にそれは烏帽子岳と分かった）が木々の向こうに見える。しかし、その時は山なんかよりも台所の物入れの多いことに唯感激。調理台の広さが公団用の五倍位ある所に、その上五十cmを除き、天井までビッシリの物入れがついている。壁の出ている所には手元用の長い蛍光灯がついていて、

調理台を照らすようになっていた。私は戸をバツタンバツタン開いたり閉じたりしてみた。それにしてもこの天井までの物入れ、普通の日本人には高すぎるんじゃないだろうか。

調理台も私向きに高くて良いけど、(私一七〇cm)これは普通ではとても使いくいと思われた。しかし、この厨房セットは日本のメーカーの名前入りであって、特注品なのかな? と少々ひっかかった。まあそんなことはどうでも良い。昨日見た網戸付出入口もあるし、これは明るくて使い良さそうなお台所だ。ひとつ頑張ろう、と希望に満ちていた。

玄関の所から廊下を台所と反対側に行くと、左にトイレ右に物入れがある。バストイレは四畳半位あって、左隅にバスタブ、その手前ドアの並びに大きな洗面台がついている。トイレは入ってすぐ真正面だ。こんなトイレでは出るものも出なくなりそうな位、落ちつきがない。

廊下つきあたりには日本間に改造した八畳位の部屋と、同じ位の板の間の部屋があった。各部屋共に一間程のクローゼットがついている。その日本間に改造したやり方が奇妙だ。六畳大に角材を打ち込み、畳を動かさないように固定しただけなのだ。その畳のまわりには鉤型に板の間が出ていて、タンスを置いて使うのに便利そうだ。又、この部屋のクローゼットは中板をつけて押入れに改造してある。

東京のマンションは部屋の大きさに合わせて畳を小さくしてあるが、ここは部屋に無理に畳を入れた訳だからおもしろい。(東京のマンションにもタンス置場があれば良いのに畳の大きさを変えるくらいだからそれは無理というものか)

クローゼットの大きさは全て奥ゆき一m、幅二m高さは二・六五mであった。しかしこの二LDKというべき広さに何と物入れが多いことか。全部でクローゼットが四コ半。台所の収納と

合わせると、持物は全部収納され、ちらかることはないのではないかと思われた。そして、クローゼットになっているからタンスも不要のようだし、これからの家をどうやって使いこなそうかと考えると、本当に楽しかった。かなり日本的な作りであったが——多分日本人の大王さんが作ったであろうし、又、和風に改造された部分がかかりだったので——それでもやっぱりこれは少女の頃の夢の実現といえる。単細胞人間の私はその晩、仲々眠れなかった。

東京に住んだ人間が、やっと広い家を得ることが出来、それが米軍基地の中であったというのは皮肉といえは皮肉だが、全く自然なのかも知れない。日本の都市部の家が人間を無視し、普通に考えればどこか狂っているというのを忘れている。私の異常興奮はその所から発していたのだろう。

(え・松本をきえ)

サークル だより



● 渋谷サークルだより

遅ればせの今年第一回例会は、二月四日木村宅にて開催。都合で欠席の高野を除き、ホステス役の木村の他、田中、根本、桜井、西井、恒川と子供六名のレギュラーメンバーが集合。部屋一杯緑豊かに一段と整った新居のリビングに全員揃ったのが二時近く。去年より申し送りの、テーマを決めて少しまとまりのある話を、ということ、本日は「子供をいつどのようにほめるか」と、日々考えていることをまとめて発表する「生

活レポート」の二本立て。子供のほめ方については、レポーターの体験から、ほめる方が叱るよりも効果的な場合が多い事、こんなに小さい子なのにといい視点から子供を見、又、他の子供との比較でなく、その子の到達度についてほめるという報告があった。続いて話合ひの中で、自分がほめ言葉をつんだんに浴びながら育っていない親は、やはり自分の子供に対してもほめ方が少ない。又、時々ほめてもらった時に見せる子供の思いがけない一面等を考えると、その子供がその時何を求めているかを考えつつ対処してゆくことの難しさが指摘された。

次に「生活レポート」では子供の健康の為に食生活を考え直すというテーマで、レポーターの体験から、子供のアレルギー気味体質に接して、友人の体験話も参考にして医に頼らない食からの体質改善を目指して種々実行を開始したという報告があった。まず朝食を和食に切換えて無機質豊富な食品を多くし、普段の食事もなるべく動物性の高蛋白食品よりも野菜を増やそうと試みた。が、実行してみると、各々出来上がった家族の嗜好を自然食の素朴な味に向けることも時間がかかりそうだし、調理もパンとベーコンエッグのようにはいかない。さらに、今度は野菜も無農薬のものでなくては、と考え、週一回の共同購入に自転車で行って参加することになったが、これも労力と共に泥や虫の始末欠品などの供給の不安等戸惑うことが多い。ただ安心して口にできる物という目的で努力しているという報告であった。確かに「複合汚染」に端を発して様々に食生活の見直しが進められ実践されているが、健康食品企業や各々の団体や組織がばらばらに活動している中を我々利用者がつまみ食い程度に与えられのまま受容している現状ではないだろうか。ささやかな我々の防衛をもう少し強固にする為に、もっと情報を集め、皆で、長続きする健康的食生活を考えることを当面のテーマとして考えている。

(恒川 記)

連絡先 杉並区永福一の十一の二の

二四四 恒川美代(渋谷サークル)

●千駄木方面で

サークル作りませんか

千駄木、谷中方面の方、子連れサークル作りませんか。

私、三歳と一歳の二児の子育てまっ最中。行動半径の狭さに少々うんざり気味です。「わいふ」の読者なら、共に集まって語ることから、何かをはじめられるのでは——と期待しています。お近くの方、ご連絡下さい。

東京都文京区千駄木三十三四一八
TEL ○三三八二一八〇八一

坂本 真弓



●八王子サークルだより

ついに二人だけの集会。もともとムリをせず成り行きにまかそうという考えだったのでまずは思わく通り(??)

たった二人でも集会は集会ということだからってに機関紙を出すことを決めた。初参加の伊藤さんは「わいふ」とのつきあいは長いそうだ。まさか一人だけとは思わず、ぎんなんややきそばをどっさりもって来てくれた。おかげで私はまるもうけ、話もかなり個人的なものになってしまったが、それはそれでいいと思った。主婦の多い集まりは完全なものを望むと大変なのでしかたがない。次は何人の集会で何が生まれるか。日時は前回同様第二日曜(四月十日)午前中小宅家です。

連絡先

○四二六一六六一一四一七 小宅昌枝

わいふバックナンバー

- 167号 主婦の近所づきあい(同右)
 - 168号 悪妻(四五〇円・以下同じ)
 - 169号 母親が働き出すとき子育ては?
 - 170号 変貌する夫たち
 - 171号 ただの女の防衛論議
 - 172号 夫の成功は妻次第?
 - 173号 女とお金
 - 174号 主婦の再就職
 - 175号 子どもたちの心がこわれて行く
 - 176号 わたしの恋愛体験
 - 177号 肉親の老いを見つめる
 - 178号 女・からの履歴書
 - 179号 成功したしつけ・失敗したしつけ
 - 180号 父親はほんとうに必要か
- 送料は一冊二〇〇円、二冊二五〇円
三冊五冊三〇〇円、六冊九冊まで三五〇円です。十冊以上は編集部へ負担致します。ご注文は編集部へどうぞ。(03)二六〇一四七七一

の遊び連れ子 ガイド の乗る船に港の横浜

三月の風は少しあるが、暖い月曜日、三歳八カ月になる息子と二人、横浜に出かけた。

関内駅を右に出て横浜市役所の横を通り、横浜スタジアムを右手に、日本大通りまで約五分、大通りに出ると、あとはわかりやすい一直線である。日本大通りは、開港記念館、地方裁判所、県庁と落ちついた建物のたち並ぶ、県庁街である。

この辺から道路に、カモメや船、電車、異国館など横浜らしいタイトルが埋め込んであり子供とそれらを見つけたら歩くのも楽しい。

子供の足で十五分位歩くと、信号灯、外灯の美しい四ツ角に出る。右手にシルク博物館をみるともう山下公園である。

公園内は、平日ということで団体の観光客の他は、人もまばらである。左手に海を眺めながら、息子は大はしゃぎである。所々に一個百円也のアイスクリームを売っている屋台がある。カ

氷川丸施設案内

正式名称 氷川丸

所在地 横浜市中区山下公園地先

電話番号 〇四五―六四一―四三六一

入場料 大人六〇〇円 六歳以上三〇〇円

三〜六歳二〇〇円

開園時間(平日) 午前九時三〇分〜

午後五時三〇分

(休日) 午前九時〜午後六時

休館日 なし

駐車場 なし 近くに有料駐車場多し た

だし日曜日には公園前の道路に無

料駐車できる。

交通 下車駅 京浜東北線関内駅

それより徒歩二〇分

主な設備 豪華客船氷川丸

どんな遊びができるか 船内見学

船上キティランドで子供が遊べる。

船上より横浜港展望。

いつの季節がよいか 冬を除けばいつでも。

冬は風が冷たすぎる。

遊びにかかった金額 ゲーム代二〇〇円

ップに盛ってくれて、おいしい。それをほうばりながらめざす氷川丸へすすんでいく。中程には、赤い靴をはいた女の子像などもある。氷川丸に乗る前、十二時出発の遊覧船、赤い靴号^{あかぐつごう}があったので、乗ってみることにする。

ちょうどお昼どき、牛乳と少々のお菓子を買い求めて、乗りこんだ。私は、子連れで出かける時は、必ずおにぎりやサンドウィッチを持参する。時間にかまわず又どこでも安心して食べられる、安上がりである。息子も大きな船に乗って大よろこび、一番前に座る。平日のせいか定員五六〇名の船に五〇人程乗る。おかげでゆったりと座れて快適である。お弁当を食べながら、放送アナウンスに耳を傾けると、横浜の歴史から港の様子など参考になる話が多い。船室からデッキに出ると、海がとても綺麗にみえる。

港外に出ると海を見たという感じがする。波のしぶき、カモメと一ときロマンチックになれる。横浜と川崎の工



観光船あかいくつ号

親の楽しみ 一等客室、特別室の見学、船

上から港や山下公園を眺めたこと。

子供の楽しみ 船内の船の模型を見たこと。

横浜文明開化パノラマを見、キテ

Irland で遊んだこと。

困ったことは？ 季節がまだ春浅く売店が

開いてなかった。

食事はどこで何を食べられたか

赤い靴号遊覧船内でお弁当。

食堂はどうでしたか 食べなかったが値段

は普通、観光地にしては安い？

コーヒー二五〇円、ハンバーグ六

〇〇円など。

トイレについて 六カ所あり、掃除はゆき

届いている。しかし設備が古い。

特に用意したいもの 海風が強いのでウイ

ンドヤッケなど。

特に注意したいこと 平日はすいていて、

のんびり見学できるが、シーズン

に入り、休日なら大分混むという。

細い薄暗い順路をぐるぐる回るの

で、小さい児は手を引くなど、注

意が必要。



豪華客船氷川丸

場を通り抜け、山下ふ頭に戻るまで約一時間ミニミニ旅行が楽しめる。夏には、納涼船が出る。夜景はもっと素晴らしいのではないかと思える。息子は、灯台の数を数えたり、波しぶきにみとれたり、カモメやボンボン船に手を振ったり、彼なりに楽しんでる。

船を下りたのが一時、氷川丸へ向う。息子は氷川丸の大きさに驚き、又その大きな船に乗れるので、又々、喜ぶ。

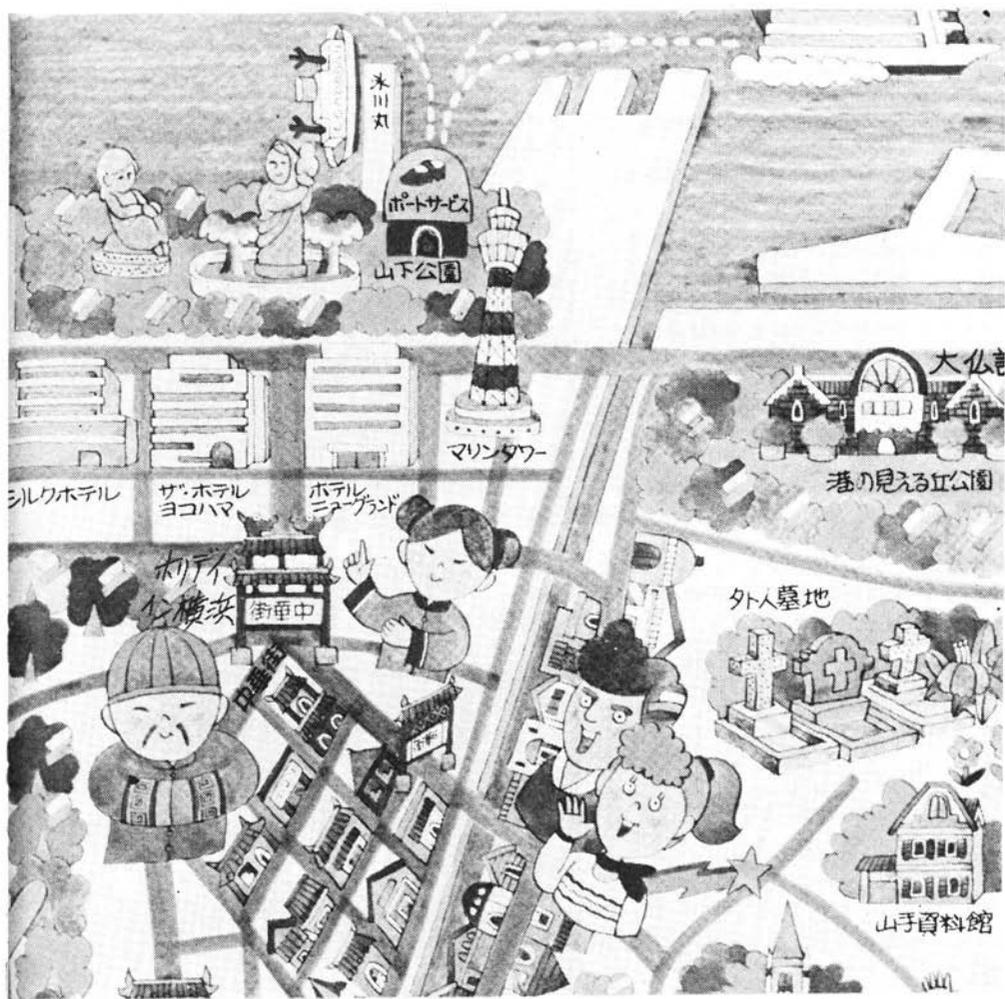
入るとまず世界一周と称して、氷川丸の寄港地と、現地時間が印されている船の模型も、息子ならではのこと、息子はたのしそうである。

船内、順路に添って、モデルルームを見る。一等客室、特別室は落ちついた雰囲気、特に、チャップリンや秩父宮殿下などがお泊まりになったという特別室は、内装も材質も最高級品というところで、流石という感じがする。修学旅行に使われたというカイコ柵式ベッドもあるが、造りがガッチリして、造られてから何十年という歳月

がたっているとは思えない。一等社交室、スモークルーム、大ホール（見られませんでした）など一流ホテルを思わせる雰囲気、目の保養になった。息子は部屋を見るのには興味がないらしく、先を急がせる。中程に特別展示、魚の化石、日本一の大べっ甲亀などの海底探検館がある。その先に休憩所および、貝殻などで作ったペンダントやブローチ、ペナントなどのいわゆるおみやげ店がある。

細かい階段をぐるぐる降りていくとエンジンルームがあり、息子はその大きさに驚く。ブリッジは、他の少し大きい子供たちが喜んでいた。息子はオーブンデッキに出ると大喜び、キティランドという幼児向けの人工芝生広場があり、すべり台や、小さなトンネルなど時を忘れて遊ぶ。ここは眺めもよく、売店（冬期休業）もある。

全体を通じて感じたことは、豪華客船は、それだけで存在感があり、五十年も前に造られたとは思えない程、頑



丈であり、内装もさることながら材質は今では揃えることも困難と思える位立派である。私自身充分目の保養になった。ただ息子の方からいえば、客室よりも、船の模型やエンジンルーム、パノラマ横浜などに興味が有り、又特に喜んだのは、大空の下、キティランドで遊んだのが印象深かった様である。二時すぎにタラップをおりて、山下公園を横切り、中華街も横切る。中華食料品店で、たけのこ、きくらげ、ピルファンなどを買う。

そのまま元町まで、ぶらぶら歩き、(月曜日は休みの店が多いので御注意)時間があれば、港の見える公園―外人墓地を抜け、元町につき当たるコースもある。

肉親の老いをみつめる

細野清美

パートII — その後の半年間 —

姑が脳血栓で倒れた二月十九日に、まもなくなろうとしている。あれから一年……。私は舅姑の生きざまに関心をもち、昨夏「肉親の老いを見つめる」という特集に投稿したのだが、その後、いよいよ本格的に二人が我が家で暮らすことになったので、日々、二人の姿を見つめることが出来た。私はこれを、細野傳次郎、細野千代という二人が、「生きた証」として書き留めていきたいと思った。

再び病院へ

昨年五月に姑より先に退院してきた舅。我が家へ来ることを断り、自分の家（長男宅）で昼間一人過ごす方をとった。そのため、私が舅と昼食を共にするために毎日通うことにした。舅は退院してきた日はさすがに嬉しそうだったが、何だか日に日に元気がなくなっていた。

しかし、私といる間はよく話をし、それも回想じみたことが多くなった。「子供達もみんなそれぞれ立派に一人

前になつたし、孫達もみな出来がよき
そうだ。嬉しいことです」とか「御先
祖様の中では私が一番長生きしている
(九十歳)のです。私より長く生きた
人はいない」さらに「もう、いつお迎
えが来ても良い」とまで漏らすようになつた。

さらに、子供達を育ててきた話から、
亡くした長男のことに話が及ぶと、「子
供を亡くした悲しみは何年経つても忘
れるものではない」(長男を亡くして
すでに五十年位経っている)と言つて
涙ぐむのだった。そして「直之(長男
の名)が待っているのですから死ぬの
も恐くない」と言つて嗚咽した。誇り
高き明治の舅が……。私も涙をこらえ
た。この先、どう舅を力づけていつた
ら良いのだろう……。

あと、舅の気がかりは姑のことだつた。「おばあちゃんにはさんざん苦勞
をかけた」と何度も言い、「おばあち
ゃんは元気でいますか?」と未だ入院
している姑の容態をしきりに氣遣うよ

うになつた。そういえば二人はもう三
カ月近く会つてないので、私は二人を
会わせてあげたいと思ひ、長男に姑の
外泊を提案した。その頃の姑の病院で
の状態と言へば、きちんとしたりハビ
リが行なわれず、ただ管理的な感じが
する病院に苛立っていた私達であつた
ので、すぐ外泊手続きをとつた。

帰つてきた姑は二、三日すると、顔
つきも生き生きとしてきた。そして
う病院には戻らず、そのまま退院して
しまつたのだった。この頃は、姑は歩
いてトイレに行けたし、三味線もゆつ
くりだが弾いたりしていた。しかし、
体の弱っている舅と、やつと歩けるだ
けの姑だけを昼間残しておく心配が長
男夫婦にはあつたのだろう。知り合い
のいる、そしてきちんとしたりハビリ
科のある病院で、もっと訓練を受ける
ように姑に勧め、舅も退院はしたがあ
まり状態がよくないので、今度は二人
同じ病院へと再入院することになつた。
六月の末のことであつた。

生き抜く意志

今度の病院では姑はりハビリには満
足を示した。ところが入院して間もな
くの七月十日、ちょうど私が子供を連
れて病院に行つてゐる時だった。姑の
病室にいた私を看護婦さんが慌てて呼
びに来た。舅の容体が急変した、今瘵
れんをおこしている、と言ふのだ。舅
の病室に飛んでいくと、舅は酸素マス
クをつけ、点滴を受け、医者に見守ら
れてゐた。中には入れてもらえなかつ
たが、病室の外から見えた舅の足が震
えていた。

医者が私に告げた。「意識はありま
すが、瘵れんというのは頭の中で電気
がおこつてゐるようなものだから、良
くない状態です。会わせたい人には会
わせておいた方が良いでしょう」それ
から私はドキドキする胸を押さえなが
ら長男に電話し、皆が来るのを待つて
いた。続々と心配顔の子供達がやつて
来た。埼玉の川越からも兄達がやつて

きた。

幸いなことに舅は意識ははっきりしており、一人ずつ面会した。舅は舌をかまないように、口に何やら入れられていたので話は出来なかったが、手を握って目を見ながら話しかけていった。舅は時に嬉しそうに、時に涙しながら皆に会った。それからしばらくして、マスクを外してくれと舅が手で示すので外し、舌を挟んでいるものも外した。その時舅の口から出た第一声は「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」というお経であった。

こうしてびっくりして飛んで集まって来た私達であったが、舅の素晴らしい生命力は見事、この危機を乗り越えてしまったのである。ただ左手が利かなくなっただけで、全体の力が衰えたこと位で、頭はしっかりしていた。そしてこれを機に、舅の心の中で何かしらの変化が起こったように私には見えた。

退院して家に居た時は大分気弱になっていた舅であったが、死線を乗り越

えてこうしてまた元気になった時、生きていくことの喜びを感じ、自分の余命を感謝しつつ、生き抜く意志のようなものが湧き出たのではないだろうか。看護婦さん達や私達周りの者達に感謝を示しながら、さらに良くなるように治療を受けていた毎日であった。

夏が終わり九月に入った。姑も大分よくなり、病院から退院の許可が出た。その時私は夫と相談し舅が退院してくるまで、我が家で姑をひきとることを長男夫婦に申し出た。しかし、姑は今、とてもハリハリに意欲的になっている時で、もっと一人でちゃんと出来るようになるまで頑張ると言っているし、あの夫婦は別々にしないで一緒の所にいた方が良いという医者のお言もある、ということなので、さらにリハビリを受けながら舅の退院を待つことになった。

そしてついに十一月一日、二人揃っての退院日と決まった。しかし何という不運なのだろう。その三日ほど前に

姑は病院でころんできてしまい、全身を打ってしまった。この痛みがひどくまで退院を見合わせるというところになり、その後さらに、二回もころんできてしまい、姑の機能はすっかり逆戻りしてしまっただった。

ころんだことにより歩くことの恐怖感が出てしまっただけでなくなり、退院を目前にしての事故により精神的ショックが大きかったのだろう。やる気を失ってしまったようだった。何をすることも看護婦さんと呼ぶようになってしまったし、全く元気がなくなってしまった。

これではもう病院にいても仕方ないと判断し、十一月二十九日両親揃って退院させることにした。またさらに悪いことにその退院の四、五日前に、姑はまたころび、今度は左目の上に大きなタンコブが出来てしまっていた。まるでお岩さんのような顔のまま退院。その時は一歩も歩けず、手に力が入らず、食事も自分で出来ないほど機能が衰え、最悪の状態まで退院してきたと言

える。

それは一カ月前の姑を知っている誰かが目を疑うほどの様変わりであった。自分で自分のことは出来る位の生活力をつけるためにと、長い入院生活を頑張ってきたのに、これでは何という無念さであろう。これからの生活を思い、姑も周りの私達も不安で、胸が詰まった退院であった。

それからの一週間は、私が十時頃長男宅へ通い、姑の着替え、洗顔、トイレなどの世話をし、三人で昼食をした後、私はいったん我が家へ帰り、子供達を迎えた後、三時半か四時頃、また、姑のトイレのために行つてあげるといふ生活をした。

しかしこういつた生活は、教師をしている長姉にとつても、私にとつても負担が大きかった。どうしようという話になって、夫はこういう提案をした。二学期末を迎え忙しい姉を助けることで、冬休みまで我が家で預かる。冬休みに入ったらまた戻す、その後は姑の

回復状態を見ながら再度相談という案だ。姑の状態がこんなだからやむを得ないということも舅も同意。二人には本宅を離れるという心寂しさはあったようだが、ともかく、十二月八日に我が家へやってきた。

寢食を共にして

我が家は玄関を入るとすぐ十二畳のダイニング兼リビングルームであり、陽もよく当たる。そこに二人が居ることになるので、環境的には申し分ないと思う。誰もが集まる場所ですれだけでも刺激がある。長男宅にいと、自分達の部屋に自分達だけで籠つてしまうことになり、結局一日中テレビを見て過ごすようなことになるが、我が家へ来てからは遠慮もあるのか、テレビはあまりつけなかった。二人で庭を眺めたり、私が掃除をするのを見ていたり、お茶を飲んで話したり、というような生活であった。子供達がまだ小さいのも賑やかで老人達にとっては良い

かもしれないとも思った。

我が家へ来てから、私は姑に一人でお茶碗と箸はしを持たせ、私が食べさせてはあげなかった。ただおかずをいろいろと取つてあげる援助はした。そして今ではすっかり一人で食べられるようになった。食事の度に二人は言った。

「病院の食事はひどかった。今までさんざんまぜい物を食べてきたから、何を食べてもおいしい」と。それを聞くと、（ああ、もう病院へ入れてはならないな）という思いを強くしていった。それにしても姑は何と無口になつてしまったのだろう。陽気で豪傑笑いをしていた姑が、小さい声でたまに話をする位になつてしまった。その頃、姑の心の中はただ二つのことしかなかつたように思う。一つは目の上のコブを早く引つ込ませたい（それが治るまでは誰とも会いたくないという事で、退院してきたことはお弟子さん達にも知らせてなかった）。もう一つは整形外科へ行って注射を打つてもらえば、ま

た少しづつ歩けるようになるのだという期待だけである。

そこで二人の息子と姉と三人もの付き添いで整形外科へ行ってきたのだが、帰って来ると、もう「今度はいつ連れていってくれるかい？」と矢の催促をするのだった。コブも注射で中を抜いてもらい小さくなった。あと一回抜けばいいだろうと言われ、そのためにも次回が心待ちであったらしい。そして五日後、姉と私で連れて行った時医者に見せたら、すでにコブは固くなって

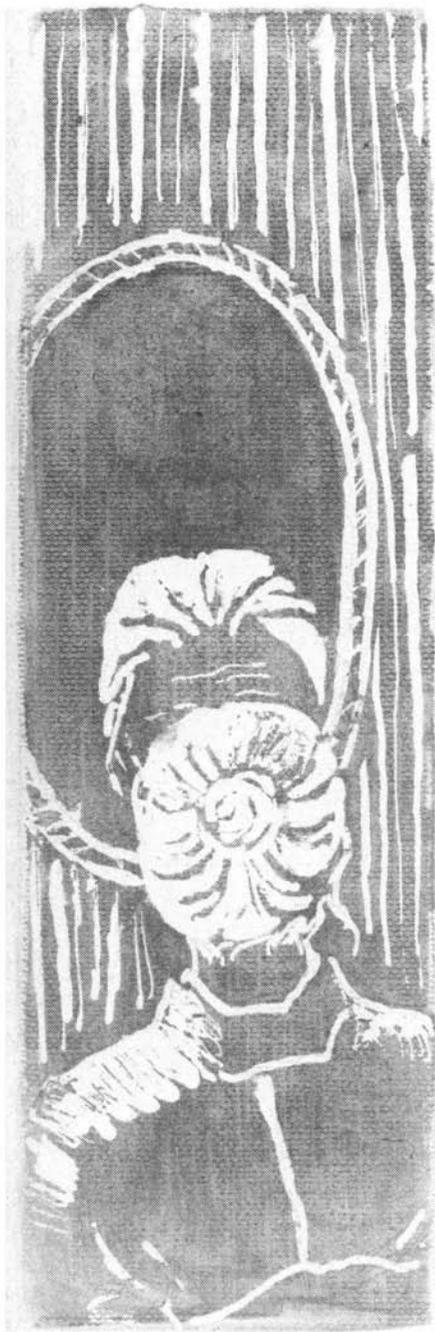
しまってもう注射では抜けない、と言われてしまったのだ。そう言われ、姑はその場でオイオイと泣いた。

医者は「このコブがあると云っても内科的に問題があるわけではなく、ただ美容上の問題でしょ、外を出歩くわけでないし。どうしてもイヤなら切ればいいのだが、傷も残るし、その後の手当てで毎日通うのは大変ではないですか」と言う。

が、姑にとってはこの「美容上」が問題なのであったので、それからずっ

と家に帰ってもメソメソしていた。舅にまで「お化粧するわけではなし、何をそんなにメソメソして。そんな位のコブおかしくないよ、わからないよ」と叱られる始末、それでも姑は「こんなになっちまって死んだ方がまだね」と言った。

その時家に居た私の夫が「死ねないよ、どうやって死ねんだよ」と言うのと、「死ぬ気になれば死ねるよ」とムキになった。さらに夫に「それなら死ぬ気になって頑張れよ」と言われ、さらに



実娘にも「残された機能をフルに使ってやるのよ。いつまでもメソメソしていたって始まらないでしょ、お母さん!!」などとさんざん言われてしまった。ムキにならせると本来の負けじ魂が表われることを二人の子供は知っていた。

「どうだろう。姑は急に、座っていたテーブルの端を両手で挟み、「うーん」と唸って、椅子から立ち上がってしまったのだ。それが出来た嬉しさで何回もそれを繰り返して、ついに、「三味線を持って来てちょうだい」と言い出したのだ。半年ぶりに弾いてみた三味線。もう一度三味線をじゃかじゃか弾きたい、というのが姑の望みなのだから……」

それからの姑は少しずつ意欲的になってきた。しかし、椅子から立ち上がれるだけで、それからは一步も足が前へ出なかった。両手を支えてあげると足が進むが、まだ支える私の両手に姑の体重がずしりとかかっていた。

一方、自分の体のことばかり心配で

あまり元気がない姑に比べ、舅の方はとても落ち着いて生活していた。食事をおいしいおいしいと言って食べ、新聞にも目を通す日課であった。従って社会の出来事についてとか、世間話など話が弾むのは舅とであった。そしてとても礼儀正しく、何か私が少しでも舅のためにしてあげると礼を言うのだった。気むずかしいと思っていた舅であったが、初めて同居してみてもその生活態度に敬服した。もっとも舅としては、「若いもんの生活に厄介な年寄り二人入り込んで……」と私に言ったように、遠慮の気持が多分にあったのだろうが。

冬休みに入るまでの十七日間、私は寝食を共にしながら老いた両親を見つめていた。二人の生い立ちから現在に到るまでの九十年間と七十四年間を振り返る時、彼らの後姿はずしりと重い。年をとることは切ないことだと思ってしまう。ましてや、歩けない、手が思うように利かない、耳も遠い、目も衰えて本を

読むことなど出来なくなつた時、長い一日を何をして過ごせば良いのだろうか。そういう状態に私やあなたがならないとは言えないだろう。

年老いて体が利かなくなってしまう時、それでも何か創造的な事が出来る才覚を、身につけることが出来るだろうか。それでも自分を楽しませる何かを持っていられるように、努力出来るだろうか。姑の三十代は子育てに追われ、生活に追われ、おそらく自分の老いた時のことなど考える余裕もなかったであろう。でも私は三十代前半ですでに「人間の老いるとは」ということを目の前につきつけられて、否応なしに考えざるをえない状況にある。

しかし考えたってどうなるというのだろうか。体が利かなくなってしまうと出来そうなことを、今から考えてやっておくのが良いのだろうか。しかし、肉体の衰えは精神の衰えにもなるだろう。自分が老いた時、そんな気力をもっていないのか、まるで自信のない

ことだ。

私の覚悟

十二月二十四日、二学期も終了し、長男宅へ帰る日となった。車で行けばわずかに二分位の距離であるが、まっすぐに帰らず、夫が外の景色を見せに走ってくれた。ここは海に近く、観音崎という名所にもなっているとある。我が家の二階からは浦賀水道が広がり、房総半島が眺められ、クイーンエリザベス号も通るのが見える所だ。両親にとっては十カ月ぶりのドライブであり、またこんな風に我が町をいろいろと見て回ったのは初めてのことのようにであった。

舅は感激して外を見ていたが、姑は今一つ元気がないのが気になった。その原因は長男宅へ着いてわかったのだが、姑は我が家にいる間に何とか歩けるようになりたいと思っていたらしく、それが出来得ずしての帰宅に今後の不安を感じていたのだった。

「まだそんなに急には無理ですよ。でも退院した時と比べるとグッと良くなってきているでしょ、焦らずにね」と励ましたが、「困ったねえ。冬休みが終わったらどうしよう。歩けるようになるのだろうか。なおらなければ困ってしまうよ」としんみりするのだった。私達は「冬休みが終わったらまた家に来れば良いですよ」と姑を安心させたが、姑が歩けなくて困るのは周りの者達も同様だ。何とか頑張って欲しいものだと祈りつつ我が家へ帰った。

急にガランとしてしまったようなリビングに入り、少し脱力してしまったような私。しかし、いつの間にか、巷ではもう暮れになっていたのだった。大掃除もせねばならぬ。友達も泊りにやってくる。そう思うと、パツと頭も切り替わり、それから慌ただしく一週間も過ぎていった。

年明けて一月二日。毎年この日には子供達（五人）が勢揃いするのが、今年はちと深刻だ。食事も済み、両親が

自分達の部屋に入った後は、また今後の相談である。相談とは言っても、本家に近い我が家に来てもらうのが一番良いことは誰もが思うところである。

私達夫婦は勤め人で、その事を申し出て、その代わり、いろいろな面で私達を支えて欲しいと要望した。それは二人についての経済面の全面的協力と、介護者である私の気晴らしの保証である。そして春休み、夏休み、冬休みには長男の所に帰ることも決まった。

私にはこの老いた親と共に過ごす覚悟のようなものがすでに出来ていた。人生とはわからないものだ。四男と結婚し、気楽なものだと思っていた私がこんな大役を担うようになるとは。しかしわからないところが人生の面白さである。私はこれからも肉親の、老いと闘っていく姿を見つめていくことだろう。その中で自分が成長していく何かがあるはずだと信じている。

（未完）

（え・早乙女光子）

連載第二回

文・宮城道子
絵・西田淑子

近代恋愛婚姻史

——恋愛は人生の秘鑰なり——

北村透谷・美那の巻



女學雜誌
女學界

第 壹 號

阿 佛 尼	+	文 章 の 選	+	漫 畫 の 神 と 魂	+	野 見 法 師
天 光 子	+	藤 本 善 治	+	北 村 透 谷	+	吉 島 隆

大和出版

明治三十六年一月三十一日



明治二十七年五月十六日、白昼のように月の明るい夜、芝公園の杉の葉陰で、ひとりの男が縊れて死んだ。

北村透谷、明治と共に生まれ、新しい教育制度の下に教育を受け、輸入された西洋思想を純粹培養のままに体現し、藤村らと前期浪漫主義の牙城「文学界」を創刊し、近代的恋愛を實踐し、結婚し、そしてその思想に自ら破れ去った男の姿であった。

透谷とその妻、美那の結婚はそれまでの封建社会の結婚観を打ち破って、「家制度」を無視し、自分たちの恋愛を中心に据える新しい形の結びつきであった。当然、周囲の猛反対に出合ったし、透谷の友人たちの並々ならない協力や援助も見逃がせない「近代的結婚」であった。

しかし、五年半ののち、この恋愛結婚は惨めな形で一方的に終止符が打たれた。

人は誰でも育った環境に大きくその一生を左右されやすい。

透谷もそのひとりだ。しかも「今日の自分があるのは、かくかくの自分史の上に在る」と人一倍強く、深く自覚していた。

婚前、美那に送った手紙の中に、自分の祖父と父母の人物評と少年期の終り迄の自分がどのようにその人達に育てられたかを延々と五千字以上もつづっている。

確かに透谷の子供時代はまさに苦役に等しかった。彼によると「祖父は凡そ世にめづらしき厳格の人にして、活潑に飛躍とびはねることを好む少年を懲すの術に苦みたる一人であり、「祖母はママ祖母たる人で（中略）我が利益には餘り心配せぬ（人）」で「父は傲慢磊落の気風あり。されど或る一部分に至りては極めて小心なる所もあり」「母は最も甚しき神経質の恐るべき人間なり。一家を修むるにも唯己れの欲する如く、己れの畫き出せる小さき模範の通りに、配下の者共を処理せんとする六ヶしき將軍なり」と分析している。さらに加えて「生しょう（自分）の神経の過敏なる悪質は、これを母より受け、傲慢不羈ふきなる性は、これを父より貰ひたり。（略）五分と五分の血を父母より受けて斯世に現れたり」……と自分の



性格を酷なまでに評している。

傲慢不羈の父も、世間的には不遇だった。薩長閥ののさばる世の中に、小田原出身の士族は出世街道に外れるのは当然である。透谷の母はそのことに不満で息子透谷の将来に賭けようとしたらしい。

「母は普通の功名心を抱き、生をして功名を成さしめんと思うの情切なりければ、毎夜十二時頃迄も窮屈な書机（しよき）に向はしめ、母自身は是が看守人たり」と、猛烈な教育ママぶりを発揮する。その上、近所の子供たちとの遊びを禁じられ、大好きな戦さごっこも涙をのんであきらめなくてはならなかった。

子供たちの遊ぶ声聞きながら、家の中でジッと耐え、唯一許された歴史小説の世界に遊ぶしかなかった。

透谷は次第に考え深い児となり、大声で笑ったり遊びに興じたりもせず、誰からも愛されていないなァ、人生の価値なんてないなァと思いつつ育つたという。

透谷はハッキリと、この家庭環境が現在自分が気鬱病を患っている「最大の原素」だろうと指摘している。

……子供が自覚しようとしまいと、ここまではよくある話である。しかし、ここからの透谷は、その他モロモロの子供と大きく軌道をかえてくる。

十二歳で上京した彼は、泰明小学校でその頭角を現わし始め、無類の議論好き、文章卓越で教師陣を煙に巻き、十二、三歳にして名利のために政治家たらんと目的を定めた（明治十年代は、国中が政治思想で煮えたぎっていた時代）というのだから、いかに時代が時代、といってもやはり神童の類だったにちがいない。

小学校卒業の際には演壇で演説をぶち、新聞に「奇童」と書かれたりもする。

十三歳、才の走るにまかせて突っ走って来た彼がはじめて挫折する。自分の師の転任、入学した私塾での不満、仲間の分散、加えて反政府運動や、民権思想を弾圧する政府への少年らしい不満、憤懣が重なる。さらに彼の暴走を止めようとする母の策略に苦しんだ。

どっと押し寄せた内外の荒波は、それまで向う処敵なしで突っ走って来た十三歳の少年



を押し倒した。「仇敵はこども心中を悩乱せしめられたれば、全く活潑なる天性を損ねて、穩着沈黙なる、肉落ち骨枯れたる一少年とこそ成りにけれ」

早くも十三歳にして肉落ち骨枯れたる思いを、少年透谷は味わったのである！

一、二年をうつうつとして送った透谷は十五歳、再び政治家を目指そうとする。しかし以前のように「名利を貪らんとする」功名心ではなく、「東洋の衰運を快復すべき、キリストの如く」政治の救世主として尽力しようと決心し、今度は日夜そればかり思いつめる。この頃、親友大矢に誘われて、のちに大阪事件となった大井憲太郎ら一派の革命計画の資金調達のため、強盗計画に巻き込まれかけたりもした。十代の透谷はまさに狂瀾怒濤の青春を送ったのである。

……以上が透谷が美那に宛てた長文の手紙の内容である。これは、まさに「近代的ラブレター」に他ならない。

それまでの恋文は「一筆参らせ候、恋し恋しとくらし居り候……」形式の、一時の感情を相手に押しつけるものであった。又、恋だの愛だのそのものが、男の女への性愛が先立つもので、対等の恋愛などありはしなかった。

日本の恋愛は古来大らかな対等のものであったが、儒教、仏教の影響の下に、女は穢れているもの、劣るもの、男に仕えるものという思想がはびこり、大の男が女に愛を捧げたり真面目に愛したりすることは恥となった。

一方、西洋の恋愛は、古代に於ては女は卑しいものとされたが、キリスト教文化の伝播と共に一夫一婦の思想がひろがり、中世の騎士の時代になって、男はその武勇を愛の証として女に捧げるようになり、恋愛上女の地位は高くなった。

透谷の恋愛はまさにこの西洋風近代的恋愛であった。

透谷は自らの皮を一枚一枚ひきはぐ思いで自らの生いたち、病い、（手紙にはくり返し脳病……ノイローゼか……が出てくる）苦しみ、悩みをありのままに記し、自分の全人格を美那に理解してもらおうと努めている。

これが近代的ラブレターであり、近代的恋愛でなくて、何であろう。

透谷の恋人美那は多摩きつての知識人である豪農の家に生まれている。父、昌孝は明治の知識人の例にもれず娘の美那にも高い教育を与え、最後には横浜共立女学校（ミッション系）を卒業させている。

美那は女学校の卒業時に「自由を張るに女子も亦責任あり」と演説したが、明治初期にミッションスクールが女子に与えた教育水準の高さを思うと、さすがと思うテーマだ。

父親は社会の動きに敏感であり、反体制的思想の持ち主であった。その政治信念の影響とキリスト教徒としての強い自覚と信念が、当時の女性にしてはめずらしい自由追求のテーマとなったのだろう。

美那と透谷との出会いは明治十八年、女学校の夏休みに帰省中の美那の家であった。透谷は美那の弟、公麿の友人だった。ノイローゼの小康状態の頃だったのか、健脚で足にまかせて歩きまわる癖のある透谷は、当時住んでいた都心（数寄屋町）から、静養をかねて郊外も郊外、当時は山奥ともいえる多摩まで足を伸ばし、友人とその父を訪ね政治談議でもしていたのだろうか。

長髪に白い和服を着た十六歳の少年と、三歳年上のミッションスクールの、もう少女と
はいいがたい娘は運命的な出逢いをした。

早熟な少年は、いっばしの「壮士気分」で政治を憂い、その反面、屋敷の裏の柿の木に登ったりもする。美那は少年の産毛を残しながらも気負った物言いをする透谷に、この家
に出入りする民権壮士たちとはちがう、思索家の片鱗をみたにちがいない。

まだ恋ではなかったけれども、弟と同じ年のこの少年を放ってはおけないもの、これれ
やすいガラス細工の美しさを見るように思ったのではなからうか。

この年の春、透谷にもかかわりのあった大井憲太郎ら一派が革命事件発覚で逮捕され、
美那の父や弟にも疑いがかかるなどした。その事件の経過の中で、透谷と美那は次第に親

しさを増し、美那の卒業後の帰省とほぼ同時に二人の恋愛がもえあがった。

娘の美那が透谷を愛している、とはさすがに親たちも気づくのが遅すぎた。なにしろ相手は息子の友人で、しかも年下。親からみると安全圏の男の筈であった。

美那には女学生の頃婚約した医者で民権運動家の平野友輔がいた。何を好んで、青二才と、というのが正直な親の気持であつたらう。将来は政治小説家にならうかと漠然と考えている程度の十八かそこらの青年に、結婚の重荷が背負えるわけがない。

片や美那は当時にすれば結婚適齢期を過ぎようとする二十二歳。

親たちが首を縦にふらないのは当然だし、わけても美那の母の反対は激しいものであつたという。透谷の親にしても、まだ若すぎる、と反対したのは自然だつた。

しかし、透谷にしてみれば、親との相剋から始まり、さまざまの仇敵と闘いつづけ身も心も傷だらけの青春であつてみれば、美那は彼等の信じるマリアにも似た存在であつた。

美那のほうでもこの道に迷える小羊を救いたい、救えるのは自分しかいないと、純粹に信じ込んだのも、彼女の育てられた歴史をみれば自然であつたらう。

この時代に自由恋愛をすることは「家制度」と真向から対立することになる。この恋愛を貫き通すには、社会全体を相手にまわす覚悟がいる。周囲が冷たくなればなるほど、この恋は純粹なんだと透谷は燃えあがった。

いささか過剰防衛に力むことで、透谷の恋は「実世界」よりも「想世界」……すなわち平たく表現すると、「胸や頭で考えることを重視する恋」となつていった。

これは透谷が生身の美那を愛してなかつたということではない。

透谷は「自らの皮を引んむいて見せる」ほどに、真剣に美那を愛していた。美那からの手紙は残っていないが、もしあればラブレターとして水準の高いものであつたにちがいない。

なまじつかの一時的な気持や、浮いた気分で愛し合つたとは思えないほどに、この手紙



は重い。十七や八の筆かと驚くほど重く、そして暗い。おそらくこの手紙を手にした美那はその調子にいよいよ捨てておけないものを感じたに違いない。美那は年下の青年の情熱を自分も全身で受けとめた。

明治二十一年、十九歳の透谷と二十三歳の美那は石坂家から誰ひとり参加しないままに式を挙げた。が、入籍はできなかった。

美那の親は頑として除籍を認めず、四年後の明治二十五年、長女の誕生を前にやっと入籍している。

ノーベル賞物理学者の湯川秀樹は、結婚に際して、「ぼくの頭の中を、物理」だけにしておいてくれ」と妻に望み、妻は夫が死ぬまでその約束を守り続けた。

天才はかくして作られる。

天才の妻たること、また難いかな。

透谷はその結婚に際して美那に、「ぼくの頭の中を、思索」だけにしておいてくれ」と頼んだか、どうかわからないが本心はそうだったといえよう。

聡明で柔軟な心の美那は、透谷には他の人にないものがある、それに自分の人生を賭けてみよう、と思い定めた筈である。それは女学校時代に学んだ近代的自由の追求と無縁だったとは思えない。

結婚後二人は透谷の親の家の二階に住んでいる。

透谷言うところの女將軍、何でも自分の思い通りにやらないと気がすまない母親との同居である。

母親からみると透谷夫婦は「まだ早い、持っていない時が来れば黙っていても親の方から持たせるのに、なんでも貰いたいと言って貰ってしまった。きまって入るものも入らないでみすみす困るのは知れ切ってる。不服だったけど何を言っても聞き入れないし、美那も



可哀想だしと思うから、二階で仮りに世帯を持たせて、まあ鍋釜にも及ぶまい、若いものが二人ぎりなら雪平で間に合う、学問ができたって御飯の加減をするのはまた別だから、こうおしよ、ああおしよって教えて……」ということになるが、まさにその通り、定まった収入のない二人は、親の家の二階でこじんまりと世帯をもったに他ならなかった。

勿論、透谷も自分ができると思う範囲で働いた。教会の仕事、速記、タイプ、通訳、翻訳、英語の教師、しかし、どれもがいわゆるパート仕事で不定期である。

自然美那も働いた。家庭教師をし、月三円を家計に入れていた。しかし、生活の大部分は階下からの援助であつたろうことは想像にかたくない。

息子のやり方に歯がみしている姑との同居は美那にとってどんなであつたろう。籍を抜けないまま同棲の形なんだから当然嫁入り道具もない、共稼ぎもなんとなく当てつけがましいと姑はいちいち思ったろうし、口にも出したかもしれない。

結婚の当初、二人は幸せだった。絶対に無理だと思つた自由結婚だったのに、このように実現したのだから、まずは夢のように楽しい日々であつた。夫透谷はあれこれと仕事の計画をたてるのが好きだし、又その計画を書きたてるのが仕事のようにも見えた。どんなに些細な書きつけでも彼は大切に残した。

美那は透谷が求めた通りに十分に母性的であり、それにもまして、忍耐づよい明治の娘であつた。次第に甘さの抜ける生活でも、台所の苦しい世帯でも、明治の女の誰でもがそうであるように、ぐちひとつこぼすでなく耐えた。

口やかましい姑との同居生活も持ちこたえの快活さと明朗さで切り抜けていった。しかし厳本善治（明治の教育家で思想家）がのちに透谷についてこう書いている。

「透谷は非常に親孝行でしたが、口とふだんの行ひには出さず、心に幾十倍思ひせる質で、其の恋女房と母と同居して、理想的『ホーム』を作り、母には孝子、妻には良夫になりたいといふ、切なる美しき理想……（略）」があつたというのだ。

幼時から常に鬪いの相手であつた母を、否定しながら育つたくせに、結局透谷は母のものとから一步も逃げ出せない。理想的ホームを作りたいと念願したところで、母から自立で

きずにいて、そんな都合の良い状態が創り出せるものだろうか。

愛する美那がこんな生活の中で耐えているのを見るにつけ透谷は心の奥が痛んでいた。

明治二十五年、長女誕生の前後に透谷は現代に語り継がれ、研究され続けることになった評論「厭世詩家と女性」を発表している。

その有名な書き出しは

「恋愛は人生の秘鑰（ひやく）なり、恋愛ありて後人生あり、恋愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ、然るに尤に多く人生を觀じ、尤も多く人生の秘奥を究むるといふ詩人なる怪物の尤も多く恋愛に罪業を作るは抑も如何なる理ぞ。……（略）」

意識すれば、――恋愛とは人生の一番大切なカギであり重大事であって、これなくて何が人生か。遊びや色恋沙汰とは無縁なのだ――

この文は劣情をもって女に接することこそ男の女に対する愛だと信じ込まされていた人々を阿然呆然とさせるに十分だった。青年たちの心臓に大砲をぶち込んだ、といっても過言ではなかった。

この「厭世詩家と女性」には「想世界」と「実世界」のせめぎ合いに悩む透谷の姿がにじみ出ている、といわれている。

事実、この時期透谷は教え子富井まつ子とのプラトニッククラブに苦しんでいるし、想世界に生きる自分が、実世界――結婚後の生活でいかに無力かを思い知らされてもいた。

しかし、透谷はこの評論を書いた当時、妻である美那に絶望していたわけではない。空想的情熱的詩人が実生活の中ですぐさま恋人にいや気がさし、厭世を云々するような底の浅さは、この文章には見当たらない。

燃えるような理想とともに詩人の住む觀念の世界、しかしその世界を現実化しようとするれば、理想は現実の煩雜と苛酷のしがらみに、翼をもがれるさだめにある。

詩人の憧れである女性もまた妻となれば、現実の中で、彼の翼をもうで現実に引きもど

す一要素となり代って行く……。恋愛を成就しようとすれば結婚という実生活にとびこまざるを得ず、実生活は必然的に詩人を「厭世」にさそう。可憐なるかな、詩人に愛される女性よ……。

この文章の中で、透谷は深く、鋭く、理想と現実の関係を、現実の中で色あせて行く男女の愛の宿命というものを見据えている。「結婚は恋愛の墓場」などという通俗哲学ではなく、そこには鋭い洞察と、分析があった。そしてその底にはいまだに、妻である美那への愛と信頼が呼吸づいていた。現実の中で美那は、いまだに「耐える」女であり、大地の豊かさで透谷を支える女であった。その彼女の忍耐にもたれかかって透谷は、「厭世詩家と女性」を書くことができたのである。

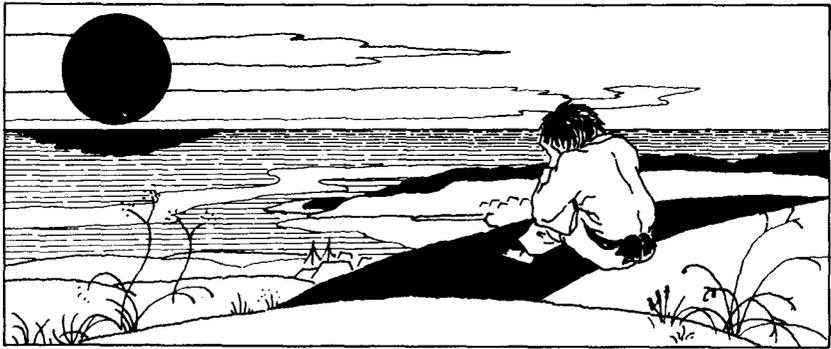
耐えて来た美那がある時、爆発した。何が引き金になったのか不明である。姑とのいさかいか、生れたばかりの長女を抱えて妻と母の二役に疲れたのか、経済的な苦しさか、おそらくそのようなささいなことが、美那の耐え続けた気持に不用意に穴をあけたしかならない。

伝道の旅で花巻温泉にいる透谷へ、美那は心の内をとめどなく書き送った。その手紙は残っていないが透谷の返信をみると何を訴えたか想像はつく。

「拝啓、貴書を得て忙（ママ）然たる事久し。何の意にて書かれしや、一切解らず。われ御身に対して敬禮を敬けりと云ひ、真の愛を持たずと云ひ、いろいろの事、前代希聞の大叱言。さても夫たるは斯程に難きものとは今知り。」

夫貧すれば初めて妻の助ありときくものを、われは貧して初めて妻の怨言不足を聞く。

（略）君の語氣常に我が意気地なくして、金得る事の少なく、世に出づることの晩おそく、居る所の幅狭きを責めるが如く聞ゆ、止みなん乎、止みなん乎、真の苦は矢張自らの中にこめ、妻には語る可からざるか。（略）詩人は面をかぶりて道を説く伝導師にあらず、徹頭徹尾社界の実勢を觀、不調子を看破し、真理をかざして進むにあり、道程如何に険なるを知らず（略）わが妻となりし君にあらずや、何ぞ遅々として大道を看破するの遅き……」



透谷の才を愛し、その将来に賭けたからこそ、婚約者を捨ててまで親に背いて結婚した美那ではあったのだが、日々のわずらわしい生活に追いまくられるうちに、どうしても夢は意識の外へと消えてしまう。目の前の育児、家計、家事全般、姑との生活に気をとられてしまい、いつまでも若き透谷に愛を捧げられた女神のままではいられなくなる。

女生徒との噂も耳に入ってくる。私を愛するといったのは嘘だったのでしようか。

透谷の友人達もぼちぼち認められかけてくるし、経済の基盤を固め始める者もいる。何より透谷のように万年青年でふらふら風来坊を極め込む者は少ない……夫透谷の才を認めながらも、女らしいグチのひとつ、ふたつ訴えなくなった美那を、天才の妻にしては俗っぽいと責めることはできないだろう。

しかし、透谷にすればこれは驚天動地のできごとであった。ともかく美那だけは自分を認め、最後まで支えてくれるいわば彼自身の帰りつく故郷ともいえる存在であったのだから。

美那は透谷にとって想世界と実世界の接点でもあった。バランスのとれにくい二つの世界を、透谷は美那との結婚生活によってのみ繋いでいたのではなかったか。

透谷の反応は激烈だった。返信を送るとすぐその足で帰京する。母の家の二階ぐらしを引きはらい、美那と子どもを連れて国府津の海辺の村へ引越して行く。

結婚以来はじめて、美那は姑との同居を逃れ、いきいきと暮しはじめた。自分の手紙がどれほど深刻なりアクションを夫の心にひきおこしたかは分からずに……。

別居したいと口走ったり、美那が自分を捨てたのではと恐れたりするくせに、一方で透谷は「どんなに儉約したって僕のところでは月に三十円かかる。それより以下では暮せない。なにしろ下女でも使わなければ居られない女だからね」と藤村に語る。

明治二十年代の三十円が相当高額であったことは、この時代の帝大の教授の給与とほぼ同額だったことでもわかる。

現実には妻は乳飲児を背負い、近所の娘たちに裁縫、手習いを教えているというのに。この発言は透谷の虚栄心と考えることもできようが、美那にその位の生活はさせてやり



たかったという願望の裏返しともとれるし、花巻への手紙で世俗的な望みを口にした美那へのキツイ当てつけともとれよう。

花巻からの手紙を境に透谷は思い沈むことが多くなった。それ迄も考え込むことは多かったのだが、今度のは様子がちがう。すっかり仕事を手につかなくなっていることに美那は気づいた。

「何故おもしろくないのでしょうか。このまま家庭を愉しむ気になんとして成れないのでしょうか」美那は海辺の村を訪れた藤村に訴える。海辺の村の生活は美那にとって初めての平安だった。あっちが痛い、こっちが苦しいと言いつける夫をなだめながらも、潮風に吹かれて散歩したり、新しい魚を下げて帰ってくる透谷を見るのは好もしかった。

藤村らが訪ねると美那は貧しいなかから刺身や酒を揃えてもてなしたが、その目はいつもキラキラと健康に輝いていた。

しかし、透谷にとって帰りつくべき故郷ともいえた美那の気軽な裏切り行為は、透谷にとって決定的な打撃であった。表面はさりげなく振舞いながらも、その心の中は地獄の様相を呈しはじめていた。

突然、何の前ぶれもなく透谷は東京の母のもとへ引きあげる。

この頃から美那をさけるように、品川の女郎屋へ足繁く通いはじめる。クリスチャンであった筈の透谷の女郎買いは信仰の行き詰りなのか、思想の行き詰りなのか「恋愛もなくして、何が人生か」と激しく問いかけた透谷の、その荒廃ぶりは凄絶でさえあった。

「そらごらんよ、言った通りさ。しばらく別れたら……」と離婚をすすめる母、細君がわるい、と責められたと訴える妻、キ印じゃないかと周囲のヒソヒソ話、四カ月も精根かたむけた翻訳が僅か十円の翻訳料……どれもが透谷を追いつめた。

「なあ、俺もお前も敗北者だ、いっそ一緒に……」と心中をもちかけて「私は厭です、子供がいるから厭です」と、力を込めて美那に断られ、「は……」と笑いに紛らせるが、もう透谷の目には死の影が宿りはじめる。

美那にしてみれば（何もかも犠牲にして、あなたのために苦勞してきたのに、まだ足りないのか、私の命まで自分の思いどおりにしようというのか）と口に出さないまでも透谷の心が測りかねて怒りさえ湧いてくる。訳もわからず崩れ落ちてゆく夫の姿に深い憐れみも湧くが、手の出しようもない。

遂に透谷は自殺を企てるが失敗し、皮肉にも傷は大したことなかったが、心深く開いた傷口はもうふさがらない。生きているのか、いないのか、考えているのか、いないのか、多摩時代の面影も、海辺の村での面影さえない。向いあう美那にも捉えようがない。月の明るい夜、透谷は秘かに床を抜け出して旅立ってしまう。二十六歳であった。

「何故亡くなったんでしよう」と尋ねる藤村に「さあ、私にも解りません」と美那は答える。藤村はそれを一番正しい答だと思ふ。友人の誰ひとり理由はわからなかった。

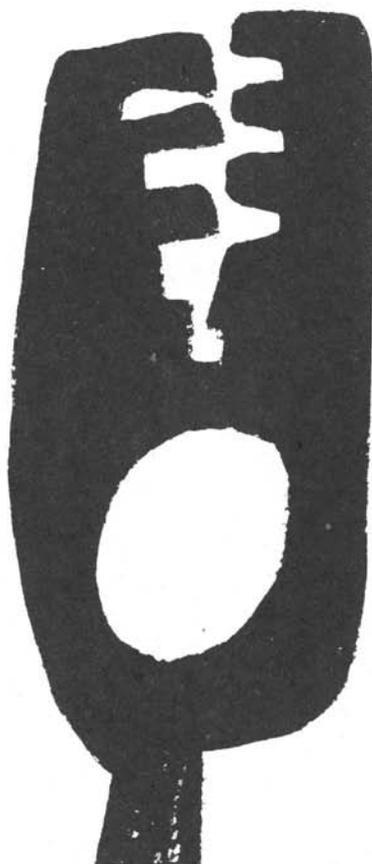
美那の明るさ、健康さ、生命力、行動力からすれば、透谷の死は自分への裏切りであり、侮辱でしかなかった。しかし、その美那の強さ、明るさが、透谷の生命の源でもあり、絶望の源でもあったら、美那は何と答えたろうか。

ひとりよがりの男が勝手に恋し、傷つき苦しみ、勝手に死んだと美那が思わなかったとは言えない。

長女を引きとり実家に帰った美那は伝道の仕事を手伝ううち、一念発起してアメリカへ渡り大学へ入ろうと決心した。

自立と再起を考えた美那が、再婚の道を選ばず、渡米という非凡の道をとったことは、ミッシェンの教育の素地に加えて卓越した決断力、行動力によるものだ。三十三歳で渡米した美那は、八年後帰国し、終生教壇に立って生きた。

愛してはいたが一方的に犠牲を強いた想世界の住人たる男への、猛然たる復讐心が美那をアメリカへ駆りたてるエネルギーとなったと仮定したら、近代的爱愛思想の元祖たる透谷氏の名を汚すことになるだろうか。



隣人を訴えるとき●アメリカの場合●

北詰 由貴子

昨今、預かった坊やが池で水死してしまった事件に、裁判の判決をめぐってさまざまな波紋が広がっています。預かった人の責任も、預けた親の責任も、取り沙汰する人々の言動もなぜか軽々しく、揚げ句の果てに裁判までが無効になるという空しい結果となり、

ただ亡くなった子どもだけが悲しく浮かび上がってくる事件です。いったい「責任」という言葉の意味は何なのでしょうか。

ニューヨーク在住の日本人で出しているタブロイド版の日本人向けウィー

クリイがあります。OCCS・NEWSという隔週刊紙ですが、作っている人々は米国籍を有するニューヨークに精通する人々で、新しくこの地へ足を踏み入れた人々への道案内を兼ねた折々のニュースを伝えてくれます。(もちろん、日本語で——)

私もが滞在したのはワシントンD・Cでしたが、一部、ニューヨークから送ってもらって読んでおりました。だいが前の話になりますが、その中に「親の留守中に子供が大ケガ……子を預けるときのルール」という見出しがあったのを思い出して、引っ張り出してみました。

この記事は当時、娘たちがベビーシッターを始めたので、特に注意して読んだもののなのです。娘たちは一時間二ドルか三ドルのお小遣い稼ぎに気軽に出かけて行くわけですが、万が一、赤ちゃんを落っこしたり、坊やがけがをしないとはいいきれません。家で待っている私の方が出向いて行って見

届けたいと思うほどです。

何はともあれ、OCS・NEWSの記事をご紹介します。

『アメリカに住むわれわれは、この地のルールを知っておかないと、時には思いがけないことが起こる』というコメントで、『こんな例がある。A君とB君は近所同士なので一緒によく遊ぶ。お母さん同士も仲がよい。その日、子どもの学校が半日だったが、A君のお母さんは昼からどうしてもマンハッタンへ出かけなければならなくなり、B君のお母さんに頼んで出かけた。子どもたちは仲よく外で自転車で遊んでいたが、まもなくB君がかけこんできた。A君がけがをしたのだ。飛んでいくと、坂の木の下に自転車ごとぶつかり、大けがをしている』とあり、近所のアメリカ人が救急車を呼んでくれて病院へ行ったことになっています。

ここで覚えておいていただきたいことは、子どもたちは学齢に達しており、二人で仲よく自転車で遊んでいれば、

親が多少は目の離せる状況であったことです。溜め池に落ちて水死した三歳の坊やと比較するのはまったく無理かも知りません。

さて、話はそれから病院のことに及んで、『よほどのスピードで木にぶつかっていったらしく、ひたいからはおにかけて深く切れている上に、足は複雑骨折している』A君は、応急処置はしてもらったものの『A君のお母さんがマンハッタンから帰るまでの四時間、B君のお母さんは病院でうろうろするだけだった。もちろんA君のつらさはそれ以上だ』何故かという点、手術は『親の許可なくできないと医者はいい張った』からで、『けがの大小はともかく、こういうことは、日常茶飯事に起こる。学校へ行っている間だって同様である』と続きます。

日本の裁判との比較かと思われる方にはちょっと意外かも知れませんが、まあ、もう少し読んでみてください。『ベビー・シッターや近所の人に頼

む場合も、行き先を明らかにしておくことである。父親と会社で連絡がつかぬ場合はよいが、でなければ、前例のような大けがの場合、親以外のおとなも役立たずになってしまう……。

そんなことを心配していたらどこへも出られなくなる。でも、心配するよりもすべきことをして出よう。その第一が、行き先、連絡先をはっきりさせておくこと。第二に、ひんぱんに頼むベビー・シッターや近所の人に、例文のような委任状の手紙を渡しておくことである』とあって、英文の委任状の書き方が掲載されています。そしてさらに続きます。『Aさんの例も、この手紙がBさんに渡されていければ四時間も待たされなくてすんだのである。この手紙で大切なことは、ノータライズ（公証人証明）してもらうことである。これは確かにあなたのサインに間違いがないという証明で銀行などで簡単にしてくれる。学校からの緊急連絡先や親の不在の折の連絡先に使わせても

らっている人にはこの手紙を渡してお
くよう心がけたい。また、親なしで旅
行に連れていってもらうときも同様で
ある。大げさなように思えるかもしれ
ないが、人に子どもの責任を持つても
らうよう頼むわけであるから、その人
の判断におまかせします、という権威
を与える手紙を添えるのは礼儀である』
礼儀をつくして責任を委託されて、初
めて預かった人にも子どもに対する重
い責任が生じるのです。

『これは、つねに訴訟に脅えている
アメリカ人の生活上のルールだが、わ
れわれ日本人もここから学ぶことが大
いにある。とかく、われわれは人に何
かを頼むとき、「よろしくお願いま
す」という。そして「よろしく」とは、
どういうことなのかも考えないことが
多い。しかし、この紙一枚には何をど
こまで頼むのが明記されている。そ
して、「まかせた以上、あとで文句を
いいません」ということである。日本
人社会には「よろしく」頼まれた以上、

「よろしく」やってあげたのに、「よ
ろしく」思われぬ感情が残ることが
ある。こうした無言の約束事の中で生
活してきたわれわれは、反面、アメリ
カの契約社会が冷たい形式主義に見え
る。しかし、相手に無言の好意を期待
するのでなく、好意の限界をわきまえ、
責任と義務の所在をはっきりさせてい
く生活態度は、ここでぜひ身につけた
い。それぞれ違ったものの考え方をす
るわれわれの生活のルールなのだから
……。

話を元に戻し、親の不在中の子ども
の事故に関しても、好意、常識を期待
してはいけないということである。家
庭内はともかく、いったん外へ出た場
合は、社会のルールに従い親の義務を
怠ってはならない。ものの判断のつか
ない子に留守番をさせて、ちょっとそ
こまでの買物物は、もってのほかであ
る。何か起きたとき、親の罪を問われ
ることもある。生活に慣れてきて、少
し気を抜いているところがないか、も

う一度考えてみたい』
と懇切丁寧なしめくりです。

結局、ちょっと引用するつもりが、
大方、引き写してしまつたことになり
ます。どこまで行つても親は親。親の
責任の重大さは他に代替物がないかの
ようです。

お読み下されば判るとはいうものの、
最後の方の『何か起きたとき、親の罪
を問われることもある』という一行は
重要です。親の子どもに対する法的責
任に関するものだからです。書いた人
もさりと書き、読んだ人も何気なく
読み流すかも知れませんが、これはか
りに火事などで子どもが焼け死んだ場
合、親は親の義務を怠つたことで、法
的に処罰されることもあり得るとい
うことです。日本にもこういう事件は起
つていますが、法的に裁かれたとい
うことは聞いておりません。親の精神的
苦痛を思つて、一種の治外法権にある
ものとみなされているのでしょうか。
さて、三歳児の水死に終つた痛まし



好意の結末は、アメリカ式に言えば、明確には責任の譲渡がなされていないかったその間隙に落ち込んだ犠牲であるといえるでしょう。

「遊んでいるから置いて、といわれたから、置いていった」といった程度の受け渡し、責任のなすり合いになってぶざまな様相をていし、法律までも冒瀆してしまいました。しかし、こういった程度の好意が、どのくらい子どもの身辺には多いことでしょうか。私が以前ロンドンから帰ったとき、この危険な街中を子どもたちがいとも気軽に遊び廻り、まだ幼かった娘が遊び

に行った家庭の親も、さっさと買い物に出て行ってしまふ様子にびっくりしたことを憶えています。

今回の裁判の判決が、単に預けられたものの損害賠償という形でだけ認識されたということは残念なことです。むしろこれは、預けたものの責任、そしてその責任を委託されたものの義務の遂行の重大さに対する警告として取れば大変に意味があったのと思つて読んでおりました。なぜなら、委託されたものの義務の重さは、委託したものの責任の重さに比例すると思われるからです。日本人が責任という言葉で口にするとき、それが大方他人になすりつける言葉として解釈されるのは、情ないことです。裁判官も、「責任はむしろ原告に多い」と述べています。

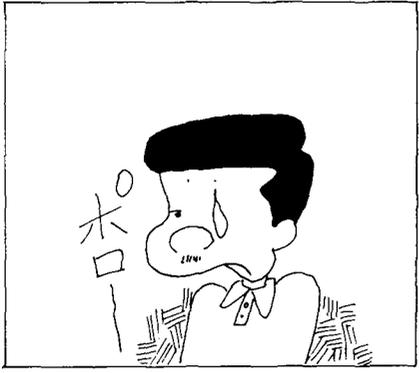
それでは、アメリカ人が訴訟に脅えるのは、どういう場合なのでしょう。例に上げたOCS・NEWSの記事では、預かったBさんをAさんが訴え

たなどということは書かれておりません。つねに訴訟に脅えているのは、この場合、医者です。「救急病院の医者なら好意によって何とかしたらば」というような常識はどうやら日本人だけのもののようなのです。「親の不在の子どもの事故に関しても、好意、常識を期待してはいけない」では、医者が待っているのは何なのでしょう。医者、責任を委託されるのを待っているのです。ということは、確かにあなたにこの子をお任せ致しますと親から言われて、初めてその医者がその子どもの生命の実権を握ることができるということ。責任の譲渡というにはそれだけの意味があります。責任を譲渡していかないのに勝手にやった、と訴えられることが怖いのです。

同じ言葉を使っても、その言葉を支える精神的土壌の差が、意味を大きく変えていることがあります。その差を比較してみるのがお互いの文化を知らぬ上に大事なことでないでしょうか。

(え・岡田正子)

笑止 笑止



だしに栄養はないのか

一七九号の「わいふ家庭科」で、「だしはだしの素で十分」というお答えがあったのはショックでした。せつせと煮干しやコンブでだしをとっていたのですが……だしにはほんとは栄養がないのですか？
読者より

「カロリーの問題ならばどちらも変わりありません。ただブイヨンですと脂肪が入るので違ってきます。(カロリーが高い)

もちろんコンブからはヨードなど出ますけれど、旨味の要素がほとんどなので、栄養成分はあまり入っていません。だし(スープ、ブイヨンでない)は栄養成分表にも出ていないのです。

煮干しのだしをとって、煮干しも食べてしまうというなら違いますが、おつゆを飲むだけなら旨味がほとんど、水溶性のビタミンなど出ることはありますけれど、その他の成分は出て来ない。たしかにコブは血圧を下げるのによいという意見の方もいらっしゃるが、コブにそうした成分は入っていませんが、栄養価から見たらダシの素とさほどの差はありません。しかしインスタントのだしはグ

ルタミン酸ソーダ、イノシン酸が多く入り、食塩も入っているから、塩分を控えようというときには、煮干しなどでおいしくだしをとり、薄味で煮つけるほうがよいでしょう」

昨年、わいふ家庭科で「あなたの食卓診断」を担当してくださっていた竹内先生からはこんなお話をうかがいました。多少の栄養分(水溶性ビタミン、ヨードなど)があるにしても、それはわずかなもので、何としても煮干しかつぶしでなければ、と頑張るほどのことは栄養的にはない、というわけです。もちろん味覚の問題はまったく違いますので、私(和田)も、モライもののダシの素をここしばらく使いましたが、おいしくないのもまた煮干し、かつぶしにもどるつもりです。

師のいしぶん

大寄英夫

とうとう教師が子どもを刺した。このニュースが全国を駆けめぐった瞬間、一億総評論家と化し、その声はいまも鳴りやまない。とりわけかまびすしいのが教師への批判。その中で、「家庭教育、社会の在り方、右翼、ヤクザの跳梁、それを許しておく社会、これを

電波に乗って非行が走る

今回の忠生中のような事件が起きますと、マスコミが注目して「他に似たことがないかなあ」と探すので、次々とああいふ風に出てくるわけですが、実際にはずーっと継続的に起きていたのであって、今回特に増えたわけではないんです。また大きな変化の時期を迎えた、というのではなくて、量的にどんどん拡大してきて質的に変わった、と思うんです。

十二年ほど前でしょうか、「構造化社会における非行」という論文が朝日

見据えないで教師だけ『我々の力が足りないのです』というのはいりやうだと逆説的断言するのは教員生活三十年、いまま東京都M区の現役として中学教育にかかわっている大寄先生。教師側の言いぶんを耳を傾けてみよう。

ジャーナルに載って、かなりの方の眼にふれたと思うんですが、最近の非行は「情報化社会における非行」とはつきり言えると思うんです。

日本の津々浦々、北海道から沖縄に至るまで非行は起きているんですね。十年前ですと、ある学校で非行が起きたとなると、すぐ隣の学校が「あそことは生徒同志の交流があるし、そろそろうちも危くなってきた」という感じでしたが、今は電波で非行が走るわけですからマスコミが報道しますと、それを見てまねをする。それに近いような状況にあった学校で「あのくらいやっても大丈夫」とか「あそこはあんな

校内暴力・教

風にやっつてるじゃないか、うちは遅れてる」というわけで、どんどん非行が拡大していくという形です。

こんな話があるんです。ちょっとマスコミに乗っている先生がいて、進路指導をユニークにやっている、というのでテレビ局のカメラが入りました。するとツッパリの子ども達は「そーらやっ自分たちに番が回ってきた」と手ぐすね引いて待ち構えた。ところがいつまで待ってもやっつて来ない。しびれを切らして「何でオレラに逢わせないんだよ」と職員室に怒鳴り込んでいったというわけ。

ツッパリはそれくらい自己顕示欲の強い子ども達なんです。その意味でマスコミの報道などは、社会的に関心を持っていたくにはいいけれど、自立ちたがりやを刺激して「あのぐらいまでやっつて平気」とか、「オレたち遅れてるう」とどンドン類似の事件が起きてくる。英雄気どりでね。その反面、テレビでもヤラセみたいところがあ

りまして、作られた非行の激増というにおいもする。

何しろ小学校五年生ぐらいでもう非行は出てくる。町にたむろしていて中年の女性が通ると、「オオあいつやるうか」と待ちかまえてて、「おいデブ昨夜やったか」と聞くに堪えないことをいう。小学校でかなり鍛えられてきて、中学生になって勉強は面白くない、クラブもやりたくない、非行に生き甲斐を見出している。

これはお気に入らないかも知れないけれど、施設へでも収容しない限り、どうにもならないケースもあるんです。忠生中でのように「学校へは来なくていいよ」と言われたから働いていた、などと新聞にパーツと大きく書かれると教師の方があわてて、「いやそれは誤解です」「そんなこと言ってない」と弁解しますが、あれは言ってるんです。なぜ言わなければならなかったか、あの先生たち正直に話すべきなんです。責任持てないことまで責任持っ

てあななった、と私は思っています。

大人も子どももエゴイズムばかり

非行を起した子ども達も親も大変なことですけど、その周辺にいる子ども達もそれを抑制する力を失っている、ということが見逃せない。昔だったら少しはずれた子がいても、「あの子につけてこのクラブで活躍させておけば何とかなる」「あの子なら面倒みる」という子がいたのですが、今は成績がどんなに良くてもかかわりたくない、あるいは少しぐらい協力しないとシカト（無視）される、とむしろツッパリに迎合的なのです。

昨年の話ですが、びっくりさせられたことがあるんです。「チン検」といって、一人の男の子がパンツを下ろされて下半身はだかで女の子の中につき出された。また「カステラリンチ」というのがあって、これはテレビのコマーシャルに『カステラ一番電話は二番

……』という歌があるでしょう、あの歌に合せてぐるり囲んで膝げりを加える。何の恨みもないくせに殴るけるの暴行をやっていた。この事件を被害者も言わなきゃ周りにいた目撃者も言わない。大人の我々には考えられないことだけれど、教師の耳には長いこと入ってこなかった。

この事件は一人の女の子に聞いてわかったのですが、これはもう非常にまねなことですね。だいたい女の子に正義感のあったのは数年前までで、そのころは文化祭について決める場合でもみんながいい加減に「そんなのカッターイ」「おぼけ屋敷でいいじゃないか」とワーワー騒いでいても、そのうちパッと手を上げて「先生、おぼけ屋敷作るのは文化でしようか？」と言った女の子が必ずいた。遠足に行くとき

のルールを決めようという場合でもみな黙って発言しない中で、こちらが言って欲しいことを言う女の子が必ずいたのです。

ところが今じゃ家に帰って「実はこんなことがあったんだけど、先生には絶対言うな。言ったら親子の縁を切るよ」縁切るってのは昔親が子に言ったものですがね、親の方はおびえて一切言わない。後難を恐れて話してくれないのだから、教師は情報がつかめなはずです。

親御さんたちと話していても必ず、「うちの子はその子にかかわらせたくない」と言うし、年度がわりのクラス分けの前に「うちの子がツッパリと同じクラスにならないように」と毎日お茶断ちして願ってる。これ本当なんです。

自分の子だけにしか目がいかなくて、社会的な解決をしようという意志が全然ない。だからぼくたち教師も大変なんです。

ほんものの体験のない子どもたち

私どもは現職の教師ですし、決して
免罪されたいから言うわけではないの
ですが、学校が退廃して中学生が荒れ
るのは教師が無能力だから、といわれ
ること自体は間違いではないけれど、
それだけを取り出していうとね、十分
な対策が立たないのではないかと。

いまは食事のことにしても子どもが
中心ですから、子どもの好きなものだ
けが食卓に並びますし、コマージュル
見て「あれ食べたい、これ食べたい」
と味覚そのものも商業主義にからめと
られている状況です。家庭が人間の生
活の基盤であるという確固たるところ
がないと、完全に国家支配とか商業主
義の支配になってしまふ。

非行の原因を社会・家庭の分野から
も見ようとしないで、ただただ「学力
万能論に立っている私ども教師が悪い
んです」という立場を教師が取るはず

れば、これは思い上がりでないかと私は
思うんです。

何しろ子ども自身の感覚がすっかり
変っています。テレビのコピー体験し
か身につけていないのですから、本当
に迷い子になった経験がない、びしょ
濡れになった経験がない、おぼれそう
になった経験がない。半数以上の子が
そうです。

小学生を対象にした「小学生ナウ」
という本がありまして、小学三年から
六年までの子ども千七百人を調べたと
ころ、靴みがきをしたことない男八
〇％、女七二％、拭き掃除したことが
ない男六六％、女四四％など、生活習
慣がほとんどついていない。中学生も
雑巾は絞れないし、たまりかねた教師
が床はきを手伝うとイスに座っている
生徒がひよいと両足を上げた、とい
う話がある。

また言葉もないんです。悪いことし
ても謝らないし、符丁のような言葉で
話し、具体的にものごとを説明する能
力が全くない。高校の面接試験練習な
んでやると大騒ぎ。緊張しちゃってね
え。中三の男の子なんて「ウルセエ」
「腹ヘッタ」「金くれ」以外は失語症
という状況でしょ。親が何でも先回り
してやってくれる。

この間も飯ごう炊さんに行ったとき、
女の子がお米をといでる間に男の子が
カマドを作った。マキをどどん燃し
ちゃって、とき終ったお米を持ってき
たときには「マキはおわり！」（笑）
カレー作らせれば、具が全然煮えてな
いのに入れちゃって、食べたらゴ
リゴリしてるから「ゴリゴリ・デラッ
クスだあ」なんて……。

こんなこといくらでもありますよ。
河原に来てるんだから水遊びでもすれ
ばいいのに、炎天下車座になってトラ
ンプやっている。

受験過熱で、机の前に座っているだ



けを良しとするから、自分じゃ何もやったことがない、基本的な生活体験の欠落した子ども達です。ハングリーな体験とか、貧しさ・悲しさ・苦しさの体験に恵まれていない子ども達にもっと生活体験を回復してやらなければどうにもならないと思います。

いま、生活指導の強化と盛んに言われています。文部省でも教育委員会でもそのためのカウンセラーを配置する、と言っていますが、そんなんじや駄目です。学校教育というものを、学習指導と生活指導の両域に分けずに、教育そのものを変えていかなければならないときがきています。

「ゆとりの教育」も言葉だけで実体は何もないんです。だから授業は午前中ぐらいにして、午後は総合学習的視野でやる。例えば「食物」なら実際子ども達に栽培などさせて、食べ物というものもを教えていく。理科では「公害」を教え、社会科では「食糧経済」、家庭科では男女に「調理」を教え、と子

ども達が生活の問題としてやっていくようにする。これをしてしないで、ただ生活指導の分野だけで何とかしようとしても無理です。ますます大量の授業についていけない子が出てきますよ。

暴力団の取りこむツッパリ

ここ数年の右傾化の中で、まさに右翼そのものが町の中に入り込んできまして、うちの学区にもA塾という右翼の本部ができた。これが年中この辺を軍歌鳴らして、車で通るんです。そこへ学校に適応できない子どもが出掛けていって、「カッコいい」と訳もわからず「日教組反対」などと叫んでいたんですね。日当五千円とかラーメン食わせてもらったりして……。

この段階では私たち学校側も子どもたちと「何のために行くのか」話し合っても二つでも、その子の好きな教科で学校に適応させようとしたり、クラブ



活動をさせてみたりして、学校にも楽しいことがある、とわからせていた。だからそれ程のマイナスは受けないできたのです。

ところが今度のは様変わりしてまして、（このことは私の身にも危険があるので、名前なども伏せてほしいのですが）有名な暴力団B連合のC一家支部事務所が学区の中、生徒たちの住んでいる町のまん真ん中のマンションにできました。私も行ってみてびっくりしたんですが、目立たせるためか、大きな表札が掛っているんです。B連合C一家、

とね。

右翼A塾とB連合、どちらも半年ぐらいは静かで——何かやっぱり力関係で裏取引があったか、競合する話し合いがあったと私は見ているのですが——それから動き出しましてねえ。右翼のA塾に行っていた子ども達のうち、一人二人を除いて集团的にB連合C一家に移っちゃった。トレードされたかどうか知りませんが、どうもそっちの方がいいらしい。理屈なしに面白いですよね。その子たちの中の一人が、その事務所へ寝とまりするようになった。髪は金色に染めて剃りを入れ、眉を落としている、という有様。

親の方では息子が登校していくと、絶えず悪いことをして他人に迷惑をかけてくる。周囲の大人たちも非行に関心があるから親に向かっつとやかく言う、それが煩わしいのでしょいか黙認なんです。「週一度ぐらい電話掛けてくれればいいから」と言ってるわけです。そのうちにまた一人住み込んだ。こ

の子はあまりの非行に、親が家の一室に閉じ込めていたんですが、そこへ女の子を引っ張りこんだりする、という段階があって、それまでは体があまり大きくないので先生に対してもおびえたところがあったのに、この一月ごろから向かってくるようになり、C一家と書いた上衣を着、ツツパリ宣言をしたのです。

私もびっくりしまして、その子の家に行って話し合ったりしたのですが、駄目でした。その後ずーっと忙しくて時間が取れないでいたんだけど、この二月、建国記念日の寒い日に暴力団事務所を訪ねました。「義務教育の段階にある子どもだ、戻してもらえないか」と。

しかし、若い者は大勢たむろして居るんですが親分には逢わせてもらえなかつた。要領を得ないので。当の本人は「四月になって気が向いたら学校に行ってやるよ」と言うばかり。

それで警察に行った。「児童福祉法

の立場からすれば放っておけないのは。何しろ地域のヤクザとかかわっているんです」と話したところ、「いやそれは民主警察ですから、家庭から捜索願いが出来ないことには踏み込めないのだ」と答える。「教師の私がこうして訴えに来ている」「先生にはその権利はない、親権だけが認められる」と押し問答の末、「じゃ何もしないんですか?」「いや親御さんの方は『長い目で様子見たいから』というので、当分の間このまま」といわれてしまう。

景品買いの見張り役という犯罪が現に起きているのに、どういふことかと腹が立つ。しかし「先生は年とっているから、人生劇場」を連想して、ヤクザはきちんと話せばわかってくれると思っているのですが、今じゃあ若いチンピラは仁義など知りませんよ」と笑われました。

確かにその点では右翼の方に行っちゃって偉いのに話をつけると、「人のものを取ってはいけない」とか、そ

れなりの道徳教育をするんですよ。それがヤクザにはない。中に入るともう崩れていくばかり、煙草も吸えばシンナーも吸う、不純異性交遊なんて平気ですよ。どんどん崩れていって、どうすることもできない。

従来の非行というのは、家に居てもつまらないから学校に来たがったのです。学校に来て友達に悪さしたり、或いは自分の腕力を誇示したりが楽しくて、授業を妨害しては教師に向かって学力のつかなかった積年の恨みを晴らしていたのです。

ところが今度のように、この子たちが登校して来なくなったのは巣ができたからなのです。飯も食わせてくれ、小遣いもくれ、ヤクザの連中とくっついてパチンコしたりゲームセンターでガチャガチャ遊び、町の中をデモンストレーションして歩く。ここM区では中学生が南と北に分かれて対立してる。さまざま状況ですから、ヤクザがバツクに居るといふのは、彼等にとっても

のすごい示威になるわけです。何しろ実力なんかなくても相手は土下座しちゃう、それが愉快らしい。

その巢に居れば学校よりもっと楽しいことがあるのですから、話し合っても聞く耳持たんですよね。

管理主義に走る大人たち

ヒーリーという人が言ってますが、非行は子どもの自己表現なんです。そのメッセージをこちらが受取らなければいけない。また子どもは反乱は社会に対する告発ですよ。その対策が取締り、管理という発想ではよくならないと思います。

次々事件が起ると「服装から取締ろう」と考えるんですが、こんな管理主義でやっても中身は少しも変わらない。逆にこれを破った子を周囲は自分たちの英雄とみるんです。つまらんこと管理するから、ますます反発してくる。子ども達の生活を回復してやって、も

子どもが持っている正義感とか友情を育て、まともな感受性を持った子どもにしていく、というところに視点を置かないとね、場当りの対策に終始してしまう、と思います。

この区では中学連合行事として、毎年「オーケストラ教室」をするんですが、今年は三十校のうち七校が「とても子ども達を連れていけない」と辞退しました。参加した学校にもひどいところがありません、あの日比谷公会堂の廊下でタバコは吸う、オーケストラが始まっているのに立ったり座ったりしゃべったり歩きまわったりね。おまけに二階席へ行ってデカイ声で「オーイ、こんなダサイ音何で聞いているんだ！」と怒鳴る。独得の格好で、崩れたのがよくわかるんですよ。大変な騒ぎで、とうとう演奏者にアメ玉を投げつけて、千四百万円するチェロに当たってしまったのです。修理に何十万もかかるって聞きました。

もうとても子ども達を校外に連れ出

せない状況ですが、こんなときも「教師に勇気がないからだ」といわれてしまいます。しかし一般社会だって、電車の中で女の子が暴行されたりいたずらされても見て見ぬ振りしている。隣の車両に逃げ込んだりする時代なのです。教師にならなければならない人だけに、特別な勇気を要求しても片手落ちです。

それからいまま、若い教師が殴られるケースが多いのは、立ち向かっていくからじゃなくて子どもにバカにされている要素が非常に強いんです。つまり猛烈に難しくなっている採用試験をくぐり抜け、難しくなればなるほど点数ばかりしか取れない生活喪失症の、大変もろい人しか先生になってこない。そういう人がどう対処できるか……。

確かにツッパリは怖いんです。「これやったら罪になる」なんて意識がないのですから、教師だって怖がってる。生徒たちはもっともとおびえています。こんな状態の中へC一家の連中が戻ってきたらどうなるか。きっと修羅



場と化すでしょう。パニックですよ。暴力事件が起きたら私は警察に頼るつもりです。残念なことですが、それでなければもう教育はできません。うちの学校だって、ツッパリと対応できる教師は五人いるかいらないか、これが現状なんですから……。

(まとめ・原田静枝)
(え・岡田正子)

あまりにも名高いこの小説の第一部が世に出たのは、今から二十年以上も前、一九六一年秋であった。以来宮々と書き継がれて十二年後の一九七三年、雄偉なる大河小説として完結した。

一体今迄に、この小説はどのぐらい多くの人々に愛読されたであろうか。私はつねづねこの小説こそ、全国民必読の書ではあるまいかと思いつけている。かつて出会った数多の書物のうち、これほど私の心を奪ったものもなかった。書かれてる一言一句が私を捉えて放さず、一旦読み出したが最後、夜を日について一気に読み進めずにはいられなかった書である。

よくぞ書いたり、差別される人々の血を吐くような悲しみ、苦しみ、憤りが沸々と伝わってくる。同じ人間でありながら、しかも同じ貧しい農民同士でありながら、畑仕事の手伝いに行けば、欠けた茶わんでしかお湯を飲ませて貰えぬ上に、その茶わんはその場で割って捨てられ、日当は床や地面に置かれ、塩をまかれる。それほど徹底した差別が、奈良盆地の一村を舞台に克明

に描かれている。

学校帰りにエッタと石を投げつけられる子供は、そっと裸になって、何か余分なものは付いていないかと自分の体を調べてみるが、何も付いてはいない。やがて、差別される原因が、決して己の肉体的、精神的異質に由来するものではなく、一にも二に

私の一冊

橋のない川

住井すゑ著

も差別する側の都合にあり、人は生まれた時はみな等しく裸で名なし、生まれながらに尊い人、卑しい人がいるわけでなく、それはつくり事、手品に過ぎぬと気付く。

学校教育を通して、天皇の偉大さが子供たちに徹底して叩き込まれ、人々が天皇は神であると信ずるに至った時も、差別され

る側の人々には、天皇が神であるはずはなく、誰かが天皇をこしらえたり、エッタをこしらえたのであり、天皇制の本質というものやちゃんと見抜いていた。虐げられる人々には差別の構造が一目瞭然と見える。そこで勇気を奮い起こし、差別のない社会を作るべく立ち上ったのであるが、六十年後の今日の社会においても、不当な差別は一向に解消されず、この小説の苛酷な世界は、人間の世界が続く限り、手を変え、品を変え存在し続け、私たちはそれを克服する能力を持たぬかのようなのである。

著者は、誰にとっても一日は二十四時間と変りなきが如く、この地球上に生きとし生けるもの時間の前ではみな平等であり、学校は本来そういうことを教える所であるべきが、逆に差別の温床をなしていると訴え、仮りに、人が人を犠牲にすることなど許されるべきではないと力強く訴える。私はその訴えに精いっぱい応えたいと思う。

第一部——第六部 各八八〇円 新潮社

(松本弘子)

Chatterbox



親バカチャンリン

落ちこぼれ防止策

大分県大分市 広戸きくみ



今年も、入学式のシーズンがやってきた。最初の子を、小学校へ入学させる時は、親子共々、落ち着かない気分でのその日を迎える。早々に、机やランドセル、学用品等を揃え、新しい門出に胸をふくらませるのだ。今や、よほどの僻地でもない限り、ほとんどの子供が小学校に入る前、保育園や幼稚園を経験しているから「先生に呼ばれたら、ハイ、とお返事するのよ」とか「整列のしかたは」「ゲタ箱の使い方は」等のキマリは、改めて説明するほどもないだろう。さて、二年前、長男が入学する時は、我が家も例外ではなかった。「他の子に負けないよう、しっかり勉強してネ」が口グセ

の日が続く。入学の準備に十数万円かかるといわれたが、机は不用品交換で手に入れた、スチール製の事務机（元は灰色）をカーズプレーでクリーム色に塗り替え、イス、ランドセル、学用品はお祝いいただいたので、出費はゼロ。他に現金のお祝いは、すっかり、手元に残った。

入学を機会に、夫がベッドを手作りし、部屋を独立させた。それまで、「ボクの部屋」は、単なる遊び場だったのだが……。

大分市では、ほとんどの小学校に、校庭続きの市立幼稚園があり、入学までの一年間、これまた、ほとんどの子供が入園する。つまり、〇〇小学校幼稚園部というような

もので、新一年生にとっては、通い慣れた道なのである。だから、小学校の方針が幼稚園につつ抜けになるせいも、市立幼稚園としての方針が知らぬが、入学まで勉強らしきものは、一切しなかった。数は十まで、字は名前の読み書きができればいいというのである。小学校側では、それ以上知らない、というところから教えるので「ボク、それくらい知ってるよ」「アタシ、もっと違うことしたい」というのでは、やりにくいのだそうだ。最初から授業を真剣に受ける態度が身に付かないと、いよいよ、難しくなった時に、ついてゆけなくなる、という。私は、なるほど、ごもっとも、とうなずいていた。

息子は、二歳の終り頃から、字を覚え始めた。本が好きで、三歳の時には、もう少年向けのマンガを手にしていった。本屋に行っても、私はもう少し夢のある絵本や童話を読ませたいと思うのに、息子はマンガをつかんで離さず、店員が目丸くしていた。私にしてみれば、初めての子であるから、いくつから字が読めるか、など考える間もなく、かといって親が教えたわけでもないのに、自然に、知らぬ間に読み始めたわけだ。近所には同年代の比べる子供もいなかった。恐竜やロボットの名前から、カタカナも一人で見え、夫が「コイツ、カタカナも読めるらしい」といった時は、「エ？まさか、ロボットの名前知ってるから勝手に読んでるだけでしょ」と答えたくらいで、ためしに「これは何て字？」「これは？」と聞いて初めて「あら本当、読めてるわ」これが「視点」でも「おしゃべり」でもなく「親バカチャンリン」たる所以である。ある時、夫が持ち帰った切り抜きの「三歳前後で、特別強要せずとも一人で字を覚える子供はIQが高い」という記事に、二人して「ムフフ……」と目尻を下げたものであった。漢字も「形」として覚えるらしく、時計も読めるから、新聞の番組表を見て、○時から××がある」といった調子。少年雑誌から得る知識は、良きにつけ、悪しきにつけ、私が知らないことまで吸収していった。マンガ数ページ分のセリフを、ペラペラと再現してみせる。子供は記憶力がいいというのは本当だ。

それほど読みは完全なのに、書くほうは

さっぱりで、私も、それだけは入学後の楽しみに、と意識して教えなかった。ところが、である。開けてビックリ玉手箱。

入学して、一週間もせぬうちに、連絡帖に「もってくるもの、おはし」とか「ずこうのようい、いろがみ、けいと」とか、書いて帰るようになった。一年生になったら、アツという間に字が書けるようになった、というのではない。黒板に書かれた文字を、そのとおりにノートに書き写せというのだ。息子は、まだロクに字が書けない。「こくご」の時間でも、まだ字は教えておらず、絵を見て「あ」のつくものはどれ？ といった段階なのだ。字を書ける子はともかく、書けない子は、書き順も教わらないうちに、書け、というのだから大変だ。これには、私も驚くというよりも「しまった」と後悔した。

入学してからでも充分間に合うはずだったし、第一、どうしても入学までに覚えておくべきことなら、幼稚園でもそれなりの教育があるはずではないか。それなのに、一字も教えないうちから、文章を書かせる

とは……。

かといって、あわてるでもなく、しばらくボーゼンとしていた。息子は毎日、たどたどしい字で書いて帰る。時に鏡文字もある。それでもまだ、私は自宅で教えようと、ピカピカの一年生は毎日、精神的にとでも疲れて帰宅するのだそうだ。「今日は何を習った?」「何を習った?」などと、しつこく聞いてはいけないのだそうだ。

ボーゼンと、かつ、開き直ったような数日が過ぎ、やがて、ムラムラと怒りが湧いてきた。

なんだ、遠慮することはないのか、そうか、そうだったのか。やっぱり、知らないより知ってたほうがいいんだ。塾だって落ちこぼれだけが行くんじゃない。人より先に進むために行く子もいるんだ。フン、「ひらがな」がなんだ、こんなもん、すぐ覚えるさ。ヨージ、こっちもやったらやないか、「ちよいとおいで」と息子を呼びつけ、「あのね、カエルが三匹いたのね、そこへ五匹遊びに来て、二匹帰ったの、今いるのは何匹?」「エート、三と五で八、八から二引

いて六、六匹」「よしよし、じゃ、えんぴつを右手に八本、左手に十二本、全部で何本?」指を使わないで答える。「二十本!」学校では、まだ絵を見て「いくつある?」「何匹いる?」と、やってる頃だ。

以来、教科書より、一歩も二歩も先の、家庭学習が続いている。と書くと、教育ママとガリ勉強子に聞こえるかもしれないが、実体は、宿題でさえも忘れて行く勉強キライ。十日に一度くらい、私が広告の裏などに二、三題書いて、「これやっごらん」という程度なのだ。それも嫌がると「塾にやっごらなうよ」と、おどすので塾は怖いところと知っている。そして、殺し文句は「塾に行くとお金がかかるよ。そのお金で、オモチャでも何でも好きなもの買うほうがいい。」

子育てのさなかで

月日がたつてしまえば、語り草の一つに

うがいいでしょ?」その割には、あまり買ってくれんなーと思ってるかもしれない。このまま、ズーっと、一歩進んでいくれるといいのだが……。これが親バカでなくて、なんであるう。教訓「上には上がいるものだ」

しかし、本音と建前、という言葉が、これほどズケズケと体当たりしてきたことは、今までなかっただけに、やはりショックだった。四歳の娘は、息子より読むことは遅れているくせに、書くほうを先に覚えた。これも、私が教えたのではなく、近所の友達と競争で覚えたのだが、息子の二の舞をせぬよう、就学までに、しっかりと読み、書き、計算を教えておこう、と今からハナ息も荒い。

茨城県取手市 鳥山みどり

なってしまうことがある。でもしばらくで

はあったが、私の心を悶々とさせたことを軽々しく扱ってしまいたくない気がして書きとめます。

七歳の長女を、我家から五つも離れた駅で見失ってしまった。父親と出掛けた先でけんかして（何でも買ってくれとわがままを言ったと言うが）しかりながら「歩いて帰れ！」と言ったら逃げて行ったらしい。主人から電話でそれを聞いて、私はまさか歩いて帰るなどと思えず、駅付近で主人を捜してウロウロしているのではないか、なんとか電話連絡してくるのではないかと、心配だが待つより他はないとイライラしていた。

日曜の昼だし、都会の駅じゃないのだからと思ってみても悪い事態が予想される。でも幼児じゃないのだ、少しは世の中の恐さも知っているはずと重苦しいものを無理に消していく。

結局、待ちきれず、私が車で捜しに行った。ところが途中まで来て、まさかと思っていた娘が道路の端を歩いてくるのを見つけたのだ。娘は私に気が付くと、今まで見たことのないような静かな顔で近づいてき

た。

七年母親をやっていた知恵で、こんなとき言いたいことをぐっとこらえて穏やかに受けとめなくてはと、とっさに決心した。

離れてから一時間二十分たっていた。車で何回も行き来したことがあるとはいえ、トラックが疾走し、歩道もない道をトボトボ何を考えて歩いていたのかと思うと胸がキュツとなる。昔読んだ芥川龍之介の『トロッコ』の少年を思い出した。家から離れていくのと向かうのと違いはあっても、胸は不安でいっぱいだったに違いない。

気が落ち着くと、強くしかって自分勝手な行動をしてはいけないと諭すべきだったかとも考えたが、眠りに落ちた娘はその夜、しくしく泣いたり、大声で寝返りを打つ様子を見てみると、やはり彼女なりにつらく悲しくこたえているのだと分かり、何も言わなくてよかったと思った。

主人に対しては、子供相手になんということをと腹が立ったが、娘にこういう態度

を取らせる素地を作ったのは、私にも大いに責任があると反省すべき点を知らされた。

長子だからだろうか、私は何かにつけて口を出したり、必要以上に厳しくしたり、いつの間にか意地っ張りの子にしてしまった。私とは仲の良い時は親友のようだが、気が付くと大声でけんか合っていることもたびたびだ。下二人の娘はいえ、私は淡々といい加減という感じで付き合っている。

「歩いて帰れ！」と言われれば泣きじゃくってついていくとばかり思っていた長女。子供を育てながら、親は育っていたけどどなたかがおっしゃっていたが、実感としてうけとめている。



私の視点

パートは自立につながるか

東京都豊島区 木下 幸子



「主婦の自立と再就職」流行のこんな題を見ると、考えてしまう。主婦でない故に、自立せざるをえない女達は、何処に居るのだろうか。どうしているのだろうか。

私は夫のいない主婦で、パートで、九時から五時まで働いている。離婚してから働き出したのではなく、前から同じ職場で、同じ時間働いていた。夫がいない今、私のパートの収入が生活費である。生活を担って働いている今、たとえパートであっても、私の事情で会社は休めない。授業参観、保育園の遠足、子供の病氣、もちろん私の病氣。理由は何であれ、会社を休む事はでき

ない。一時間休めば、確実に一時間分の収入が減る。

夫がいる女性達は、その現実が分からない。パートで働く、その事実が分かっている。そして、何の技術も資格も持たない女が、職を求めるのも、非常に難しい。もし夫を失って、子供を引き取れば、今日から職を探さねばならない。お金を得ねばならない。

企業にとつてのパートとは、夫のいる主婦である。経済的自立なしでは、精神的自立はないと、再就職を求める。家にもつまらない。時間が出来たから子供が帰る

まで。社会を見る目を養いたい。こんな考
えでパートに出る。企業にとっては、有難
いことである。責任のない、安易な労働力
である。

お金を得る為にだけ働くのではないと言
う主婦が増える事は、決して女性の労働
条件を改善する方向へは行かないと思う。
パートであっても、時間も条件も選べず、
ただひたすら自分の時間を売って働かねば
ならない多くの女達の、足を引っ張る事にな
ると思う。時間のある主婦達は、収入よ
り、まず家の外に出る事に急で、自分の労
働時間を安売りする結果となるからだ。

だが、何でも金銭で価値を決める現在、
働く事を、そんなもので測りたくない気
持もわかる。しかし、一つの見方として、
お金が必要な者にとって、一定時間企業に
拘束されて働けば、一定の金額が確実に手
に入るのが、パートという手段であるとも
言える。そして、手段としてのパートで、
生きている自分の大事な時間を企業に売る
のならば、もっと高い値をつけるべきだと思
う。パートなんだから、とか、外に出て
収入を得られれば、それでいい、こんな考

え方では、何時までたっても現状は変らな
い。たとえパートであっても、取り換えの
きかない、その人しかできない能力を身に
付ければ、パートの地位も、賃金も上がる
だろう。

お金の為に毎日働いている私から見ると、
パートか、フルタイムか等の問題より、彼
女達が、働くという事にたいして、どう考

自立へと歩み始めて

岡山県岡山市 山田 幸子(33歳)

初めてお便り差し上げます。

私が「わいふ」の名を知ったのは、「母
親たちの自分史」によってでした。それは、
二人目の子供を産んでまもなくで、子供た
ちの世話に明け暮れている頃でした。子育
てのこまごまとした雑用に追われながら、
母親としての喜びよりも、それからはみ出
ようとしている自分自身をもてあましてい
た時です。

ゆったりとした気持で授乳を、とか、母
子のスキンシップには絶好のチャンス」と

えているのか、その点に問題がある様思う。
まず、精神的自立を、と言いたい。たと
え、精神的に自立していなくても、お金は
稼げる。そして、稼いだ事によって、精神
的自立を成し得る、成し得たと思う、その
思い込みがこわい。経済的に自立している
男性達の何%が、精神的にも自立している
か、考えて欲しい。

かいったキャンペーンのことは、頭はと
もかく、気持がついていけず、乳房を含
ませながら目は新聞の活字を追い、手は本
のページを繰っている日々でした。母親役
を楽しみ、それに没頭し切れない自分を感じ
ていた私は、この本を読んで、自分と同
じ思いをしている人たちの存在を知り、安
堵したものでした。

それでも、「わいふ」を直接読んでみよ
うとするきっかけとはならず、依然として
孤絶感に浸されたままの子育て期を悪戦苦

闘して今日に至っています。この時期、「わいふ」に出合っていたら、もっとリラックスして子育てができたかもしれないのに……と、今となつては残念に思います。

その頃から、妻とか母親、あるいは主婦という役割に収まり切れず、自分自身を広げ掘り返していきたいと強く思うようになりました。

自我を主張せず、妻や母親としての役割を全うし、専業主婦として家庭をとりしめること——これが、世間の要請する結婚後の女の生き方です。こうした社会通念からはずれた言動をとる女は、悪妻であり、母親失格という烙印を押されます。日本の社会では、我を殺し、周囲とうまく自己を合わせていく人が尊重されますが、私は、自分を主張し、自分にこだわり、自分にかまけていたいという欲求に目をつむることができませんでした。子育て期だからといって、母親役以外の自分をすべてそぎ落とし、社会と没交渉のまま、子供にだけ目を注ぐ生活には耐えられませんでした。

そこで、下の子が二歳になる前に、二人とも保育園に預けたのです。子供たちだっ

て、狭い団地の部屋で、始終母親とだけ向き合つて過ごすよりも仲間と遊ぶ生活の方がいいだろうと思ひ、窒息しそうな母子密着の生活から浮上しようとしたのです。そして、自宅のできるアルバイトを始め、日中は完全に子供から解放された自分だけの時間を、持つことができるようになりました。

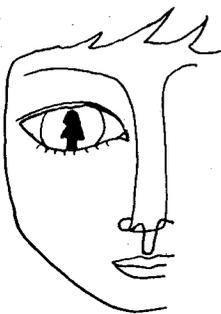
こうした中で読んだ「主婦とおんな」や「プラス・ラブ」、「新しい女性の創造」、「シンデレラ・コンプレックス」などの本は、それまでもやもやしていた私の心中に、ことばを与えてくれたのです。母親や主婦に収まり切れぬのは、私の心がけ如何の問題ではなく、子供が好きとか家事がきらいとかいった個人性の枠を超えた、すぐれた社会性のある問題なのだということもわかってきました。

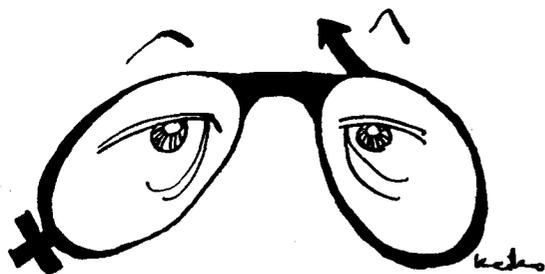
私の場合、結婚して子供を産み、育てて初めて男女の性別役割分業からくる様々な矛盾やひずみが、我が身に引き寄せて理解できるようになってきたといえます。主婦の居心地の良さは、自分で考えたり決断したりすることから縁遠い生活をしている結

果、生じたものであり、それは裏返せば即ち、人間としての居心地の悪さに相通じるものです。夫や子供の存在に、ひいては結婚生活にしがみついてもか生きられないというのは、本当に不幸なことです。

現在の私の生活も、経済的自立にはほど遠いアルバイト収入しかなく、リブ批判派の夫との関係ももっと突っ込んでみる必要があります。そして今は、心を開いて話し合える友人を身近に見い出せないまま、本の世界で息をついているのが現状です。

自分の考えを口にし、それに反応の返ってくる世界、そういう生き生きとした人との関わりを持ちたいと切望し、その第一歩となれば……と思つてペンを持ちました。





Chatterbox

エコー

読者を愚弄するのか

セックスアンケート

神奈川県川崎市 野村 純子

以前から、わいふの載せる性に関する記事に、どうもついて行けない。企画した人達の、外に表れた強がりの中に、内奥にうずく女としても哀しさが感じられて、ため息まじりでしか、他人事のようにしか読めなかったのに、今度のアンケートは何だ!! のぞき趣味? 露出狂? 女の「生き様」を真剣に模索している多くの読者(ちがうか?)相手に5回数の回数・感じなんて質問するとは、一体どういうつもり? しかも質問しときながらその質問がどういう意味をもつか等、するべき説明をちっともちゃ

んとしていない。
Sexって人間の生きていく上でそんなに大切なもの? 他人と比べてどうこうするものなの? 愛はどこに行ったの? へ尊敬信頼、情熱、決意✓結婚を語る時に、そんな測りしれない感性を問題にしているは、現代のマスメディアとしてアピールしないから? 精神神経科の仕事は体よく簡単にこて先だけで、しかもマスコミ手段でやるうというの? やめなさいよ。人間にはもっと大事なことがあるんだ。夫に不満があるの? 夫のうしろにみえかくれる姑が



いやなの？ 一人になって静かに自分の位置、自分の望み、自分の出来る事を考えてみるのね。♂の回数、アンケート結果の数字で夫婦生活のランク付けでもやるの？

また私にとって、私の結婚生活はだれか他人に話せるような安っぽいものじゃない。だれにも秘密。そんなにも大切よ。「あんたが主役」なんて言われて、ホイホイ告白するような軽薄テレビ人間じゃないのよ。読者を馬鹿にしないで。大人の女をつかまえて避妊法うんぬん、現代女性の性のアンケート？ 人を愚ろうするにも程がある。

すっかりしなさいよ。結局、そうやって今の自分の不満・不安を男のせいにするの？ ダメダメ、貴女がまず、じっくり自分をみつめる事、自分が生きているその時間をよく考えて、自分で納得して生きる。おのずとそこにかかわってくる人間がそれで決めるのよ。貴女のお相手は貴女の生き様の鏡。人生は一度きりよ。しかもかかわりあう人間なんて、数がしれている。しかも生まれながらの運命的な差もあって、単純にアンケートなんかで人間関係の綾がわか

るか？ しかもその人間関係も自分の意識一つで広げたり、深めたり出来る。そしてそれが人間のすばらしさで、もしうんぬんするとしたら、そうした問題について、人間の可能性についてであって欲しい。問題は♂の回数や感じ方などでは決してなく、生きていく自分の意識・覚悟。♂をメシのタネにするのはおやめなさい。

これは、大多数の、しっかりと結婚して幸せに暮している女で、子育てや学校教育や、老後や、仕事やについて、あれこれ頭を、想いをめぐらしている、わいふ読者のいつわらざる肉声ではないかしら。几帳面にアンケートに回答してきた人も、きつと大変とまどいながらだと思ふ。本当に土足で他人の家に上がりこんできたような、ひどい事をする雑誌だ。他にいい企画がなかったら、本当に土足でふんでやりたい。情報社会が、ここまで個人の問題に立ち入ってはいけない。△立入禁止▽。私は断固拒否します。



誌上論争・私の意見

東京都町田市 松本 文化

皆様、お元気ですか。

新企画をたくさん盛り込んだ「わいふ」一八〇号、楽しく読ませていただきました。ただ届いたのが二月十四日だったので、たとえば十五日の面会日など、とても都合がつかず残念でした。

昨年は校正の仕事のことで田中さんにはなにかとお世話になりました。ありがとうございました。あの時いただいたお金は四年前私が子どもを産もうと決意した時以来のもので、久びさの我が労働に対する報酬はずっしりと手ごたえがありました。

現在私は近所の人や家族の協力を得て、エディタースクールで週二日夜間、校正の勉強をしています。この講座は四月で終了しますが、今の勉強が決してカルチャーセンター的なものにならないためにも、同時平行して求職活動をしています。

これまで数社あたってみてすべてダメでしたが、中でも外部校正者募集の某社の場

合、筆記試験で一一六人中六人合格という狭き門を通過したのですが、二次の面接でみごと、落ちてしまいました。不採用の理由はわかりませんが「お子さんはまだ小さいぶん小さいんですね」と言われたことが気になっています。(子どもは一歳と三歳)でも結局は自分の力不足だったんだと思いますし、そう思うことにしています。できれば勉強する張り合いがありませんものね。

それに保育園の問題も……。今回初めて福祉事務所へいったのですが、求職中の人が子どもを認可保育所へ入れられる確率はまったくなく、無認可保育所だと我が家の場合、二人で最低六万円也、それとて四月まで待ってもらわないとあきがないという。雇用者側からすると、子どもを預ける場所が決ってないのなら雇いようがないと、ごくまっとうなことをのたまっています、このことは鶏と卵の問題ではないけれど、ます

ますむすかしくなっていて、ふと思うと、物か何かのようにいわれている子どもたちが、あわれになってくるのであります。

そんなわけで時折、とても落込んでめげてしまうのですが、何とか気をとりもどし、新聞やエディタースクールの求人欄をみている次第です。また何かお手伝いすることがありましたら（校正にかぎらず）どうぞ一声かけて下さい。お願いします。

それから今回の「わいふ」について新企画のわいふ誌上論争、大変興味深く読みました。本当は私としてはもう一歩つっ込んで例の毎日新聞の田中さんの発言をめぐる論争を展開してほしかった気がするのですが、いずれそれはそれでなされることを期待します。

それで今回の誌上論争なんですけど……正直言って和田さんの意見は私にとってあまり説得力がありませんでした（青二才の私がかんなこと言って……、和田さんごめんなさい）。つまり和田さんのお話を伺っていると、ああこの方はすでに社会と何らかのつながりをもった立場で、発言している

んだなあと思ってしまうのです。たとえば「私はね、一応知的な女性であればね、自分の満足だけでなく、自分の行動が社会にどういう影響を与えるか、を考えて行動すべきだと思っんです」この発言そのものを否定する訳ではないのですが、現に今求職中の我が身をふり返ってみれば、私はどうするのか、子どもはどうしたらいいのか等身の回りのことに振り回されてともその社会的影響など思いもよらないのが実情なのです。近視眼的なものの見方がいいわけではないのですが、働くことに關してまったく白紙の状態だった主婦が、一歩踏みだすとき思い悩むのは、その一歩が与える社会的波紋ではなく、身内、あるいは自分自身の内部でおこる泥沼化したしがらみなのではないでしょうか。そこをのりこえて初めてみてくれるというのが実状ではないでしょうか。それに画的に労働時間の長短、収入の多少で人間そのものをみることはできないと思いますし……。この話は、例の毎日新聞での論争にまで言及しなければならぬみたいですが、そうなると話がとりとめなくなつて、またしてもこの手紙を投

函する機会を失いそうなので、この辺でペンをおきます。中途半端ですみません。遅筆の私にとって夜はどんどんふけてゆくのです。またおたよりします。お体大切に頑張ってください。

追伸

「現代女性の性と結婚」に関するぼう大なアンケート。昔のことをいろいろ思い出しながらずーいぶんと時間がかかりましたがしっかりと書いて提出しましたのでよろしく。

追々伸

今、福祉事務所からの連絡で上の子は二カ月措置のかたちで保育園に四月から入所できるとのこと、やっぱりあたってみるべきですね。せつたい無理だといわれていただけに信じられません、現に書類が届いているので……。

頑張ります。

おしちり

悲願脱専業主婦

茨城県美浦村 宮本 法子

すっかりご無沙汰してしまいました。二歳半の長男と一歳にならない二男を義父と母に預けて、役所にアルバイトとして十カ月間勤めました。今はまた(思い出となつてしまいました)家に逆もどりでです。

今月末に三人目の出産予定なのです。家に居れば居るで子どもたちのお守り、朝昼晩の食事作りに追われてしまいます。大人三人に子ども二人、長期出張の主人はあい変わらず月に三回くらいしか帰れず、また単調な毎日なのです。後一カ月もすると、そろそろまた私のストレスがたまりそうで

す。一年前もちょうど気が狂いそうになり

(子どもが心配で夜も眠れず十日間を過ぎた思い出があります)、表へ出た次第です。子どもは自分で見るのが一番と思っておりますが、預けてしまえば何も言えずにただ働くのみ。土、日の休みの嬉しかった事。子どもと居られるのが最大の楽しみでした。今は子どものおやつ、遊びと主導権を私が握っているので満足は満足。でも、大人三人、何もしないで顔を合わせているのは実に無駄な事。三番目の子をどうするか……。義母は土、日勤め。その他たまに習い事と家を空ける事が多い。義父に赤ん坊を預けるわけにも行かず、現在思案中なのです。後、一年くらいは家に居るしかないだろうと人は助言してくれるのだけれど、あの恐

怖の一年前を思い出すとどうも家に居る気になれないのです。

上の子たち二人は、義父母の反対で保育園に入れない事になったので、以前と同じように、お守りしてくれる予定です。でも、ママ家にいてね、とか、ママ、もう役所いかないでね、なんて言われると、ホロリとなってしまうのです。

また、わいふの皆様の人生観を読ませていただきながら、自分の道を考えるしかありません。でも、何だか、悩みながら生活をしているより、実行に移して、はりきって生活する事の楽しさを知ってしまったから(表へ出た十カ月間)、ちょっとくらい身体がきつくと、夜の睡眠時間をけずって、頑張らなくては……と思うのです。何

と言っても子どもの事だけが気になります
が……。

主婦の社会的地位とは？

埼玉県富士見市 野崎 美智子

「わいふ」のことは、今、人間として」と
いう雑誌に、「わいふ」の読者を中心にブ
ックパワーという会社を作ったという記事
が載っていて、私は大変興味深く読んだの
で、「ああ、あの……」という思いで読ま
せていただきました。

読みながら、私の探し求めていた雑誌に
出会えたという思いと、私の求めている生
き方を、皆が求め、「わいふ」の中で精いっ
ぱい声をあげ、行動しようとしているのを
感じました。

私は現在、四歳と二歳の息子の母親です。
三年前まで、板橋区の学童保育指導員とし
て勤務しておりましたが、カギっ子たちの
面倒を見ながら、我が子をカギっ子にして
しまう矛盾と不安を感じ、また、夫の協力
を得られない共稼ぎで、家事、育児をひと

りで担う重さに耐えかねて、退職しました。
幼児子供二人の育児は、私に考える時間
すら、与えてくれませんでした。長男も
今春、幼稚園に行くことになり、次男も母
親より友だちの方に興味が出てきたこの頃、
私は、自分独りとり残されていく不安と、
閉鎖的ともいえる専業主婦の生活にうんざ
りし始めています。

家事のできの良し悪しでしか、専業主婦
の評価はないのか？ 専業主婦の行く末は、
パートか趣味に生きるしかないのか？ 専
業主婦は、社会的に見てどんな位置にある
のだろうか？ そんなことを思い始めてみ
ると、なんとも、輝きのない専業主婦の行
く末ではないでしょうか。

「社会参加」その解釈が人それぞれで、む
なししい専業主婦」の方に集まった多くの共
感の声（手紙、電話）が、「社会参加」の
方では、批判と、「夫と子につくすことも
社会参加」、「ボランティアでもしたら、市
民運動を」、「化粧品頒布を」といったお
すすめに変わり、私としては、一連の訴えの
つもりが、思わぬところで、屈折してしま
って、原稿をひっこめてしまいたい衝動に

かられてしまいました。

「社会参加」はちよつと大きな表現だっ
たかなあと反省しつつも、私のむなしさは、
子供が手がかからなければ満たされるも
のではなく、やはりもう一度社会復帰（？）
への道を歩まねば、夫と子への愛情や、思
いやりと別の自分の中のエネルギーのよう
なものを発散させることはできないのでは
ないか……と思えるのです。

その社会復帰の道が、どんなかたちにな
るか、どんな受け口があるのか、そこがま
だ、模索中のところに、私の弱さがあるの
ですが。また、専業主婦と名のりつつ、社
会の確固たる位置づけがなされるのなら、
それも一考あり……と思わぬわけではない
のですが。専業主婦イコールヒマな人、社
会のアウトサイダーという評価には耐えら
れないのです。

私が、「わいふ」とこのような恵まれた形
で出会えたことは、本当に幸せなこと
だと思えます。

私の中絶体験

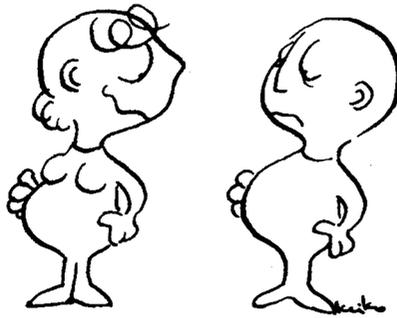
東京都町田市 老沼 とし枝

前略、「わいふ」への投稿は二回目です。「妊娠中絶禁止」のホンネとタテマエを讀んでお手紙さしあげます。

私も妊娠中絶した事が一回あります。それは、三男が生まれて五カ月の時、もうお腹の中には、妊娠三カ月の胎児がいたので。産後一回生理があつて避妊に失敗したのです。私は、赤ちゃんがいたのでやむをえず中絶してもらいました。先生も「出産したばかりだから仕方がない」とおっしゃって下さったので少しは、すくわれました。「もう二度と水子をつくりたくない」と思ったから、中絶して一回生理があつてからリングを入れてもらいました。

主人は「男の子が三人いるので、女の子が絶対一人欲しいから産んでくれ」と言っています。私はもう産むつもりはありません。

もうリングを入れてから三年半たつので産婦人科へリングを交換しに行かなくては



なりません。その間には、三回位検診に行っています。費用も中絶するよりも安く、違和感ありません。

妊娠しておろすというのでは、失敗するたびにおろすという事になります。それよりも安全で確実な避妊方法をとるべきだと思います。妊娠しやすい体質の方には、リングを是非おすすめします。

鈴木健二式ベストセラー量産法

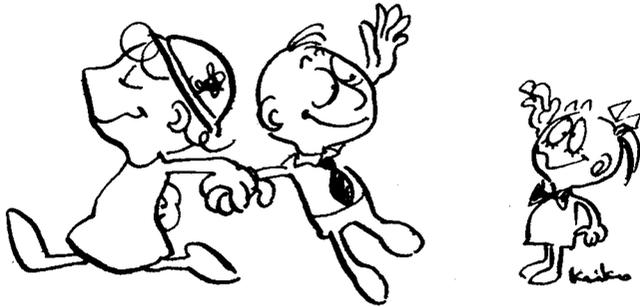
千葉県松戸市 龜山 和枝

挨拶・孤児院・風呂屋の番台、と並べると何やら三題漸めく。が、これを枕に一席どころか、ベスト・セラーを何冊も作りあげた男がいるのを御存じか。

ちょっとしたバイトで、デブ・チビ・メガネを差別語として定着させた鈴木健二氏の本を数冊読むハメにあいになった。読むというより頁を繰るといふ作業をくり返すうち、「あれー、これさっき見たよ。この忙しいのに、ドジノアホノ」と自らをノ

ロイツつ表紙を確かめると、たしかに違つた本。ただし同じと思つた件も、よく読めば、例えば、銭湯で女性が衣類を脱ぐ際の順が少し異なっていたりする。

だいたい彼の本作りは、世代別、職業別、興味別、性別、そして「氣くばりのすすめ」のように老若男女どなた様にも……と、まったくごていねいな氣くばりに満ちたものなのだ。こうした著者にしてみれば、同じ人間が自分の本を、あれこれ読むとは思ひも及ばなかつたのだろう。私ときたら、本屋のあのコーナーに立ち、このコーナーをかき回し、果てはオバンのくせにお嬢さん向けに手を出し……。鈴木氏なら「世の中には、こういうヤバンなことをする人もいるんですね」とささやくように（これも彼おすすめの対話法）言うかもしれない。何にしても、「挨拶」という言葉を成り立ちから説いてインテリぶりを印象づけ、若き日に孤児院に係わる姿はヒューマンで、ちゃんと色気もありますと番台から見た女湯をスケッチしてみせるあたりの座持ちの良さ、さすが司会者、氣くばり教授の本ではある。それにしてもこういう本が何冊も何冊も



売れる現代日本、出版不況ってホントなのかなあ！

父親の自立

東京都江戸川区 猪狩 睦子

昨夜から夫は「あしたはみんなで横浜の中華街へ行ってみよう」と言っていた。

朝になって、夫はその誘いを繰り返した。しかし、娘たちの返事はつれなかった。

「私達は行かないわ。試験をひかえている彼女らは、わざわざ横浜まで出かけて、中華料理を食べ、港を見る気などないらしい。とうとうあきらめて、夫婦だけで出かけることにした。いつもなら、娘達が行かないなら、やめにしようという夫なのと思った。

本人は、今が「親離れ・子離れ」のいいチャンスだと思つたらしい。

日曜にしては、駅は静かで、電車も二人で座ってゆつくり行くことができた。

考えてみれば、遅かれ、早かれ、いずれは夫婦二人になる、その時あわてないために、親である私達も心の準備が必要だ。老

「齢化の進んでいる現在、夫婦二人で過す時間、これからどんどんふえてくる。」

「そうだ、子離れも大事だけど、それ以上夫婦の気持を、今いちど新たにするのは、もっと大事だと考えた。思いきって連れ出してくれた夫の気持が、ありがたかった。」

その夫が、メニューから選んでくれた料理は、どれもおいしかった。おいしそうに老酒を飲む彼を見ながら、私はこんな時間をまた持ちたいと思った。夫は帰りの元町で、娘達にしゃれたセーターをもとめた。

北京の食堂で

大阪府吹田市 榊野 玲子

無彩色の寒い冬から解放され、薄緑色の柔らかな柳が至る所風に舞っている北京の春。何かいい事が起りそうな気がする。

そんな早春のある暖かい日の事だった。友人と食事に行った。店は人でごったがえしていた。私達も中国人に倣って食べている人の後で空席を待っていた。隣のテーブル

の人が食事を終え席を立つか立たないうちに二人の中国人が、このテーブルにかけ寄って来た。一人は中年の女性、一人は少年だった。女性は客の食べ残したいく皿かを奪い取るようにして持って来た弁当箱に詰め始めた。少年も争うように残飯を一皿にかきあつめ、食堂の隅へ運び去って食べた。女性は弁当箱に詰め終わると客が残したスープ皿を持ち窓際で立ち飲みして去って行った。一時間程待たされてやっと席につくと、相席の中国人青年が外国製煙草を勧めながら、あれこれ話しかけて来た。どこに住んでいるのか、日本語を教えてくれないかと。感じの悪い青年だった。私は住所を教えはしたものの、日本語の方は忙しく時間が無いからと断った。友人と別れ用事を済ませ私一人が宿舎の女子寮に戻ると、その青年が入口に立っていた。彼の姿に気付いた時、私は一瞬ドキッとして脚がすくんだ。外国製煙草をもっている中国人青年にろくな奴はいない。中国人は舶来煙草を簡単には手に入れられない。外国製品を確実に手に入れるためいろんな方法で外国人に近づくと中国人もいる。そんな中国人

とはかわりたくない。彼が監守から身分証明を求められているスキに私は部屋に戻った。それ以後帰国するまで、彼は私の部屋には訪ねて来なかった。

残飯を弁当箱に詰めていた女性の姿と派手な服を着て外国製煙草を吹かし女子寮の入口で私を待ち構えていた中国青年のことを思うと、早春のうららかなさは逆に、私の気は重くなるのだった。

隣りの息子

東京都杉並区 根本 由果里

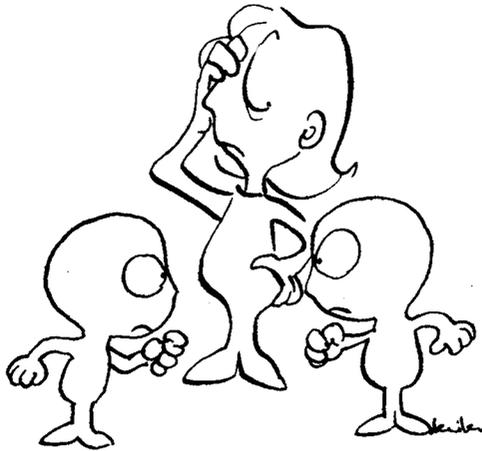
我が家の隣りに住む小学一年生のH君は、学童保育が終って五時に帰宅すると、それから共働きのおかあさんが戻る六時過ぎまで、毎夕一時間余りを、我が家で過ごす。

去年の春、小学校入学の少し前に引越して来たH君は、彼より一歳年下の我長男に、背丈も体重も少しづつ負けていて、その頃たった一時間でも、夕暮れの家の中に独りぼつんと待っている姿を想像すると、いかにも哀れに思えた。それと、フルタイムで

働くH君のおかあさんが、男向けにできて
いる社会の仕組みの中で、H君とその妹の
二人の子供を抱えて苦戦しているがんばり
に対して、少しでもバックアップしたいと
いう気持が手伝って、我家で預る事にした
のだった。

しかし、そうして我家で過ごすひととき
も、時を経るうちに、様々なトラブルを積
み重ねる様になった。たとえば、六時に夕
食になる我家の台所からは、H君のいる間
中良い匂いが立ち込めていて、お腹をすか
した彼が、我家で夕食をしないと泣く事の
続いた時期。息子とハデなけんかを始めて
うまく遊べない日々があったり、三歳の次
男や、一歳の長女を扱いかねて、焦立って
ばかりいた頃。私の側からも、家族の誰れ
かが具合を悪くしていた日、朝から外出し
ていて忙しい一日も、急な用事で夕方留守
にする時も、H君の存在は常に気にかっ
て、苦しくなかったと言え、嘘になる。

H君が六歳を過ぎていて、不安定ながら
も、とにかく独りで自分の家で待ってい
られたから、そこに一線を引いて、苦しい時
には家に帰ってもらったことで、どうにか



今日まで続けて来られたのかもしれない。
けれど、人と人との関係と言うものは、
そうした理性の一線を引く事では、決して
割り切れて行かないものだと言う事が、こ
の頃、身にしみる様になって来た。けんか
をしながらも、毎日遊ぶ事で、強い絆を持
つ様になった息子とH君。H君を家族同様
扱わない事で息子の不満はくすぶっている
し、H君自身も他人者としての待遇に、決
して甘んじてはいない。それは、私と彼と
の信頼関係を問うものでもあり、典型的な
都市型サラリーマン家庭の個人主義に、疑
問を投げかけるものでもあった。そして又、
もしかしたらH君を預ったのは、息子の友
達が欲しかったという、自分の側の身勝手
な理由によるもので、だから都合が悪くな
ると帰す、という中途半端なやり方になっ
たのではないかと、自己批判する事にも
つながった。

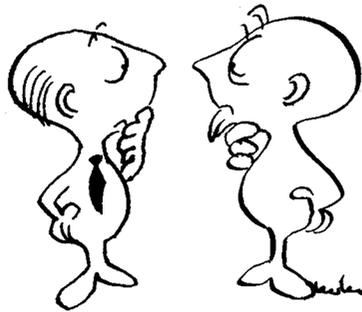
しかしその一方で、H君を我家で預る事
によって、比較的時間の自由になる職業の
おとうさんが、もし我家がなければ、H君
と無理をしても関わったかもしれないチャ
ンスを、逃してしまっているのではないかと、

そんな思いもあって、全面的に受け入れる事もためらわれ、私はいまだに迷っている。

けれどとにかく、この一年間を彼と共に過ごしてみて、日君も息子も私も、苦しみながらも学んだ事は少なくない筈だ。そして又私は、日君のおかあさんから、その生活ぶりを通じて、女の人がフルタイムで働くことのツケを、しっかり見せてもらっている。

この春二年生に進級する日君は、夕方の一時間を独りで待つ事は、もう充分できると思う。でも、おかあさんが日君に安心して留守番を任せられると言える様になるまで、私はもうしばらく日君とつきあってみたいと思っている。

地域社会での人と人との関わりをどう考えるか、フルタイムで再就職すべきかどうか、私のエゴやみにくさも含めて、そんな問いを、日君はまた絶え間なく私に問いかけてくるだろう。



父を想う

岐阜県岐阜市 市川 弘子

家庭内暴力、校内暴力、親殺し、子殺し、毎日の新聞から、こんな文字の消えた事のない程、子供の非行が紙面を埋める。幸か不幸か私には子供がいない。すっかり早合点してましてその源をなす夫婦すら放棄してしまっている私。でも私には両親が居る。そして父親が居る。以前書いた事があるけれど、私の父親は私が嫁ぐ頃になっても、まだ祖父の手の中であつた。今でいう過保護な息子である。今ならとくくの昔に粗大ゴミになっている事であろう。そんな父でも私達姉弟には、父親の存在は絶対であつた。それは母と祖父母が私達に知らしめてくれたのだ。戦後、強くなつたのはくつ下と女だといわれた時があつた。そのくつ下も今ではあまり強くなつた。だが女は依然強い。ママゴンドのマザコンだの何か得体の知れない怪物の様な名前を付けられて、子供や亭主をあやつっている様に見える、子供には「○○さん家の××ちゃん

は一流の高校、大学を目指してがんばっているのよ、貴方もがんばってよママのために」そして一方「お父さん〇〇さんは部長に昇進なさったそうよ。あの方貴方より二つ後輩でしょっかりして下さいよ、私や子供達のためにもお父さんだけが頼りなんです」等々弱い？ 女と子供の双刃の剣で

背中をつかれ、満員電車にもみくちゃにされて、やれ会社についた頃に疲れがどっと出て来る。そこへもってきて上からはガミガミ、下からツンツン、帰りに屋台で淋しい懐をはたいて、うさを晴らして家に帰れば「こんなに遅くまで、何してたんです、お酒飲んで来たの……そんな余分なお金があったら……」等といわれ、ただひたすら家族のため、給料運搬人というロボットにされてしまった、どこでどうすり替ってしまつたのであろう。こんな事をいえば、皆んな女が悪い様になってしまふけれど、正直、女にはどこか底意地の悪い部分がある様に思う。それが時として頭をもちあげるのだ。

今、一番自殺率の高いのが、社会の中堅である中年男性、次に高校生中学生、年々

低年齢化していると云う。それに反して女の寿命は長くなって来たのも皮肉である。

たとえどんな父親であれ、子供にとって、欠くべからざる存在であると思う。又、あるべきだと思ふ。

今、私は、どんな親しい男友達より、老いた父としみじみ酒が飲みたい。

「わいふ」に出会って

群馬県前橋市 新木 ひろみ

初めておたよりいたします。「わいふ」を手にして一カ月、嬉しい気持ちでいっぱいです。日本中の読者の方と茶の間でおしゃべりできるのもですもの。こんなすばらしいことはありません。

私と「わいふ」との出合い。それはただ「わいふ」という名前だけ。毎日新聞に載った雑誌「わいふ」を読みたくて、あちこちの書店、図書館を捜して歩きました。でもいつもおさまりの返事。

「いいえ、扱っておりません」
そろそろあきらめかけていた時新聞の「ぐ

るぶ」欄に載っていたのです。連絡先もTELも。早速購読申し込みをしました。折り返し、「わいふ」誌を一冊送ったの、ていねいな御返事をいただき、御心づかい本当に嬉しく思いました。

それから一日一日が待ちどおしくて、首を長くしてポストをのぞいておりました。若かりし頃、彼（今の主人）からの手紙を待っていた時よりもワクワクと胸をおどらせていました。

現在バッグの中に「わいふ」を入れて出かけます。子供の歯医者やおけいこの待ち時間に、ちょっと雑誌を開いては読んでおります。そして愉快な記事に一人クスクス笑ったりして……。これからも皆様と誌面の上でおつき合いをしたいと思います。よろしく。

最近の「わいふ」に感じる事

神奈川県鎌倉市 小松 雅子

最近「わいふ」に少々魅力を感じなくなっている。斯く言う私も、ほんの少し前に

は、「わいふ」の誌面を借りて自分のウツ
プンをはらし、日常のイライラを解消して
いたのであるが、現在の私があるのもその
時の「わいふ」のおかげなのである。が、
何故いま「わいふ」に魅力を感じなくな
ったのかと言えば、今の貴誌には、私が取
り付いた時の一種の荒々しさ、稚拙さ（失
礼な言い方かもしれないけれど、私でも書
けた位大衆的だった気がする）が無くなり、
何となく馴染めなくなった感がある。もう
一つ、何か、一つの片寄った流れにのっ
ている様に思われる。

例えば、女の自立という点に重点を置き
過ぎていたのでは？ 今回（一八〇号）の
「わいふ」誌上論争を読んでいても、「わ
いふ」の編集室の雰囲気伝わって来る様
で、（私は、空閑さんの意見に賛同する方
なので）「わいふ」を編集している皆様と
は、意見を異にする為馴染めなくなってい
る。

「わいふ」の編集部が、声を大にして言う
『女の自立』って、一体何なのかしら？
男と同種の間になれって事でしようか？
それなら、男にも女にもなれって言えばい

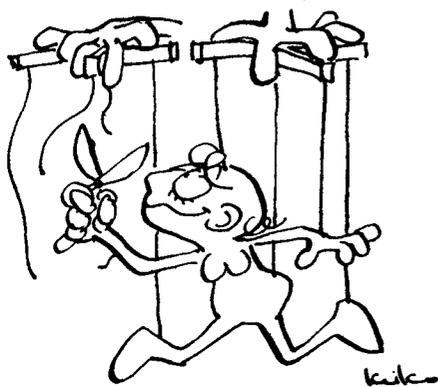
いのでは？ 確かに、今の社会組織は、男
中心社会だと思えます。地方に行っても男
尊女卑が多いし、嫁姑の問題にしても、女
性差別を痛感します。でも、個人単位の家
庭を覗いてみると、必ずしも全女性が差別
を受けているとは思えない。少なくとも、
私の周りにはいる女性を見ると、（私も含め
て）少しづつではあるが、人間性を取り戻
しつつある様にみえるのです。そして今（短
絡過ぎる物の見方かもしれないが）女性が
自立を望んでいる職場で、働く男性達の裏
にもう一つの女性達が居る事を、忘れては
いけないのでは？ 即ち、今の男社会を作
っているのも女性が「役を買っている事」を。

そして我家の事を言わせてもらいますと、
会社勤めの夫を持つ妻としてみれば、朝五
時に起き、六時半に電車に乗り、九時から
五時迄実際は八時迄、ヘトヘトになって働
き、又片道二時間かけて電車に揺られて、
帰宅するのは何時も十時、十一時、三六五
日風邪をひいても休まず、妻の為、子供の
為と頑張っている我主人を見ていると（こ
んな良い夫になってくれたのも数年前、私
が「わいふ」と巡り合えたから）現在の私

は、とても女の自立がどうの、と夫に主張
する事は出来ません。

今の私は文字通り、わいふとして、主人
が病気になる様、子供に悲しい思いを
させない様、そして、私が倒れてしまっ
たら、家族皆が困るので、適当に疲れない様
に家事の手を抜きながら、明るい家庭を築
く事に、全神経を集中しています。こんな
わいふは、今の「わいふ」の編集室から見
れば、「わいふ」の落伍者なのではないで
しょうか。

（え・松本圭以子）



投稿規定

定期購読者はどなたでも投稿できます。

(定期購読申込は直接編集部へ)

チャター・ボックス

●職場レポート(四千字まで)

あなたの職業体験や、職場でのトラブルなど、具体的に切実なレポートを求めます。

●随筆(千六百字まで)

●親ばかチャンリン(千二百字まで)
子どもにまつわる苦しみ、楽しみ、悩み、ユニークな体験などをお寄せ下さい。

●エコー(千二百字まで)

わいふ誌上の投稿、記事などに関する反論、感想、批判など。

●私の視点(千二百字まで)

問題提起、意見、なんでも自由に。体験の実感のあるものを歓迎します。

●おしゃべり(八百字まで)

おたより其の他、気楽なおしゃべり

のページ。おたよりをそのままのせさせていただくことがありますので、掲載をご希望でない場合は必ず「私信」と明記してください。

情報コーナー(二百字まで)

あげます、貸します、こんなこといっしょにしませんかなど、何でもお知らせ欄。扱っていらっしやる商品やおしごとは「私のPR」として一括します。

サークルだより(八百字まで)

サークルでの集会・その他のニュースなどを寄せて下さい。原稿用紙にまとめてお願いします。

●以上の欄にお寄せ下さった投稿は、原則としてすべて掲載いたします。

テーマ原稿

テーマ原稿募集欄をお読み下さい。

持ちこみ原稿

長さ自由。
旅行記、詩、小説など、何でも。

わたしの生活誌

「わいふ」の読者は全国各地にちらばっています。郷土色に溢れた珍しい話や、画一的な核家庭の暮しとはちがうユニークな日常を送っていらっしやる方、どうか興味深いレポートを送って下さい。

●以上三点の原稿は編集部で協議の上、えらばせていただきます。採用分にはいずれも薄謝をさし上げます。

わたしの一冊

これまでの書評欄でなく、この一冊こそ絶対にみんなに読んでもらいたい、という一冊を、ご紹介下さい。編集部一同で回し読みした上、ほんとうにすばらしいと思ったものに限り掲載します。新刊書でなくともかまいません。

テーマ原稿募集

●一八三号のテーマは「隣人があなたを訴える」（仮題）にきまりました。

先般、隣人に預けた子どもが溜池で水死し、両親が隣人を訴えて有罪判決の出た事件とその後の経緯は、社会的に大きな議論のまとなりました。編集部でもこの問題については甲論乙バクで、どう考えたらよいか、迷いは深まるばかりです。

この問題だけでなく、このところ編集部、労働協約を結ばずに就職してあとで大きなトラブルがおこり、ノイローゼになった若い娘さんのケース、五人きょうだいの遺産相続をめぐるケースなど、個人的な相談ごとが次々と舞いこみ、法律をめぐる日本人の意識に、問題が多いことを痛感させられましたので、あえてこの問題に挑戦してみようと思います。

●日本は法治国家ですから、個人個人の間で解決のつかないトラブルがおこると、最終的に法律のきまりに従って解決されます。しかし日本人は「法」という、みんながそのルールに従って生きるべき基本的な取

りきめを、ほとんど念頭におかずに生活しているのではないのでしょうか。むしろ「法」が生活の中に入りこんでくるのを、無意識的に避けようとしている面があるのではないのでしょうか。口約束をすませせてあとでトラブルが起ったり、一人合点の善意でことを運んで、結果は法的にほとんど無効だったり、欧米人とまったく異なる日本人の心理が、近代化した社会でものごとを運営する上で大きな障害になっているように思われてなりません。

●あなたの生活の中に、法律が大きくクローズアップされた体験があたりではありませんか。結婚、離婚、就職、相続、市民運動、PTA、自動車事故……数えてみれば身近に、法律がものをいう場合はたくさんあります。法律が念頭になくてひどい目に会った例、法律を知っていたために助かった例、訴訟という極端なケースでなくとも、生活の中で体験なさったあなたと「法律」との関わりを書いて下さい。四百字二十枚—二十五枚、締切五月三十日です。

お友達に（わいふ）をおすすめ下さい

新しい読者をご紹介下さった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介下さることに、誌代プラス送料とも一回延長。
（六人ご紹介下されば、翌年の誌代・送料とも無料になります）

△わいふ▽年間分をプレゼントにお使い下さい

●ご結婚のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。

お申込みただけは、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしてお知らせし、以後毎回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただきます。

編集だより

●一八〇号のセックスマンケートに、ほんとうに意外なほどの大きな反響をいただきました。しかもどれもこれも、誠意をもって回答して下さった姿勢が手にとるよう。ほんとうに有難うございました。分析には大分時間がかかりそうですが、さっと目を通したかぎりでは、性の実体は実に千差万別、個人差が大きく、この問題を一律に扱うことの危険性をひしひしと感じます。

●そこで故めてお願いがあるのですが、アンケートにご回答下さらなかった方々は、これからでも遅くありませんのでぜひ回答をお寄せいただきたいのです。嬉しい見込みがいなのですがこれだけ充実した反響がありますと、△わいふ▽の誌上にのせるだけでなく、きっちりした形でまとめて世に聞きたいと思えますので、そのためには少しでも多く数を揃えたいと考えます。締切は四月末日。どうぞよろしくお願いいたします。

●新連載の△誌上論争▽は好評で、十人近い方からご参加の申込みがありました。最終的にその中四人の方に登場していただ

きました。議論を並列の形で掲載しましたので、多少読みとりにくい感じを持たれるかもしれませんが、座談会とは違ったスタイルで、とあえてこういう形にまとめてみました。次回は違うテーマで試みたいと思いますので、ご希望のテーマをお寄せ下さい。

●一八〇号から登場した新しいイラストレーターの松本圭以子さんは若冠二五歳のノン・ワイフです。最近二十代の編集スタッフも加わり、平均年齢がぐっと若返りました。四月十日号のクロワッサンに編集部の写真がのっています。

●△わいふスクラップ帖▽今回は休載いたします。

●△職場レポート▽の欄に充実した投稿をお待ちしています。規定オーバーでも持ちこみ原稿として扱いますので、ぜひ職業体験をお寄せ下さい。

●四月の面会日は十九日(火)です。お電話でご一報の上お出かけ下さい。毎回色々な方とお目にかかれるのを楽しみにしています。ではまた!

□購読申込は

ハガキか電話でどうぞ。
すぐ本に振替用紙をそえてお送りしますので、折返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上まとまりますと送料が半額以下になります。

わいふ

181号

1983年5月1日発行
印刷・浩文社印刷

定価 450円

(年間購読料送料共 3600円)

発行所・懶グループわいふ

編集・わいふ編集部

東京都新宿区加賀町2-4 ☎162

TEL (03) 260-4771

郵便振替 東京5-110430

銀行口座三菱銀行神楽坂支店

普通預金 052-4348909

□購読中止は……

かならずお申出ください。送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れてもひき続き送本しています。お申出がないと、お送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

古在由重・小林登美枝著

愛と自立

●紫琴・らいてう・百合子を語る

哲学者と主婦の
ユニークな対談!

明治以来一〇〇年の婦人解放史の走路を全力をあげて疾走した三人のランナー。紫琴(由重氏の母)・らいてう・百合子。時代に先駆け、険しい道歩きとおした三人の女性の「生き方」と世に知られない数々のエピソードを縦横に語りあうさわやかな対談集。彼女たちの人生に、対談者自身の人生観、女性観が織りかざった現代女性論。46判カバー・1200円

NHKでテレビ放送
ドラマ人間模様「いつか来た道」2月27日

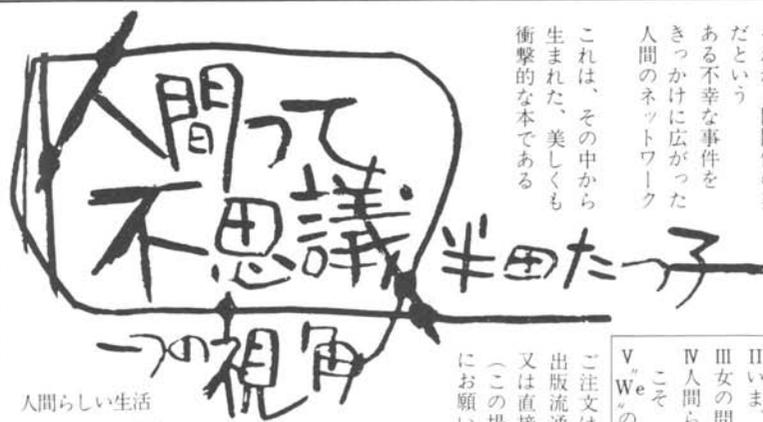
過ぎたれど去らぬ日々

寿岳章子著 ●わが少女期の日記抄 1200円



東京文京本郷2-11
電話03(813)4651

大月書店



まだ解明されていない美
それが人間関係の美だという
ある不幸な事件をきっかけに広がった人間のネットワーク

これは、その中から生まれた、美しくも衝撃的な本である

- 目次
- I 美しいひとたち
 - II いま、親であること
 - III 女の問題をめぐって
 - IV 人間らしいくらしをこそ
- V Weのいでたち

人間らしい生活
いきいきした教育
差別のない社会を
志す人の雑誌

定価1500円 送料300円

新しい家庭科

We ウイ書房

182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
Tel - 03(326)1380 振替 東京6-59867

お子さまの歯の健康を守る のは、お母さんの役目です。

■わいふ 一八一号 一九八三年五月一日(隔月間)発行



はみがき・ハブラシは、お子さまの年令に合わせて選ぶことが大切です。ライオンのこどもシリーズはすぐれた品質でお子さまの歯の健康を守ります。




 暮らしをみつめる
ライオン
 ライオン株式会社

定価四五〇円